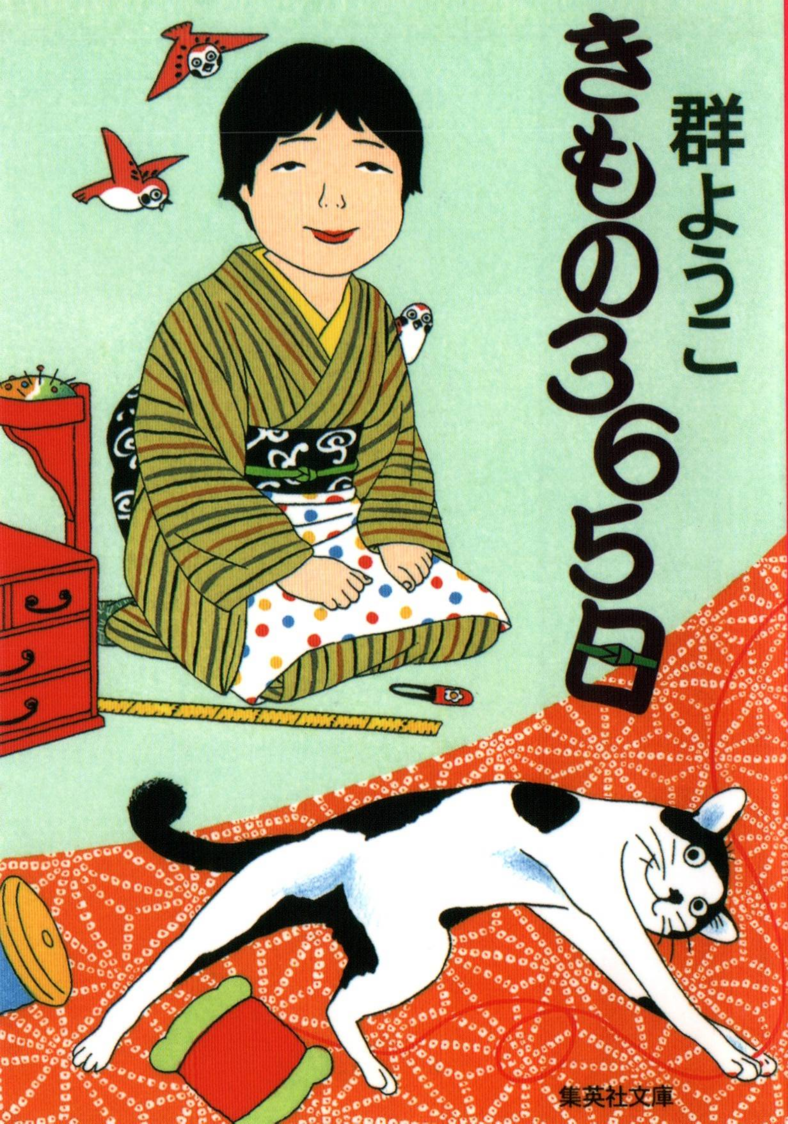
# きもの365日

群ようこ



集英社文庫

群ようこ きもの365日

む 3 6

集英社文庫

ISBN978-4-08-747700-9
C0195 ¥990E

9784087477009

1920195009901

定価 本体990円＋税

きものは大好きだけど、あくまでも「非日常着」だった著者が、1年365日きもので過ごすという試みに挑戦。ところが、思わぬ所から冷えて風邪をひいたり、針仕事の大変さに目を回したり、失敗と試行錯誤と発見の繰り返し。生活形態も変わり、愛猫も目をパチクリ。働き者の「昭和のおかあさん」をめざして奮闘した1年間。写真やイラストも充実、きもの生活のガイドとしても役立つ、傑作日記エッセイ。

## 集英社文庫 群 ようこ 作品

トラちゃん
姉の結婚
で も 女
トラブル クッキング
働 く 女
きもの365日
小美代姐さん花乱万丈
ひとりの女
小美代姐さん愛縁奇縁
小福歳時記
母のはなし
衣もろもろ
衣にちにち

む-3-6


撮影／鍋島徳恭

**群 ようこ**
むれ・ようこ

1954年、東京都生まれ。日本大学芸術学部卒業。広告代理店、商品企画会社を経て、「本の雑誌社」勤務の傍ら、エッセイ『午前零時の玄米パン』を発表、注目を集める。『かもめ食堂』『衣もろもろ』『ゆるい生活』『衣にちにち』『ほどほど快適生活百科』『しない。』『咳をしても一人と一匹』ほか著書多数。

イラストレーション／甲斐ヨネ
カバーデザイン／岩崎誠司



# きもの365日

群　ようこ

集英社文庫

# きもの365日

群　ようこ

集英社文庫

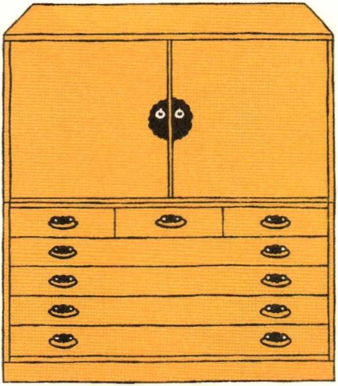
この作品は、集英社文庫のために書き下ろされました。

# 目次

イラスト　甲斐ヨネ
デザイン　岩崎誠司

㈟本文中、＊付きの用語は、巻末の「きもの用語集」を参照。

# きもの365日



撮影　鍋島徳恭
スタイリスト　秋月洋子
ヘアメイク　木戸口恵子


「一月」

## 一月一日のコーディネート

きもの　泥染めでない糸の、機械織の大島紬
帯　黒地に更紗(さらさ)柄(がら)の木綿の半幅帯
半襟　ピンクベージュの縮緬(ちりめん)
襦袢　淡いベージュ地に、ぼかした紫色の茄子(なす)が散った柄
足袋　緑色の地に白で松葉の柄が散ったもの



きもの生活の必需品、針箱

# 一月



## 一月一日

毎日きものを着る「きもの365日」という日々のはじまりである。といっても何が何でも意地になっても毎日着るというわけではない。大雪、颱風、大雨のときに外出する必要があった場合、その他、ふさわしくないなーと思ったときは洋服にする。それでもそれはひと月に一日か二日、あるかないかくらいにしたい。と決意をして、しょっぱなのきものは偽大島である。機械織で泥染めでもない、糸だけ大島という代物。帯は以前、*着尺を羽裏（羽織の裏地）にした残りを半幅帯にしたもの。足袋はずいぶん前に京都の「分銅屋」で購入した、緑色の地に白で松葉の柄が散ったもの。襦袢は色合わせを考えなくていいので重宝していた、

淡いベージュ地にぼかされた紫色の茄子（なす）が飛んでいるのを、ふだん用におろすことにして、ピンクベージュの半襟（はんえり）をつけた。実は大晦日（おおみそか）に襦袢を出してみたら、襟がついていなかった。幼いころ両親から、

「元日に針や刃物を持ってはいけない」

といわれていたので、大晦日の夜にあせりまくって半襟をつけたのである。

朝、パジャマを脱いで、すぐにきものを着るという経験はなかった。服に着替えてから用事をすませ、それからきものにという段取りだったので妙な感じがする（毎日きものといっても、夜、寝るときはパジャマである）。

襦袢に*上前（うわまえ）と*下前（したまえ）をとめる、伸縮性のあるきもののベルトをためしてみる。愛用している人に聞くと、胴まわりをひもで締めないので、とても楽だという。たしかに襦袢を伊達締め（だてじめ）で押さえないので楽は楽だ。半幅帯を*貝（かい）の口（くち）に締めて、帯の下は伊達締めだけで帯板はなし。限りなく黒に近い焦げ茶色のきものなので、明るい黄色に緑色の絞り染めの半幅帯が映りがいいのではと思ったけれども、意外に地味だった。名古屋帯や袋帯なら、きものと帯の色合わせでは地味だと感じても、帯揚げ、帯締めで色を補えるが、半幅帯はそうはいかないので、派手めにしたほうがいいようだった。黒地に更紗（さらさ）柄の木綿の半幅帯にかえてみる。

まず顔を洗うのにも難儀である。袂（たもと）という代物が行動を邪魔してくれる。

「朝から割烹着（かっぽうぎ）の出番か」

と嘆きつつ、割烹着を着て顔を洗う。これまた鏡に映った姿を見て、

「これではいかんのではないか」

と反省した。似合いすぎるのである。五十路(いそじ)に手が届くようになった今は、似合いすぎるというのはちょっとまずい。一歩、間違えると、所帯も持っていないのに、所帯じみてみえるのである。たしかに私のめざすイメージは昭和のおかあさんなのだが、それにしても毎日、割烹着を着ていると、そのまんま所帯じみて老けていきそうな気がする。歳をとるのはいいが、老けるのは嫌だ。あとの選択肢は襷(たすき)と前掛けである。前掛けは半年ほど前に気まぐれで縫った一枚だけだ。押入を探していたら、木綿の布が出てきたので、これで何枚か前掛けができそうだ。

次に問題なのはトイレだった。きものを着るときは、食事、用便等すべて済ませて着ていたので、「小」はともかく「大」をした経験などなかったのである。自宅トイレで私はものすごくうろたえた。出るものも出なくなりそうだった。こういうことにも慣れていかなくてはいけない。夕方、昔作って、着る機会がなかった絞りの道中着*を着て、近所のポストまで郵便物を出しに行った。

## 一月二日

肌着類、足袋はもちろん毎日着替えるが、きものと帯は昨日と同じで足袋をワイン色の別珍(べっちん)に替えた。裏がネルなので足がぬくぬくしてうれしい。割烹着をどうしようかと考えつつ、襷(たすき)掛けをやってみる。形としては∞で、ばってんが背中に、両方の丸のなかに腕と袂が入るわけだが、襷にどのていど袂がひっかかっていればいいのかわからず、ひもを結び終わっ

たあと、ぐずぐずと微調整をする。テレビや映画で見たように、事が起きて、

「あいよっ」

というわけにはいかないのである。いくら偽物の大島とはいえ、絹物となると濡れるのが気になる。だいたい、そういう物を家で着なければいいのだとうなずく。ネコはふだんと違う私の姿を、不思議そうな目で見ていたが、膝の上には乗ってくる。ソファに座ってDVDを見ながら、ふと胸元に目をやると、糸がびろーんと出ている。半襟をつけたときに、途中で面倒くさくなり、こんなもんでいいかとやめたところが、ちょうどそこの部分だったのだ。あわてて中につっこんで隠す。

襦袢につけたきものベルトだが、楽ちんなのは確かなのだが、どうも襟元の落ち着き具合がよくない。ひどくはくずれないけれども、後から直そうと思っても、融通がきかないので直しようがない。家事をするとなると、外出するよりも運動量が多いので、襟元もくずれやすくなる。自分で直せないとなると辛いので、ベルトはやめにして、襦袢に子供の着物のようにひもをつけた。以前はつけていたこともあったが、襦袢を脱いだときに、びろびろーんとひもがついているのが嫌で、すべて取ってしまったのだ。市販されているモスリンの腰ひもを半分に切り、身長、体型によるけれども、私の場合は肩から四十二センチの位置に、ひもの上端がくるように綴じつけていた。特売のときに買っておいたモスリンの腰ひもがあったはずだが、見あたらないのでモスリンの端ぎれをひも状に縫ってつける。明日着る予定の襦袢にもつける。びろーんと出ていた糸のところも直した。これからは毎日、針を持たない

日がないような気がしてくる。飽きないか心配になる。

## 一月三日

寒いのできものを地厚な茶色地のヘリンボーンにオレンジ色で格子が入っているウールのきものにする。帯も地厚な木綿。足袋は赤紫色の別珍。大島に比べてウール百パーセントのきものははるかに暖かい。それに汚れたらクリーニングにも出せるし、家でも洗えるし、気分的にとても楽だ。襦袢は高校生のときに母親が作ってくれた白地に赤い小花柄のもので、袖（そで）は無双（*むそう）になっている。袖の内側が赤地に白の小花と逆になった無双のものである。若いころは地味好みだったから、こういった柄はかわいすぎて着ようという気がなかったのだが、最近は襦袢や小物だったらいいかなと思うようになった。おととい、昨日よりも着崩れが少ないようだ。大島はすべりがいいし、半幅帯できものを固定する面積も少ないから、動いているうちに、上半身がぶくぶくしてくる。そうなったら直せばいいのだが。

夕方になると帯が重くなってきた。柄が気に入っているし、仕立ても悪くないけれど、私には長時間締めるには不向きと判断する。

## 一月四日

帯を二十数年前に買った袷（*あわせ）の博多半幅帯に変更。*ての部分の折り山がすれているが気にしない。格好よく貝の口に締めるのに二度、締め直したが、形がきまるとぴしっとして、まことによろしい。折り返しのところが角度何度、こちらの部分が角度何度と、数学的には美的角度が計算できるのだろうが、こちらは目でみてよしと思うだけである。足袋は赤茶色の五

枚こはぜだが、これは足首が締められて、家で履くには不向きだった。いちばん上のこはぜをはずして履く。このところふだん着におろした正絹の襦袢を着ているが、今後、どうしようかと考える。一日、二日と着ていた茄子柄の襦袢は、以前何回も着たあとに、*生洗い代をけちって、自分でシルク用のお洒落着洗いで洗ってみたら、ちょっと縮んじゃったのである。かといってポリエステルは嫌だし、*うそつき（二部式襦袢）でもいいから天然素材にしたい。毎日のことだから、気軽に洗えないと困るし。

## 一月五日

とりあえず襦袢は風を通したものをとっかえひっかえ着ているものの、頭から襦袢のことが離れない。半襟だって丸一日身につけているとなると二回着たら取り替えたい。ポリエステルはちくちくするので、端ぎれが入っている収納ケースをひきずりだして、半襟になりそうなものをチェックする。

去年、試しに買ってみた木綿のうそつきの袖を、手持ちのうそつきの晒の本体に縫いつける。またお針である。これでまた二日はもつ。きものや帯はともかく、これからは襦袢とその下に着るものをどうするかを考えなくてはならない。そのときにあたふたして、針仕事で追いまくられるのは嫌だし、効率がいい方法を考えなくては。そういうことを考えられるのも今のうちだ。来週からは仕事はじめで、そんなことはいっていられなくなる。

ウールきものに博多帯の組み合わせは、家で着るにはとてもよかった。日常着でも外出着でも最大のネックは帯だ。博多の半幅帯は軽くて締めやすく、形もきちっと決まってくれる。

だんだん歳をとってくると、重いのは辛い。これからは基本的に博多帯でいこうとひとつ方針が決まって、ちょっとうれしい。

## 一月六日

昨日のウールと色違いのグレーのウールを着る。はっきりいって少し疲れてきた。もう頭の中はきもののことでいっぱいで、他のことが考えられない。先が思いやられて不安になる。新年早々、楽しいとはいいながらも緊張していたのか、肩こりまで出てきた。あまり必死にならないように自粛しよう。うそつきの裾除けと袖になりそうな、絹の端ぎれをチェックしてみる。着尺を羽織やコートにした残りぎれや、セールのときに買っておいた襦袢地など、あるにはあるが、これを自分で縫わなきゃならないかと思うと、好きなこととはいえため息が出てくる。

## 一月七日

今年はじめての小唄のお稽古である。さすがに初稽古に半幅帯では失礼なので、若草色の無地の紬に、若草色の地に茶でかすれた格子を描いた道中着。ブルー地の更紗柄の名古屋帯を締めていった。半幅帯で慣れているので、帯揚げ、帯締めが必要な名古屋帯を結ぶのがとても面倒くさく感じる。師匠には、

「来年から『きもの365日』という企画がはじまるんです」

とお話ししてあり、そのときに、

「大変ねえ。お稽古のときも面倒くさかったら、洋服で来てうちで着替えちゃえば」

とおっしゃっていただいたりもしたのである。大正十四年生まれの師匠はもと芸者さんで人生のほとんどをきもので過ごしてこられたので、ふだん着の襦袢はどうしていらっしゃるのかと聞いた。すると身頃が晒で洗いがきく、うそつきを愛用なさっているとのこと。またどうしても浴衣（ゆかた）がたくさんたまってしまうので、何度も着て柔らかくなったものを*対丈（ついたけ）に切り、半襟をつけて家の中で着るときの襦袢がわりになさっているという。みせていただいた浴衣襦袢には、紺色の半襟がつけられていた。

「じゃんじゃん洗えていいんですよ。ただ袖口から見えるとちょっと具合が悪いんでね。袖口が締まった上っ張りを着るとわからないでしょう」

　また冬場には本当に生地が弱くなってしまった浴衣を二枚、刺し子（さしこ）の要領で縫い合わせる。もと師匠のところにお手伝いで来ていた方が、

「こうすれば薄くなった浴衣でもまだ役に立ちます」

　と縫っていたそうで、補強のためもあったのだろうが、とても細かい針目で縫い合わせてあったという。師匠自身は*並幅（なみはば）を六等分したくらいの間隔で縫ったそうだ。信じられないくらいに暖かいのだが、やはりごろごろするし、薄くなったといっても、二枚合わせは重いので、着なくなってしまったそうだ。

「まだありますよ。そうねえ、浴衣でも四十年は経っているかしら」

　こういう知恵はどこにも書いていない。まさに毎日、きものを着ていた日本人の生活の知恵である。これができるのも、浴衣が木綿だからである。ポリエステルだったら、絶対にこ

うはいかないだろう。江戸時代はきものは最後には燃やされて灰になっても、その灰を集めて洗濯屋さんが洗濯をしていたというくらいだから、本当に燃え尽きるまで人々の役に立っていたのだ。

一緒に小唄を習っている青木奈緒（あおきなお）さんも、きもの姿でいらしていた。お正月らしい白地に墨描きの花に桃色の濃淡で色づけられたきものに、黒地に赤や白の小さな絞りがとんでいる羽織という品のいい姿だった。彼女の雰囲気にとてもよくお似合いだ。

「これ、七歳のときのきものなんですよ。派手でしょう。今着ないと、着るときがないと思って、えいっ、て着てきたの」

さすがにいい生地は何十年経っても、へたることがない。羽織もお母様譲りというお話だったが、こちらも生地がいいので、古さを全く感じさせない。

「今ね、三十代の若い女の人がブランドに飽きちゃって、『ちょっときものでも着ようかしら』っていう風潮になっているでしょう。あれってちょっとねえ」

私も青木さんの意見に大賛成である。同じ意見の人がいたとうれしくなって、

「そうよね！　あんたたちは繰りまわし*とか、染め替えとか、知っているのかっていいたいわよね。きものというものは本来、そういうものですもんね！」

と鼻息が荒くなった。着捨てるように、新しいものを洋服のようにとっかえひっかえ着ても意味がない。あるものをどのように繰りまわし、必要があったら仕立て直すのが、きもののいちばんの面白さなのだけど、物が豊富な時代に育ってしまい、親がそういうことに気遣

いをしていなければ、ほとんどの若い人には理解できないことなのだろう。

「今日のおきものは、作家さんの物ですか」

と聞かれたのだが、

「いいえ、ぜーんぜん。反物で七万円くらいだったから、機械織で化学染めだと思いますよ。ただ裏も無地にするとつまらないので、表地と同じ色に白で和歌を染め抜いた裾回しをつけてもらったの」

とお見せした。

「青木さんもいかがですか？　これからお稽古のときはきものというのは……」

少しでも仲間を増やそうと彼女を誘っておいた。師匠には、

「来週からはふだん着でいいのよ。半幅帯でいらっしゃいね」

といっていただいた。

お稽古の帰り、浅草の小物・呉服の老舗に寄って、出来合いの正絹のうそつきがいくらくらいするのか聞こうとしたら、ほとんどがポリエステルで、正絹では白地のものはあるけれども、友禅などの柄物は誂えでしか扱っていないと聞いてびっくりした。

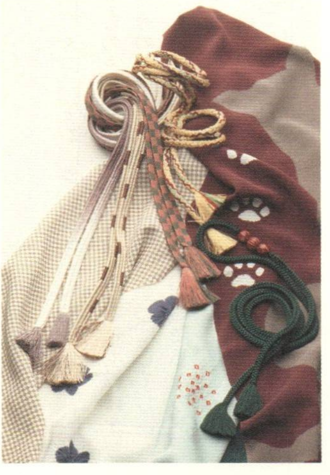
「今はそんなふうになってしまいまして」

店の男性がみなさん恐縮してくださるので、こちらも恐縮してしまう。ふだん用の色半襟も各色揃っているのかと思ったら、

「申し訳ありません。こちらにあるだけなのです」



1月7日
若草色の
真綿の紬に
更紗柄の染めの
名古屋帯



袷の季節に使う
帯揚げ、帯締め
いろいろ

と数色を見せてくださった。礼装用の華やかなものやポリエステルはあるけれども、日常着用は浅草の老舗でも数が少なくなっているらしい。何度も、

「申し訳ありません」

と頭を下げられてしまって当惑しつつ、

「いえ、あの、本当にどうもすみません」

と正絹の色半襟を三色買ってきた。どんどん日常着用は品薄になっている。日常に着る人のほうが少なくなっているから、当たり前なのかもしれないが。少し悲しい。

**一月八日**

きものに袖を通す気にならず、洋服を着る。やっぱり洋服は楽ちんなのだなあと思う。でもつまらない。

**一月九日**

取材が二件あるので、午後から出かける。去年デパートのセールで買った縞結城(しまゆうき)に、二十八年前に母親が作っておいてくれた草木染めのきものを仕立て直した羽織を着る。羽織はオレンジ色の地に大胆な更紗柄で、派手と思って、そのままタンスに入れっぱなしにしておいたのを、きものでなく羽織なら着る機会も多いかもと、母親の承諾をとって羽織にしたのだ。柄の色数が多いので小物はすべて羽織の中にある色にした。襦袢はタンスを探したところ、若草色の襟がついていたのがあったので、ずるずると引っ張り出した。

家に帰ってグレーのウールのきものに着替える。紬に比べるとウールは重い。洋服地で作

ったきものだからなおさらなのかもしれない。きものと帯をなるべく軽くというのが今後の課題である。襦袢問題も解決していない。とにかくなるべく労少なくして、最大の効果をあげるにはどうするか。まだまだ自然にさらっときものを着る毎日には、ほど遠い現実である。

## 一月十日

本日は麻雀（マージャン）である。袂がぱたぱたして、積んである牌（パイ）を崩したりすると他の人に迷惑をかけるので、洋服で出かける。

## 一月十一日

家に帰ってきたのは、午前十時半すぎ。夕方の六時から翌日の午前十時まで打ち続けていた。パジャマに着替えて倒れるように眠り、起きたら日が落ちていた。きものを着る時間なんぞありませんでした。

## 一月十二日

きものを着る気力なし。九日に履いた足袋を石鹸水（せっけんすい）につけていたのを思い出して洗う。都心に出ると足袋の汚れの激しさに驚くばかりである。だらしなさのため、ずっとつけてあったのが功を奏したのか、真っ白になってうれしい。ついでに薄いピンクと若草色の正絹の半襟を二枚、石鹸水につけ置きして洗ってみたが、やはり襟の折り山のところにうっすら汚れが残る。この前、浅草で買ってきた紺色の半襟だったら、目立たないかもしれないので、日常着用の襦袢には紺色をつけることにする。しかし針を持つ気分ではないので、明日にまわす。

## 一月十三日

帯、きものの整理。箱を抱えて移動したり、ほとんど和室での倉庫作業のようなものなので、きものはやめる。日常着に使えそうな名古屋帯などをベッドルームに移動し、小物も数を確認する。うそつきの上半身二枚分と、日常着用の正絹襦袢に半襟をつける。ここのところ本も読まず、とにかく頭の中はきもののことだけしかない。こんなことで締切りが近付いたら仕事モードになるのだろうか。

## 一月十四日

お稽古日。偽大島に去年、浅草で買った白地に太い矢羽根柄（やばねがら）の半幅帯にする。半幅帯にしてはいいお値段だったのだが、とても締めやすい。上にふだん用の絞りのコートを着る。草履は*からす表（おもて）に紺色の*印伝（いんでん）の鼻緒。家に帰ってみたら、一昨日うれしいくらいに真っ白に洗い上がった足袋の指の股（また）のところが、真っ青になっている。印伝の鼻緒の*前壺（まえつぼ）の色が落ちたのだ。天国から地獄に堕（お）ちた気分である。

「あんたは、ふだん履きに降格！」

からす表の草履を怒鳴りつける。濃い色の足袋でしか履けない草履になってしまった。おまけにどういうわけかこの草履、歩いていると左足のほうだけが、すぽっ、すぽっと脱げて、勝手に先に行ってしまう。畳表の草履はすべりやすいけれど、片方だけこうなるのはどういうわけなのだろうか。足袋の色がついたところに石鹸をこすりつけて、石鹸水につけておいたが、きっとついた色は落ちないだろう。いずれ濃い色に染めなければとがっかりす

る。

## 一月十五日

　私よりも少し年上の知り合いの女性と伊勢丹の御奉仕会（早い話がセール）に行く。煉瓦(れんが)色(いろ)の郡上紬(ぐじょうつむぎ)に、ざっくりした黄土色にブルーの四角と、赤い十字絣(じゅうじがすり)が並んだ織の帯を締める。半襟は辛子色がついていた、男物のグリーンの濃淡ぼかしの襦袢にする。道行*コートは仕立て直しの鉄色のろうけつ唐草(からくさ)。仕立て直しで気分を変えようと、手描きのおもちゃの柄の裏をつけたものだ。

　彼女と昼食をしているとき、きもの姿の写真を見せていただいた。ギャラリーのオープニングパーティで、他の方々からとても誉(ほ)めていただいたとのことだった。白大島が会場の雰囲気ととてもよく合っていて、美人がますます素敵に写っていた。

「ふだんは夫婦の会話なんて、ぜんぜんないんだけど、主人がね、『あのときは、かわいかったねえ』なんていうのよ。私の着る物に何もいったことがないのに」

　ご夫婦の会話のきっかけになって、よかったと思うばかりである。

　会場には好みが合えばお買い得の商品が並んでいる。私は彼女を店の紹介がてらお連れしたのだが、「千總(ちそう)」の小紋(こもん)の反物の中で気になるものを見つけてしまった。草木染めのピンク色とオレンジ色の中間色、東雲色(しののめいろ)といったらいいのか、その地に白抜きで小さな梅がびっしり並んでいる。派手なのは十分わかっているのだが、懐かしくかわいらしい模様なので、目がはなせなくなってしまった。

「これ、派手でしょうか」
店員さんに聞くと、
「いえ、そんなことはないですよ。あと十年、二十年と着られる色ではないですが、今、楽しんでお召しになるんでしたらいいですよ」
といわれた。どうしてもこれを着たくなってしまった。二、三年着て、派手になったら羽織にもコートにもできそうだし。小唄の内輪の会に着ていくことにして、買ってしまう。ああ、やっぱり反物を見るのは楽しいけれど、目の毒だ。
彼女のほうは薄い黄色の地にグレーの濃淡で大胆に十字絣が織り出されている紬を体に当てていて、大胆な柄がとてもよく似合っている。洋服姿からは想像もできないのだけれども、意外な柄ゆきが似合うとわかると、自分でも他人でも、新鮮な発見をしたようでうれしい。彼女もとても喜んで、その紬に決めた。
「きものが仕立て上がってきたら、またお食事でもしましょう」
とうなずき合う。
家に帰ってウールと博多の半幅帯に着替える。最近、家ではもう何でもよくなってきたような気がする。これではちょっといけないかも。足袋を、いつの間にか足袋専用になってしまった小さなバケツにいれて、石鹼水につけおきする。白足袋を真っ白く維持するのは大変だ。それに比べて色足袋の何と楽ちんなことだろうか。毎日履き替えるけれども、洗濯ネットにいれて洗濯機にいれればおしまいだからだ。人間、楽なほうへ楽なほうへ行くのは仕方

のきものを洗濯機にいれて洗う人のことも、何もいえないかも。

## 一月十六日

この本の担当のKさんに、これまでの原稿を渡す。道中着、きものと帯はこの前のお稽古のときと同じ。足袋は茶色で草履はふだん履きに格下げになった、からす表である。相変わらず左足がすぽっ、すぽっと脱げて、履きにくいことこの上ない。履いているうちに、慣れるものでもないようだ。想像と現実とがいかに違ったかをKさんに訴えた。

「大変ですねえ。でも一年の二十四分の一が終わりましたから」

と励まされる。しかしうそつき襦袢は縫わなくちゃならないし、絹の半襟をひんぱんに洗って乾かして、また縫いつける作業は延々と続く。木綿の半襟にするにしても、布をカットして縫いつける作業は必要だ。

「はあ、何とかやります」

買い物をして家に帰ると、濃い色足袋なので色落ちは目立たないが、左足の足袋のこはぜが全部はずれていた。いったいどうしてだ。草履に問題があるので、妙な歩き方をしたからはずれたのか。わからないことばかりである。腰の左側が痛い。

## 一月十七日

腰の痛みがとれない。ちょうど腰ひもを締める位置で、辛いのできものを着るのはやめておく。このときとばかり、うそつきの木綿袖を縫おうとしたが、ネコが布の上に陣取って、

何もさせてくれない。
「あーん、あーん」
と甘えて鳴いて、抱きついてくる。うちのネコは私がきものを着ると、どこかに出かける
と思っているようで、今年になってからいつも不審な目で見るようになった。いちばん嫌い
なものが「おるすばん」なので、不安になっているようだ。洋服のときは首に抱きついてき
て、抱っこを強要するのに、きもののときはちらちらとこちらを見ながら、ぐるぐると私の
周りを回ったりして落ち着かない。
「どうしたの、おいで」
と手を広げても、
「んー」
と鳴いて、また不審な目つきである。ところが今日はきものではないので安心したのか、
抱っこ、抱っこの連続で、私の体に自分の体をすりつけてきてもう大変だ。
「ちょっと縫い物をさせて……」
といっても意地で抱きついて離れない。
ネコのいちばんのお気に入りは、ジル・サンダーのカシミヤのカーディガンである。私が
これを着ているときの懐き具合は、はんぱじゃない。私だって家で着たくなかったのだが、
たまたまこれを着て外出から帰ったときにネコに抱きつかれて、あちこちの毛糸が爪でひっ
かかれて出てきたので、仕方なく家で着るしかなくなったのだ。ネコ抱っこ用にユニクロ製

も買ってみたが、いまひとつネコに評判がよくないのが憎たらしい。きものを広げていると、たたたっと走ってきて、うれしそうに体をすりつけたりする。爪をたてないで喜んでいるところを見ると、気分がいいのかもしれない。ネコの相手をしているうちに、縫い物ひとつできないで一日が終わった。

**一月十八日**

今日もまだ腰が痛いので、洋服にする。きものだと大量の買い出しもできないので、ここぞとばかりに食料品を買いに行く。久しぶりに細身のパンツを穿いたら、何だかあちこちぱつんぱつんになっている。びっくりして体重を測ってみたら、何と二キロも太っているではないか。

「げえええええ」

たしかに正月から餅も食った。まんじゅうも食いました。しかし大晦日に測ったときには間違いなく、今よりも二キロ少なかったのだ。きものはよっぽど太らない限り、着るのに不都合はない。ここに落とし穴があった。そういえば最近、もともと補正はしないのだが、どうも帯のおさまりがいいなとは感じていた。それが着慣れたのではなく、ただ胴回りに肉がつき、補正の必要がなくなったという現実が、はじめてわかったのである。

「これはいかんじゃないかあ！」

細身のパンツも何とか穿けたけれども、これ以上太るのはちょっとまずい。片道三十分の道のりを早足で歩き、帰りは山のような買い出し品を手に持って必死で歩き続けた。

**一月十九日**

腰の痛みが治まったので、グレーのウールに、煉瓦色の半幅帯で過ごす。そういえばきものでも太ったなと思う。どうして今まで気が付かなかったと、我が身を呪(のろ)った。襦袢を手洗い。

**一月二十日**

昨日と同じ組み合わせ。家の中では相当ずさんである。乾いた襦袢の寸法を測ってみたら、また少し縮んだようで、私のもともとの寸法と比べると袖丈、総丈とも四センチ短くなっていた。いただいたきもののなかに袖丈の短い物があったので、それに合わせられそうだ。怪我(けが)の功名である。

**一月二十一日**

お稽古日。一月七日に着た道中着、青色の小さな柄の男物の大島、紫とグレーが混じったような地色に、丸や三角が織り出された博多の半幅帯を締めていく。外に出たとたん、寒いと思ったものの、そのまま出かける。晴天だが風が強い。半襟は洗っておいた薄いピンク色のを、落ちない汚れのところをずらすようにして、男物の緑色のぼかしの襦袢につけてきた。草履は履き慣れた薄いベージュの小判型。歩きながらつくづく感じたのは、静電気が起きる冬場には、大島のような軽いきものは向かないことだ。ざっくりした織のきもののほうが、足元がふわふわしないで安心できる。この大島は男物の一疋(いっぴき)分（着物と羽織分）の反物を半分にしてきものにした。裏は紺色に白で抜いた「竹に雀(すずめ)」の小紋の裾回しをつけたのだが、

着てみてあまりいい品物ではないのが明らかにわかった。値段もそれなりに安い物だったこともあるが、布に根性がないというか、つまり糸に根性がないので、着ていてどうも心許(こころもと)ない。洗いに出すついでに道中着に仕立て直そうかと考える。そうしたら裾回しも裏として使えるのではないだろうか。やっぱり糸、布の質は大切だ。

　きものを着て家事をするようになってから、私はふと気が付くと、

「どっこい」「えいっ」「よっこいしょ」

とやたらと声を出していた。足が思い通りに開かなかったりするので、気合いをいれないと体が動かないのである。風呂掃除のときは水に濡れるのに困り、長い割烹着を着たりしていたが、どうしてもあとがびしょびしょになる。鏡に映った白くて長い割烹着を着た私は、まるでてるてる坊主のようである。どうしたものかと考えた結果、風呂から上がる前に裸で掃除をすることに決定。

　昔の女性はいったい、荷物の移動や掃除のときなどは、どうしていたのだろう。昔の日本映画のビデオを見ると、女の人たちは手拭(てぬぐ)いを姉(あね)さんかぶりにして、裾は思いっきり襦袢丸出しでまくり上げたりしていたけれども。

　姉弟子のKさんは、最近は洋服だが、以前はほとんどきものを着て過ごしていたという。家できものを着ていても、家事をしなくていい人と、しなくちゃならない人のきもの揃えは違うのだといろいろと教えてくださった。家では半幅帯か、お母さんがつけ帯に直してくれた名古屋帯などを締めていた。きものの上にゆったりとしたもんぺを穿き、上下が揃ってい

たほうが格好がいいので、同じ反物でお揃いの上っ張りも仕立てていた。
「売っている物はいいものがないから誂えないとね。今だったら、洗える着物の反物で作ったらどうかしら。柄も選べるし濡れても平気でしょう。昔は雨の日もいちいちコートを着るのも何だから、上下が揃ったもんぺが便利だったわ。仕立て屋さんに相談すると、いいのを作ってくれましたよ」
ふだんにきものを着ていた人の話をうかがうと、感心するばかりだ。でも気軽に相談できるような仕立て屋さんを探すのも大変な世の中になってしまった。
小唄の師匠も姉弟子も、みなさんとても素敵で趣味がいいのだが、口を揃えて、
「誂えでないと格好のいいものはできない」
とおっしゃる。特に師匠はこれまで洋服などほとんど着たことがない方だから、いろいろな話をうかがうのだが、家で着るときの木綿の上っ張りの相談をしたら、
「きものや羽織の直しでもいいんですけどね、正絹で洒落たのを作っておくと、ちょっとしたお出かけでも着られていいの。私は名古屋帯を結ぶのも面倒になっちゃっていつも半幅だけど、それに正絹の上っ張りっていうか、ああいう形のものを作っておいて、それでお芝居を観にいっちゃったりするのよ。木綿だとどうしても、家の中か近所だけっていうふうになるでしょう」
と教えてくださった。道中着と上っ張りの中間みたいなものだろうか。道中着だと季節の問題もあるが、それだったら真夏はともかく季節を問わず着られる。考える余地はまだまだ

ありそうだ。

夜、背中がぞくぞくしてきた。喉も赤い。冬場はほとんどハイネックのセーターを着ていたので、きもののように襟の後ろが開いた状態に、体が慣れていないのかもしれない。もともと喉が弱いので、ひどくならないように、これもまた考える必要がある。

## 一月二十二日

寒くて風が強い。打ち合わせが二件あるので二駅先の喫茶店まで歩いて出かける。お正月に着た偽物の大島に、黒地にピンクの花柄の羽織。半幅帯は昨日締めたもの。足袋は裾回しと同色の辛子色で、履物は焼き色の桐草履である。まだちょっと喉が赤く、こじらせては具合が悪いので、ショールを合わせてみたが、カジュアルな色足袋にはマフラーのほうが似合いそうだ。あれこれ手持ちのものを出してみたものの、いまひとつぴんとこない。数年前に友だちからもらった、茶色の定番のルイ・ヴィトン柄が織り出されたウールの大判スカーフを長方形にたたんで首の周りに巻く。黒地にピンクの花柄に、ヴィトン柄では全体的に悪趣味っぽくなるかしらと思ったけれども、それもまたよしと出かける。この黒地の羽織は、問屋さんが長期在庫として抱えていたものを、呉服店が仕入れてきて、またここでも在庫品となっていたものを、私が表地二万円で購入した。たしか「イタリアの粋」とかいう、わけのわからん名前がついていた、中途半端なデッドストックである。一見、洋服生地のようでそれが面白かったので買ったのだが、合う羽裏がなくて、結局は裏地は絹の洋服生地になった。

きものを着るのは大変なものと思われるようだ。このきものの組み合わせだと、若い人が

じっと見ているのがわかる。組み合わせによっては、若い人は全く関心を示さず、年輩の人のほうの視線を多く感じることもあって面白い。どちらかというとエスニック風の組み合わせや、柄が目立つ組み合わせだと、若い人が興味を持つようだ。洋服だとどうしても着られる色柄が限られるが、きものだと苦手な色、柄でも、どこかに取り入れられるので、着ていて楽しい。

私のきもの姿を見て、担当者が不思議そうな顔をしたので、事情を説明すると、

「大変ですねえ」

といわれた。やっぱりきものを着るのは大変なことだと思われているらしい。家に帰ったら首はほかほかしているが、肘が少し痛い。洋服のときはよほど寒くない限り手袋を使わないが、きもののときは必要なようだ。

**一月二十三日**

グレーのウールにポリエステルの花柄の半幅帯。思っていたよりポリエステルでもほどけたりはしないが、いまひとつ不安がある。正絹の帯は、「ちゃんと締まってます！」と自信ありげだが、ポリエステルだと、「もしかしたら、ほどけちゃうかもしれませーん」と心許ない。

**一月二十四日**

きものの上に一昨年編んだきもの用ベストを着る。実はきもの用セーターを編もうと思ったのだが、途中で飽きて袖なしになったのである。これを着たらネコが抱きついてきた。

昨日と同じ。色足袋の入っていた袋をよく見たら、洗濯機にいれて洗ってはいけないと書いてあった。これからは気をつけよう。

**一月二十五日**

きもの生活がはじまって二十五日が経過。私にとってとても意外なことが起こり始めた。一日中きものを着ていると、「体調が悪くなる！」のである。連日きものを着ていると、ものすごく肩こりがしたり、疲れたり、背中がぞくぞくしてくる。風邪気味なのかと早めにパジャマに着替えると、体調が戻る。きものを着ている私はとてもうれしいのに、体のほうにどこか負担をかけているようだ。それがどういう理由かわからない。こんなことでは夏を乗り切るどころか、一月で終わってしまうのではないだろうか。

**一月二十六日**

腰ひもがわりのゴムベルトを試してみる。以前、大島に使ってみたものの、すべってベルトの位置がずれてしまったが、ウールだったらうまくおさまるのではないかと考えたのだ。大阪国際女子マラソンを見ながら、うそつき用の木綿の袖を縫う。一枚縫ってももう一枚あるのが面倒くさい。夕方、ベルトはいかにと調べてみたが、やはりウエストまでずりあがり、きものは裾開きのあんどん*になっている。私の体型には合わないみたいで、使うのはあきらめた。

お腹のあたりはぬくぬくと暖かいのに、首まわりと袖口が寒い。吉田兼好は、

「家の作りやうは、夏をむねとすべし」

と書いたが、もしかしたらきものも夏を旨としたのではないだろうか。首まわり、身八つ口、袖口から空気が抜ける。ということはそこから風が通り抜ける。気のせいかなあと思いながら、襟元を合わせてじっとしていた。

**一月二十七日**

明け方、ものすごく気持ちが悪くなって目が覚める。仕事をしなければならないが、どうしようもないので、水分は取るが何も食べないで寝続けた。珍しく熱が出て、頭と目が痛い。肘から手首まで軽い神経痛のような痛みがある。ただ咳は出ないし鼻も詰まっていないので、それだけが救いだ。

「もしかして、これってきもののせい？」

不安になりながらもとにかく寝る。こんな状態なので、きものは着られませんでした。

**一月二十八日**

お稽古はお休み。熱は下がって元気になったが、月末まで締切りが三本あるので、おとなしく家にいて原稿書きをする。きものを着たい気持ちもあるのだが、仕事が終わるまではやめておく。どうして家できものを着ると体調が悪くなるのか。私はきものが大好きなのに。もともと喉が弱いから、襟まわりが開いているのがダメージを受ける理由なのかも。風邪は首、手首、足首から忍び寄ると聞いたこともある。ぐずぐずしていた風邪が、たまたま表に

出ただけかもしれないし、とにかく無理をしないで様子を見ることにしよう。

**一月二十九日**

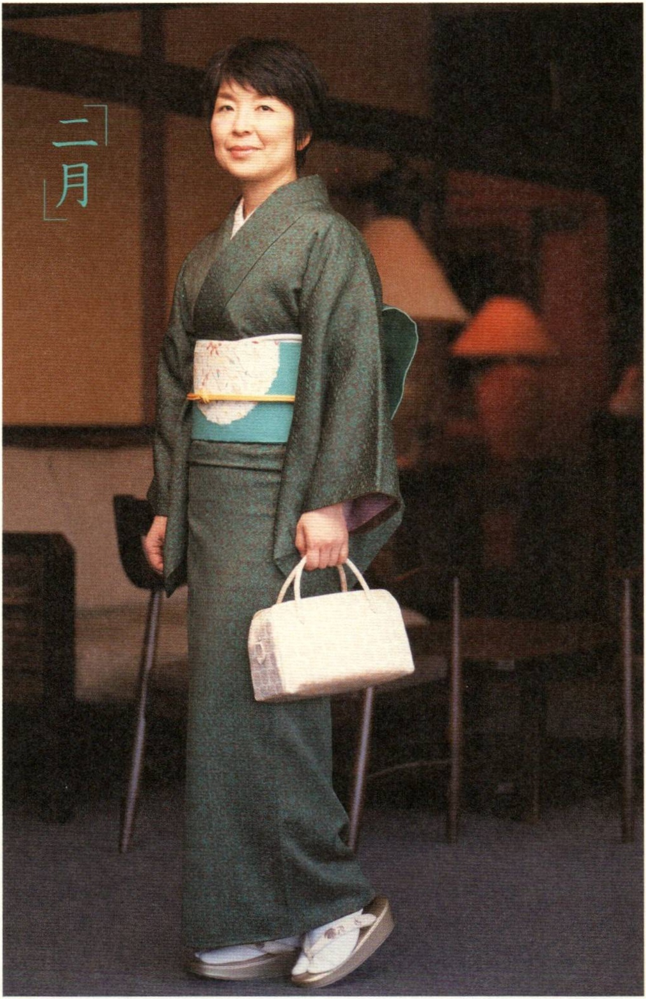
仕事の合間にきもの関係のファイルを読み返していたら、ふだんにきものを着ている中年女性が首にスカーフを巻き、手首がぎゅっとしまった上っ張りを着ていた。やっぱり寒いのだ。友だちが肘が冷えると体も冷えるらしいと教えてくれた。首と手首をガードすれば、私の症状も何とかなるかもしれない。

**一月三十日**

肌襦袢と裾除けを兼ねたきもののスリップが老朽化してきた。何かないかと押入にもぐって探していたら、晒の肌襦袢が三枚出てきた。裾除けはと探したら、白が一枚だけ出てきた。老朽化したスリップも、この裾除けも、かれこれ十五年以上経つものばかりだ。年に何回かしか着なかったからだが、それにしても物持ちがいいもんだと驚きながら、仕事にとりかかる。

**一月三十一日**

今月の仕事は終了。まとめて襦袢に半襟をつけようとしたものの途中で飽き、休みながらだらだらとやる。来月は「家できものを着ると体調が悪くなる」という仮説が打ち破れるのだろうか。さらに人体実験は続く。


「二月」

## 二月八日のコーディネート

きもの　菊菱の地紋のある焦げ茶の地に、ピーコックグリーンの小さな七宝を染めた付下げ小紋

帯　ピーコックグリーンの地に花の模様が丸く織り込まれた綴(つづれ)の名古屋帯

帯揚げ　ピンク、クリームなど、淡い色がぼかしになった帯揚げ

帯締め　明るい芥子色の冠組(ゆるぎぐみ)

半襟　白地に薄いピンクでうろこと瓢箪(ひょうたん)が細かく刺繍されたもの

襦袢　茜色と紫が振り違いになった絵羽のもの

足袋　白足袋

草履　鼻緒にふくら雀の柄が刺繍された革草履

バッグ　白地に金の名物裂(めいぶつぎれ)の、天襠(てんまち)(ボストンバッグ型)礼装用バッグ



履きやすい真綿の草履。
鼻緒は蓑虫

# 二月




## 二月一日

端ぎれや残りぎれをいれておいたプラスチックケースを調べたら、底のほうから半襦袢が出てきた。かれこれ十年ほど前の物であるが、どうして買っていたことを忘れていたのかと、我ながら情けなくなる。が、これでふだん着用の下着は何とかなるかもと、押入の木綿布を物色する。まだ体調万全とはいかないので、きものを着るのはやめにしておく。

きものを着て体調が悪くなる理由について、いくつか考えてみた。

一　重い

二　寒い

三　きものを着ていることにより、緊張していて自覚症状がなかったため、病は気からの法則。

これくらいしか思い当たらない。まずこれまで着た、きものの重さを量ってみた。

ウール　830グラム
偽大島　750グラム

帯は、

私が重いと感じた木綿の半幅帯　440グラム
博多半幅帯　330グラム
染めの半幅帯　350グラム

他の季節のふだん用として準備してあるきものを量ってみると、それぞれ*単衣（ひとえ）で、

*片貝木綿（かたかいもめん）　700グラム
会津（あいづ）木綿　570グラム

一枚持っているポリエステルの袷が、640グラムで、厚手の木綿の鰹縞（かつおじま）の単衣は920グラムもあった。これを作ったのは十代のときだったので、重さも何とも感じなかったが、今になるととっても重くて、肩に羽織るとまるで昔の掛布団を背負ったかのようである。ちなみに私がふだんに着ている、冬場の洋服の総量は970グラムだった。いちばん軽い会津木綿と博多帯の組み合わせだと洋服よりも軽くなるけれども、その分、防寒という点で劣ると思われるので、下着を考えなくてはならないだろう。たしかにウールと半幅帯の組み合わ

せだと、洋服よりもちょっと重い。でもそれが負担になるほどだとは、今のところ考えられない。

**二月二日**

せっせと半襟つけに精を出す。

**二月三日**

体調万全でまた実験の再開である。風もなく穏やかな日和(ひより)である。下北沢で打ち合わせがあるので、きもので出かける。一月二十二日と同じ組み合わせで、足袋を薄い茶色の地に濃い茶色の細かい格子柄に替えた。襟元が寒いので薄手のストールを首に巻いて出かける。片道二十分ほどを歩く。できるだけ木か草物の履物を履くようにしているが、たまたま見つけた桐草履が軽くてとても履きやすい。本体の値段は三千五百円で、鼻緒によって値段が変わるけれども、鼻緒ずれがしない、*本天(ほんてん)の太めの四千円のものをすげてもらった。いくらでも歩けそうなくらい快適だ。

小説誌の担当の男性が、

「ぼくもきものデビューしたいんですけどね。どうしたらいいでしょうねえ。やっぱり浴衣でしょうか」

というので、

「そうそう、それがいいわ」

と勧めた。彼の奥さんもきものを着たことがないという。若い頃は興味がなかったのに、

最近、だんだんときものに関心が出てきたのだそうである。今、発行されている、「銀座百点」に男のきものについて、小沢昭一さん、水野正夫さん、蟹瀬誠一さんの鼎談が載っていて、面白かったから読んでみたらと話す。

「それで、いったいどこで買ったらいいんでしょう」

自分の国のきものなのに、いったいどこで買ったらいいのかと思うなんて、悲しいことだ。今は海外でミシン仕立てされる、安い浴衣もたくさんあるけれど、

「十代、二十代のおにいちゃんじゃないから、つるしはどうもねえ。やっぱり呉服屋さんだと洒落たのがみつかることも多いし。季節がきたら、デパートでもたくさん出回るから、試しにどんな感じか見てみたら」

という。彼はきものモードに入ったようで、

「浴衣姿の写真をお見せできるように、がんばります」

と胸を張っていた。楽しみである。

私の体調のほうであるが、三時間ほど過ごして午後四時過ぎに家に帰って洋服に着替えて様子をうかがっていると、見事に背中がぞくぞくしてまいりました！

「きた、きた、きた」

変化が訪れた。ここで何かあったら困るので、カシミヤのマフラーを折り畳んで背中につっこんだら、小一時間ほどしてぞくぞくはおさまった。調べてみたら二の腕と肘のあたりがとても冷えている。身八つ口と袖口から冷えたようだ。自覚はなかったのに、体のほうはそ

うではなかったらしい。足元も腰回りも寒くないのに、上半身が寒い。明日、ひどくなっていませんようにと願って寝た。

**二月四日**

朝起きたら、これまた見事に喉が赤くなっていた！　何か策を講じないと、この企画が「喉の赤さと闘うわたくし」になってしまう。お稽古日だが、三味線の皮が破れてしまって、修理のために重いケースにいれて持っていかなくてはならないので、今日は洋服にする。ハイネックのセーターにダウンが入ったジャケットを着ていたら、喉は赤いものの咳が出たりする困った症状はない。冬場にきものを着て、こんなふうになったことはなかった。下着もこれまでと同じで、特別薄着にはしていない。ただ歳はひとつとったので、がくっと体力が落ちたということは考えられるが、それにしてもきものを着た翌日、こう見事に喉が赤くなるのでは、何か問題があるのだろう。きものをふだんに着るシステムを作るには、自分にふさわしい準備が必要なのだ。

「とにかく、背中がぞくぞくしなくて、喉が赤くならないように。にっこり笑って、毎日、きもので過ごせるように」

それだけが願いである。

**二月五日**

まだ喉が赤い。黒いタートルネックのセーターを見ていて、

「ウールの下にこれを着れば問題ないかも」

と考える。男性のきもの姿で、書生風にきものの下にヘンリーネックのシャツを着たり、タートルネックのセーターを着たりするけれども、女性にはあまり見かけられない。若い女性だったらファッションのひとつでかわいらしいけれども、おばちゃんの私がそうすると明らかに無理がある。中年でも似合うタイプはいるかもしれないけど、私はそうではないのだ。誰かが男っぽいきものの着方をしていて、それがとても素敵だったとしても、ショートカットであまり化粧をしない私が真似(まね)をすると、まるでおばちゃんがきもの姿の男装をしたようになってしまう。

和室に積み上げてあった箱や押入を整理しはじめるも、倉庫労働のような状態に途中で疲れてやめにする。どうやってもきちっと整理整頓(せいりせいとん)するのは難しいのがわかり、通販カタログに載っていて、買うのを迷っていた三万円足らずの桐の押入タンスを買うことに決める。もうちょっとどこに何があるか、はっきりわかるようにしておかなければ、明るいきもの365日はやってこないのである。折り重なった箱の下から、ビニール袋に入った布のきれはしが見えたので、ひっぱりだしてみたら、夏物の麻の半襟だった。箱を移動してみると、ぺったんこになったレーヨンの小風呂敷(こぶろしき)が出てきた。どうして一目でわかるように、きちっと整理整頓ができないのか、我ながらあきれ果てる。

**二月六日**

まだ喉が少し赤い。防寒対策についてあれこれ調べてみる。すると、どうやら私は根本的に薄着だったのではないかと気が付いた。寒さを感じるのは人それぞれだが、男性でも冬場

はきものの下は五枚重ねだと書いてある。私は三枚だ。私と同年輩の女性の場合、冬場はニットのババシャツを着て、裾除けを一枚追加しているようだ。昔は冬場に、手編みの長襦袢や裾除けを身につけていた女性もいたらしい。芸者さんがうすく綿が入ったような襦袢を着ている写真も見た。やっぱりいくらきものは暖かいといっても、寒いときは寒いのだ。私は二年ほど前に、手持ちのすべてのババシャツの寿命が尽きて以来、ババシャツは買わずに、すべてTシャツですませてきた。が、Tシャツだと襟のくりが浅いので、きもののときに見えてしまう。

「うーむ。再びババシャツの出動か……」

しばし考える。きものというのは、意外に肘のほうまで見えてしまうから、シャツの袖の長さも考えなくてはならない。自分は寒いと感じていないのに、実は冷えていたという体と神経の認識の差を、認識するべきだろう。かといって、転んだらなかなか起きられないほど、むくむくに着ぶくれするのも嫌だし、困ったものである。とにかく喉の赤さが取れないうちは、きものが着られない。あさっては結婚披露宴に招待されているので、きものを着るけれども、対策が浮かばない以上、ふだん着は今のところおあずけである。

母親に仕立てを頼んでいた、ウールが二枚出来上がってきた。家で着ていたものより薄手なので、春先から五月くらいまでの物だろう。これは浅草のワゴンセールで、反物を九千八百円で買ったもので、ふだんに着る分には全く問題ない。はやく喉の赤いのが取れてほしい。

二月七日

まだ喉が赤いので、きものはやめる。防寒対策のために、とりあえず襟ぐりの前も後ろも深くカットされた半袖のシャツを一枚、バーゲンで購入。

二月八日

代官山のイタリアンレストランでの、結婚式の披露宴に招待されているので、きものでいく。平服でとあったので着る物に迷う。古典的な柄だと雰囲気からして浮くかなと思い、洋服の平服というとワンピースかなあと考えつつ、*菊菱（きくびし）の焦げ茶の地紋にピーコックグリーンで小さな*七宝（しっぽう）を全体に染めた付下げ（つけさげ）小紋に、同じピーコックグリーンの地に、金糸銀糸がまじった花が丸く織り込まれた、*綴（つづれ）の名古屋帯を締める。襦袢は茜色（あかねいろ）と紫が袖のところで*振り違いになっている*絵羽（えば）のもの。半襟に白地に薄いピンクでうろこと瓢箪（ひょうたん）が刺繡（ししゅう）されているものがついているので、これでいいかと、ずるずると着ていったのである。

本来ならばお祝いの席なので、小紋でも明るい色を着るべきなのだろうが、そういうきれいなきものは持ってないいんである。レストランまでは、電車で渋谷まで行ったら私の感覚では歩いていける距離なので、ビキューナとカシミヤの混紡のきもの用コートを着ていく。昨日買ったシャツを、肌襦袢の下に、下半身には絹の七分丈のキュロットスカート型の下着（端的にいえばステテコ）を穿いて、防寒対策をした。シャツを着たとたん、二の腕が暖かくなる。やはりここが鬼門だったのか。風もなく暖かい日でもあったが、やはり上下一枚ずつ肌着を増やすと暖かさが違う。夕方、宴が終わって家に帰ったら、喉の赤みが見事に消え

ていた。希望の光が見えてきた。

## 二月九日

昨日着た、バーゲンで買った半袖のシャツを洗濯したら、色のベージュが見事に下着のパンツに色移りしていた。分けて洗うべきだったのか。ただひたすら、半襦袢、襦袢に半襟をつけ続け、お針子として過ごす。

## 二月十日

仕事の打ち合わせで下北沢まで、歩いていく。きものは今年になってから着続けている偽大島。帯は木綿でリバーシブルの更紗柄。羽織は紬地を絞った着尺を、羽織に仕立てたもの。羽織ひもは黄緑色の丸ぐけで、小豆色の房がついたもの。足袋は薄いベージュに細かい茶色の格子が入ったもので、草履は最近、気に入っている桐草履である。半襟はつい先日買ったもので、グレーと小豆色と薄茶が五ミリ角の格子で並んでいるもの。風もほとんどなく暖かい日だが、羽織の上に大昔にコム　デ　ギャルソンで買った薄手ウールのショールを、襟元を全部覆うようにしていく。肩に羽織るだけでは襟首や喉元が温められないので、喉が赤くならないような対策である。半袖シャツももちろん着用である。歩いていても冷えるという感じがない。それに比べて、半袖シャツもショールも手袋もない姿で歩いていたときには、どこか背中がぞぞっとしたものだが、冬場だしこんなもんだと思っていたのだ。ほかほかしながら歩き、待ち合わせの喫茶店に行くと、私の担当のAさんと、初対面の編集部のWさんの二人の女性がいた。Aさんはきもの好きで、十年ほど前に一緒にきものを買ったことがある。

黒地に白の単色のすばらしい絞りの訪問着を持っていて、それに合わせて買った鳥柄の袋帯もとっても洒落ているので、

「着て見せてよ」

と何度もいっているのだが、

「いやあ、なんだか恥ずかしくて……」

といまだに照れて着て見せてくれない。Wさんもきものが好きなのだが、昨年、若いのにぎっくり腰になってしまい、ちょっと怖いので今年のお正月もきものはやめたという。うちの母親が数年前に腰を悪くして、もうきものは着られないかもしれないといっていたが、あるメーカーの体型補正用のパッドを使ったら、それがコルセットのようになってとても具合がよく、またきものが着られるようになったと喜んでいたことを教えてあげる。彼女から防寒対策で、登山用の肌着がよいと耳よりな情報を得る。仕事の打ち合わせだったのに、七十五パーセントがきものの話、二十パーセントが犬ネコの話、そして五パーセントが仕事の話で終わる。

紬地の羽織は染めに比べてごわっとしているけれども、着ていると暖かかった。どんな場所にも着ていけるわけではないが、ショールに紬地の羽織にきものだと、防寒のうえではいいかもしれない。喉は赤くならなかった。やはり半袖シャツの威力か。

## 二月十一日

お稽古日。電車はすいていたのに、どうしてこんなに浅草に人が多いんだろうかとよく考



2月10日
愛用の偽大島に、木綿の
リバーシブルの更紗柄半幅帯、
紬地を絞った羽織



便利なタビックス
(ソックス式足袋)を含む、
色足袋のコレクション

えてみたら、今日は休日だった。家を出るときには雨が降っていたので、数年前に買った縞の結城紬に、絞りのつけ帯を締め、雨コートに雨草履を履いて出る。雨の日にはじめてきものを着た。コートが長いので、少々大股に歩いても、お見苦しいところがあまり見えないのがありがたい。しかし、困ったのが草履である。買ったときに鼻緒を調整してもらったのに、ふだん、本天や太めの鼻緒など、足への当たりが柔らかいものばかり履いていたので、一般的な革鼻緒の草履を履いたら、途中で足が痛くなってきた。ぐいっと指の股深く鼻緒をはさみこむわけではないけれども、やはりある程度鼻緒が指の間に入っていないと、不安定でとても歩きにくい。本天や布地の鼻緒だと柔らかいから問題ないのだが、革の鼻緒は微妙な足への当たり具合があって、難しいのである。いくら見て格好よくても、自分の足が痛くなるのは辛い。お洒落は我慢からといわれるけれども、靴も草履も合わないのを履いていると、気分がふさいでくる。履いているうちに、多少痛みは薄らいできたが、やっぱりなじめない。

もう一足、ご近所履き用にものすごく安い、草履とサンダルの中間みたいな形の雨草履を持っているのだが、そちらのほうがずっと履きやすいものの、上に着るものとのバランスがあるので、今日は正統派の雨草履にしたのである。雨草履に布の鼻緒はありえないだろうから、雨の日はどうするかが新たな問題になった。でも防水された布だったら大丈夫か。雨用の草履カバーというものもあるが、あれはいったいどうなのだろうか。またクリアすべきテーマが出てきた。

お稽古が終わって師匠のお宅を出ようと、玄関先でもそもそと雨コートを着ていたら、階

下の踊りのお稽古場から、師匠の娘さんが出ていらした。もと浅草の芸者さんで、今は踊りの浅茅（あさじ）流の家元、浅茅与志江（よしえ）先生である。

「ことし一年、きものなんですってねえ」

　と声をかけていただき、

「ええ、もう、いろいろとあたふたしちゃって」

　と訴える。与志江先生もきもの姿がとっても素敵なのである。やはり粋筋（いきすじ）の人は違うなあと思うのは、下半身の切れ上がり方である。本当に前から見ても後ろから見ても、下半身がすっきりしていて、雰囲気がど素人の、どでっとした尻とは全く違う。今日のお召し物は紺地に白く小さな絣が飛んでいるきもので、半襟は茶色。真っ白な博多の半幅帯を貝の口に締めていらしたが、これがまた粋でかっこいい。

「きものを着てるとね、所作がきれいになるからいいですよ。きものを着ていたらしちゃいけないことっていうのがありますからね」

　思わず、前のめりになってお話をうかがう。

「洋服を着たときはね、足の付け根がコンパスになるけど、きものを着たときは膝がコンパスになるのね」

　先生が目の前で廊下を歩いてくださったが、見事に裾がほんの少し、ひらりと返るくらいで、内側はほとんど見えない。私なんぞ、最近やっと、そういうことが少なくなったが、歩いているうちにきものの下から、足に蹴（け）り出された襦袢が出てきて、足元がすごいことにな

り、辺りをきょろきょろ見渡して人のいないことを確かめて、ささっと中に押し込むのを繰り返していた。その話を先生にしたら、

「あっはっは」

と笑っている。

「足の付け根から蹴り出しちゃいけないのね。洋服のときと歩き方が違うから」

「ははあ、なるほど」

「それから階段を上がるときにね、にょきっとふくらはぎが出ちゃったりするでしょう」

「出ます、出ます。もうむき出しです」

常々、これはかっこ悪いのでなんとかしたいと思っていたのだ。

「上の段に足を置くでしょう。そうなると後ろ足が下に残りますね。だから丸出しになっちゃうのね。こうやって上がるときに、意識して後ろのほうの足をつま先立ちするの」

「おお、なるほど」

階段上下の足の段差を、後ろ足をつま先立ちすることによって、なるたけ少なくするわけである。

「人が後ろにいないときはね、ちゃっちゃとそのまま上がっていっていいんだけど、誰かいるときに、ちょっとこうするとね、違うの」

「本当にそうですねえ」

「歩くときに、上前(うわまえ)を持つといいっていう人がいるとね、つい下前(したまえ)も一緒に持ち上げて、す



雨の日も
きものにトライ。
雨コートと雨草履



2月11日・18日
天気が悪い中を
お稽古に外出。
結城紬と、紬地に
絞りを入れたつけ帯

ねが見えちゃう人がいるのね。きものっていうのは巻きつけてあるから、上前だけを引き上げると、すっと裾つぼまりになるの。くれぐれも下前を一緒に持ち上げちゃいけないのよ」
「ははあ、なるほど」
「それとね、白粉（おしろい）や粉っぽいものが、きものの胸元に落ちたとき、つい、手で払ったりするでしょう。あれはだめなのね。きれいなようでも手に脂（あぶら）がついているからかしらね、きものにまた余計にくっつくみたいなの。いちばんいいのは共布ね」
そういって先生は内袖で軽く胸元を払う仕草をした。
「共布だとね、内袖のほうにもつかないし、粉も取れるのよ」
「はあ、そうなんですかあ」
どれもこれも、なるほどと思うことばかりである。これもいつもきものを着ていた、芸者さんの知恵なのかもしれない。
「またわからないことがあったら、何でも聞いてね」
「ありがとうございますっ」
みなさんのお知恵をいただいて、ありがたいことばかりである。
お稽古の後に浅草で新聞の取材を受ける。ここで写真をといわれてふと見たら、水子地蔵の横だった。
「あのう、私には縁がないんですけど、やっぱり水子地蔵の横はまずいんじゃないでしょうか」

カメラマンは気が付かなかったらしい。お地蔵様の幟が見えない場所まで移動して撮影を済ます。雨コートの下にマフラーをしていたら、電車の中でおでこに汗がにじんできた。きものを着たときの温度調節は難しい。

## 二月十二日

昨日着た襦袢についていた半襟をはずして洗う。この半襟は今年になって、何度も使ったもので、着用二回を限度として洗濯を繰り返し、きれいに汚れが落ちないので、襦袢に縫いつけるときに少しずつ位置をずらしていたのだが、そろそろ裏返しにしないとみっともないかしらという感じになってきた。ベンジンで拭く手入れ法もあるようだが、私はこれまでしたことがない。足袋を白く洗うというのも大変だが、しょせん材質が木綿なので気が楽だ。絹の半襟の扱いには頭を悩ませる。歩いて行ける範囲だったら、木綿の半襟と袖がついたうそつきを下に着て平気で出かけるけれども、電車に乗るとなると、やはり気を遣う。半襟……、どうしよう。

## 二月十三日

頼んでいた押入用桐タンスが届き、早速、部屋に積んであった帯を中にいれる。が、まだすっきりと片づかず。ウールのきものは暖かいのだが、重くて裾さばきがよくないので、

「ええい、面倒くさい」

とちょっといらつく。最初は暖かいからいいと思っていたのだが、毎日、着続けるとなるとその重さがきつくなってきた。コーディネートも考える気にもならず、一月からずっと、

ウール三枚と博多帯三本を交互に組み合わせて着ている。おまけに外に買い物に出かけるときは洋服だ。正直いって、朝から晩まできものだと、いくら好きでも飽きてきた。好きな鮨（すし）でも毎食食べていれば飽きるのと同じだろう。以前はきものを着ることで、私は知らないうちに気分転換をしていたとわかった。それでもまだ、これから毎日、きものでくらしたいと思っている自分がいるのだ。

**二月十四日**

下北沢で昼の会食。十日と同じコーディネートで、ウールの大判スカーフをしていく。男女二人の編集者と、ずっときものの話になる。私は少しでもきもの仲間を増やそうと誘うのだが、男女にかかわらず、

「いや、自分の体型が……」

といろいろと自主規制している人が多いのには驚かされる。女性の場合は、

「背が高いから」「肩がいかっているから」

という理由が多く、男性の場合は、

「痩（や）せているから」

という人が多い。体型うんぬんをいうのなら、

「じゃあ、洋服を着ていたら、日本人はかっこいいのか」

といいたい。欧米人に比べて迫力もなく、姿勢も悪く、貧相な日本人に洋服が似合っているかというと、どうかなーと首をかしげたくなる。興味がないんだったらしょうがないが、

つまらない自主規制をしている人が多い。着るのは体型じゃなくて、その人の中身なのに。それは洋服も同じことだと思うのだが。本来、民族衣裳なんだから、体型うんぬんなんて関係ないのではないだろうか。といいながら、太るとすぐにうろたえてしまう私である。

**二月十五日**

そろそろ締切りモードに入っているので、半襟つけをする気にはならず、洋服で過ごす。

**二月十六日**

右に同じ。

**二月十七日**

右に同じ。帯揚げ、帯締めを出して、どの色が足りないか調べて書き出しておく。

**二月十八日**

お稽古日。午後から雪が降るというので、フレンチスリーブのTシャツの上に半袖のシャツ。厚手のきものスリップ、襦袢。下半身は七分丈キュロットを穿く。この七分丈キュロットは、与志江先生から教えていただいた、膝をコンパスにする練習にはとてもいい。これが見えないように、少し足の歩幅を加減するからだ。これを穿いてからは、襦袢がきものの奥から、「こんちは」

と顔を出すことはなくなった。おまけに暖かいし。足元は先週、鼻緒ずれした正統派雨草履はやめて、お手軽草履にする。きものも帯も先週と同じ。ただ半襟と帯締めを辛子色に替えた。師匠には、

「ちゃんと着てきて偉いわねえ」
とお稽古に伺うたびにいっていただくが、
「はあ、仕事なので……」
とお返事をする。厳密にいえば毎日ではないが、日々着てみてわかったことがいろいろあるし、とても勉強になっている。これから季節が変わるにつれて、また何かしら出てくるだろう。本当に夏場は倒れるかも。
お稽古が終わって浅草で仕事の打ち合わせ。おそばを食べたあと、抹茶づくしという、抹茶と抹茶あんみつのセットを食べてしまう。こうしてだんだん帯のおさまりのいい、胴回りになっていくのか。足が痛くなってきて、足をずらしてみたら、鼻緒の下の位置にうっすら血がにじんでいる。履きやすいと思っていたのに、普通の革鼻緒で鼻緒ずれを起こしたらしい。あまり指を鼻緒に深くつっこまないようにして歩く。暖房のきいた帰りの電車の中で、額に汗がにじんできた。必死にハンカチでぬぐう。家に帰って着替えたら、汗だくだくになっていて、フレンチスリーブのTシャツがびっしょり濡れていた。
「ううむ、さすがに厚着をしすぎたか」
まだいい頃合いの下ごしらえがよくわからない。
足袋を脱いだら、両足とも見事に鼻緒ずれを起こしてほんの少しだが皮がむけていた。足袋を石鹼水につけておく。そろそろ襦袢も生洗いに出さないといけないかなと考える。が、縮むのを承知で家で洗っちゃおうかなとも考える。

## 二月十九日

喉は赤くならず。身八つ口が鬼門だったらしい。半袖シャツは私にとって冬場の必需品だとわかった。色気は全然ないけど。デパートでなるべく薄手で暖かそうな白の半袖シャツを購入。

## 二月二十日

きものを着るときには、先に先にと考えておかないと、そのときにあたふたするはめになる。今年のはじめの、

「ふだんの襦袢がない！」

という一件を見ればわかる。いったい何があるのか、きちんと一度整理しなければと、これまで買ってあった反物などをすべて調べる。中途半端に残っている端ぎれ類は別にして、襦袢、浴衣、木綿、ウールの点数を確認する。

## 二月二十一日

これから締切りが集中するというのに、プリンタが見事に壊れた。十年以上も使っていたから寿命だろう。すぐに必要なので、きものではなく洋服で買いに行って、そのまま店の在庫のあるのを持って帰って接続する。仕事が集中しているときは、どうもきものを着る気にならない。家で着ていると、

「着ていりゃいいや」

というふうに義務になっている自分が情けない。新鮮味が失われてくるのだ。少し間を置

いたほうがいいかと思い、家できものを着るのはしばしお休み。といってもお稽古がある日、一週間に一度は必ず着ている。きものは着ないといっても、これからのために、うそつき用の木綿袖を縫う必要がある。原稿を書いては袖をちょこっと縫い、それに飽きるとまた原稿を書くという繰り返しだ。

**二月二十二日**

昨日と同じように、原稿書きと袖縫いの日々。ふと今月は二十八日しかないことに気が付いてあわてる。のんきに袖を縫っている場合ではなかった。連載に必要な本を読み返す。

**二月二十三日**

実は正月休みに柄足袋を縫おうと、インターネットで型紙を取り寄せて、布地も買っておいたのだが、思っていたよりも大変そうなのがわかって、引き出しの奥深くしまっていた。またそれを取り出してみたが、やっぱり大変そうだ。足袋を履いてみると、なかには裏側の布地の裁ち目が肌に当たって痛いものがある。靴下は縫い目がないからわからないけれども、足袋はただその形をしていればいいというものではなく、繊細で微妙なものなのだとわかった。時間がとれたらいずれ挑戦するつもりでいるが、袖や裾除け、大作の浴衣はほぼみな直線だから辛抱すれば縫えるような気がするが、足袋のように曲線だらけの物を上手に縫える自信はない。

**二月二十四日**

一日中、原稿を書く。来月になったら、ぶ厚いウールのきものは重いだろう。きもののこ

終わった時点でまた考えよう。

とを考えると、そっちのほうに集中してしまい、原稿を書く速度が遅くなる。締切りが全部

## 二月二十五日

お稽古日。伊勢丹のセールで買った縞の泥大島*に、生成(きなり)に麻の葉柄の半幅帯を締め、若草色の道中着。コムデギャルソンの緑色のウールのショールをしていく。下には忘れずに半袖シャツ。この道中着、柄はとても気に入っているのだが、どういうわけだか着ると必ず、どのきものでも袖の振りが五センチは飛び出す。他の店で仕立てた物だが、そことはもうおつき合いがないので、伊勢丹で寸法、仕立てなど見てもらうことにしよう。帰りに前々から気になっていた履物屋さんに行き、台に真綿が敷いてある草履を買う。履いてみたら足の裏にぴたっとフィットしてとても感じがいい。鼻緒が蓑虫(*みのむし)で個性的な感じでうれしい。お店の方が見本をいろいろと見せて下さって親切にしてくれた。オーダーでも値段は変わらないそうなので、これからはオーダーのほうが楽しいかもと思う。

## 二月二十六日

麻雀の対局の仕事なので、洋服で神田まで出かける。その前に書店に寄って本を買い、編集者のWさんに教えてもらった、きものの肌着にぴったりという、ブレスサーモという肌着を買いに「エスポートミズノ」に寄る。ミズノ直営店なので、たくさん在庫があるかと思ったら、欲しい色の半袖のMサイズはほとんど売り切れていた。やむをえず、白に近い薄いピンクとベージュを買う。対局は想像どおりの結果でございました。

## 二月二十七日

きものは着ないでひたすら原稿を書く。

## 二月二十八日

無事、全部の原稿を編集部に送信して、今月の仕事は終了。といっても実は書き下ろしの分ができず、電話をして一週間、締切りを延ばしてもらう。明日は小唄の新年会と、四月のうちの若先生（御歳二十五歳、ハンサムな好青年）の見台開き（けんだいびらき）（これからお弟子さんをとらせていただきますというお披露目の舞台）のための下ざらいの下ざらいを兼ねた会が、人形町の料理屋さんで行われる。天気が悪いようなので、どのきものを着ていったらいいか、頭を悩ます。午後には雨足も強くなると天気予報でいっているので、仕立て下ろしを着るのはちょっと抵抗がある。結局、おととしの忘年会で着た、二十数年前に作った、よーく見ないとわからない、煉瓦色の濃淡が四角く組み合わさっているような小紋に、「川島織物」のかづら紐柄の名古屋帯にする。三味線を三つに分けて運ぶ鞄（かばん）は本革で、雨に濡らしたくないので、長いまま合成皮革の鞄に入れる。これとバッグと傘となると、結構重く大荷物になるが、時間に遅れたくないので電車で行くことにした。

「三月」



三月十日のコーディネート

きもの　縞の泥大島
帯　白とピンクの市松模様に桜の柄を染めた名古屋帯
帯揚げ　明るい黄色
帯締め　若草色の冠組（ゆるぎぐみ）
半襟　薄いピンクの塩瀬
襦袢　ブルーグレーの地に鳥獣戯画を墨描きしたもの
足袋　白足袋
草履　東雲色（しののめいろ）の革草履
バッグ　フェンディの革のバッグ
コート　ろうけつ染めの道行

撮影協力　文扇堂（P305も）



お気に入りの蟬（せみ）ほか、ブローチ各種

# 三月





**三月一日**

家を出るときは雨が降っていなかったので助かった。総勢十五人で男性はみな洋服だが、女性のほとんどはきもので出席。いつも師匠や姉弟子のきもの姿は素敵で、参考にさせていただいている。

「みんな三十年、四十年以上前のものばかりよ」

とおっしゃるのだが、生地も違うしちょっとした刺繡や染めも今は見られないものばかりだ。失礼だと思いながらいつもじーっと見てしまう。特に師匠は粋筋の方なので、きものと帯合わせが素晴らしく、とても勉強になる。まあいくら私が真似をしたとて、師匠のように

なれるわけではないのだが。
　四月の舞台のため、プログラムに従ってお稽古をしていく。夜七時にお開きになったが、雨足がとてもひどくなってきたので、タクシーで帰る。雨コートもびしょびしょになったので、ハンガーにかけて風呂場に下げておいた。ふだんはほとんど使わないが、会のときは白半襟にしているので、着替えるときに見てみたら、うっすらともう汚れている。
「あたしって、そんなに汚いのかしら」
　とちょっとへこむ。二月十一日に履いて鼻緒ずれした雨草履を履いていたのだが、今日は鼻緒ずれはしなかった。少し鼻緒がゆるんだのだろうか。

**三月二日**

　春らしくなって気分がよくなり、また毎日きものでもいいかなあと思っている。一方、体のほうは緊張したけれども楽しんだはずなのに、昨日の疲れがどっと出たのか、無気力状態。特にずっと三味線を持っていた左手が張って、少し痛い。これから会があるときには、三味線を持っていかなければならないので、どうしようかと考える。

**三月三日**

　ひなまつりだが、きものは着ない。コーデュロイのパンツを穿いていたのだが、ふと鏡を見ると何だか痩せたような気がする。測ってみたら、何と下半身が痩せていた！　それも私が生まれて以来のいちばんの問題であった太ももが、何と一・五センチ減！　お尻も二センチ減！

「ばんざーい、ばんざーい、ばんざあーい」

とネコと一緒に万歳三唱である。ネコはけげんな顔をしていたが、私が大喜びしているので、いちおう一緒になって、

「みーっ」

とはしゃいでいた。草履を履くと、脚の内側の筋肉がすごく動いたような気がしていた。最初はつったような感じだったが、今はそんなことはない。今まで使っていない筋肉が動いて、脂肪を燃やしてくれたのか。よく脚が太くてもミニスカートを穿いているうちに細くなるというが、きものを着ていると、下半身のラインがわかるので、体が、

「こんなんじゃ、恥ずかしいわ」

と少し痩せてくれたのだろうか。喜んだついでにウエストを計測してみたら、ぜーんぜん減ってなかった。このまま寸胴（ずんどう）のきものの体型になっていくのだろうか。ま、そうなったらそうなったで、生き方はある。

**三月四日**

お稽古日。いい天気だがとても風が強い。きものを着たときの敵は、私にとっては程度はあるが雨よりも風のような気がする。ただでさえ、与志江先生に教えていただいた歩き方を忘れ、ぱっぱかぱっぱか大股で歩いて、裾から襦袢が丸見えになってしまうので、それプラス風に吹かれるとなると、裾があおられて、

「あーれー」

という感じになる。上前が翻(ひるがえ)らないように風向きを察知して、すばやく体の向きを移動させる。路上で妙なダンスを踊っているかのようである。コートを着る時期はまだいいが、帯付き*の季節になると上前がまくれあがらないようにするのが大変だ。

今日は下にWさんお勧めのブレスサーモを着る。先週と同じ辛子色の半襟に大島。帯は桜を二段に織り出した博多の半幅帯。衝動買いしたベルベット（といってもレーヨン素材）のお手軽コートにショールをして出かける。日差しは暖か、風は冷たく、電車の中はしっかり暖房という、わけのわからない状態である。無事お稽古が終わり、最寄り駅からの帰り道、どうも股間がもこもこする。コートの上から触ってみたら、何やら盛り上がっている。突然、男になったのかしらと、家に帰って見てみたら、肌襦袢と裾除けがわりの、防寒用に着ていた、厚手の上下がつながったワンピース型の肌着が、たくれて股間に団子状にたまっていた。裏が少し毛羽立っているのですべりが悪く、どんどんずり上がって股間にたまってしまったらしい。コートを着ていたから誰にもわからないが、これがコートなしだったら、私は股間もっこりのまま歩くはめになっていたのだ。

ウールのきものもそうだけれども、概してすべりが悪い布地は暖かく、すべりがいい布地は暖かさに欠ける。私は身につけたことはないけれども、ベンベルグ、キュプラの裾除けを使っている人の防寒対策はどうなっているか知りたい。

お勧めのブレスサーモは大ヒットだった。さすがアウトドア用肌着とあって、発汗性と保温性にすぐれていて、家に帰ってもTシャツのようにぐっしょり濡れていることもなく、さ

らさらしていた。これだったら汗をかいた後に冷えて、風邪（かぜ）をひくこともない。天然素材ではないがちくちくしなかったし。世の中はどんどん進歩しているのであった。

**三月五日**

週末までに、本来ならば二月末に渡すはずの、小説の書き下ろしの二回分を渡さなければならず、きものには関わらずに仕事。

**三月六日**

何とか書き上げて送る。仕事が一段落したので、またきもの生活へのあれこれを考えはじめる。考えてみたら、単衣、夏物の紋付きがないことに気付く。紗（しゃ）の小紋は一枚だけ持っているが、あとの夏のきものは織のものばかりで、絽（ろ）なんて一枚もない。これから歳をとるにつれて、夏用の紋付きや、それに準じるものが一枚もないのは、ちょっとまずいのではないかと思い、伊勢丹に連絡する。夏用の雨コートもない。今のところ、多少、銀行口座に残金があるので、あるときに買っておかないと、この出版不況の折り、いつ買えなくなるかわからないし、必要なものなので買うことにする。紗の雨コート地を取り寄せてくれるというので、月曜日に行く約束をする。

野菜の買い出しついでに書店に寄り、ある本に目が吸いついてしまい、買って帰る。栗原（くりはら）はるみさんとお母さまの共著の『覚えておきたい母の味』（扶桑社）という本で、本の帯のお母さまのきものと割烹着姿に惹（ひ）かれたのだ。御歳八十歳で品が良くてきれいで、正しく日本の母をやってこられたという姿を絵に描いたような方だ。前に私は割烹着が似合いすぎて

老けてみえると書いたけれども、お母さまの凜(りん)とした割烹着姿を見ると、

「あんたの中身が悪いんじゃい」

と自分に突っ込みをいれたくなった。やっぱりきちんと生活をやってきた、昭和のおかあさんは美しい。別に昭和生まれだからといって、誰もがそうなれるものではないのだ。格好だけとりつくろってもだめだということが、よーくわかった。掃除がきらいとか、料理が面倒くさいとかいわないで、きちんと生活ができるようになるように、努力したいと思いました。

**三月七日**

これからしばらくは自分の時間がとれるので、またお針の日々である。持ち運ぶための三味線袋（長崎ぶらぶら節で、愛八さんが三味線を持ち歩いていたときに使っていたもの）も縫いたいし、雨の日用のもんぺも縫いたい。やりたいことはたくさんある……。編み物をしていたときも、あれも編みたい、これも編みたいと、毛糸をためこんで、後で気が付いてその量に愕然(がくぜん)としたことがあった。結局はすべて使い果たして、毛糸に関しては今は在庫ゼロになったが。基本的に手作り関係に対する考え方は変わっていないようだ。考えてばかりいないで、やればいいんである。でもそれが……できない。

**三月八日**

以前、何かのためにと買っておいた、昔のマッチラベル柄の木綿で、三味線袋を縫ってみる。本当なら絹で縫いたいところだが、その前に木綿で練習というわけだ。うちにある三味線袋をためつすがめつして、縫い方を研究する。裏側はネルになっていて、二重仕立てであ

る。二重にただ四角に縫い、底の角を三角につまんで縫って、厚みを出せばいいだけだが、あれこれ頭の中で縫い方の手順を組み立てているうちに、それだけで終わってしまった。

## 三月九日

名古屋女子マラソンを見ながら、スタートと同時にちくちくと手縫いで三味線袋を縫い始める。縫い方は頭の中に入れたので、あとはただ手を動かすのみである。木綿で縫う場合は、張りがあるので底の角を三角につまんで厚み分を出さなくても、三味線を中にいれるとおかしくないようだ。絹だったら薄手なので、底辺の角が飛び出るより、きちんと厚みを出して余り分のおさまりをつけたほうがいい。手を動かすと多少なりとも、頭を使っているようである。うちには三味線袋にできそうな、地厚な絹地がないので、インターネットで探したら、防水加工をした雨コート用の繻子（しゅす）の端ぎれを見つけた。これなら多少の雨のときも心配はいらないのではないだろうか。早速、注文した。

## 三月十日

伊勢丹の「三四十会」に行く。縞の泥大島に桜の柄の染帯、明るい黄色の帯揚げに若草色の帯締め。襦袢はブルーグレーの地に鳥獣戯画を墨描きしたものに、*塩瀬（しおぜ）の薄いピンクの半襟をつけた。私にしては画期的な女らしい組み合わせである。コートは二十年前に作った、ろうけつ染めのもの。草履は東雲色（しののめいろ）で春らしい感じである。が、北風が強く、しっかり下にはブレスサーモを着た。

必要なものを頼んでおいたので、それを見せてもらう。柔らかな物は「三四十会」に出店し

ている、京都の「秀粋」にほとんどお世話になっているのだが、ここの製品は職人さんの手仕事が凝っているのに押しつけがましいところがなく、見る人が見たらわかるという作り方で、お値段も商品の質からすると安いと思っている。こちらの反物で何枚か羽織を作らせていただいたが、どれも洒落ていてお気に入りなのだ。

今回も見本として*観世流水（かんぜりゅうすい）の単衣の反物を選んでおいて下さったが、

「きっと柄があるのは、お嫌いでしょうから、それはなしにして、地の観世流水だけですっきりと染めたらいかがですか」

といって下さる。その*一越縮緬（ひとこしちりめん）の反物は観世流水を染めた上に、ぽんぽんと飛び柄がある。せっかくデザインとして会社が作ったのに、その柄を取って欲しいというのは失礼だなと思ったが、

「いいえ、そんなことは全くかまいませんよ。やらせていただきます」

といって下さった。お値段も想像していたよりも遥（はる）かに安くなってうれしい。誂えの染めを引き受けて下さるというのと、観世流水の柄が気に入ったので、絽の紋付きも同じ柄で染めていただくことにする。単衣は縫い紋に、夏物は抜き紋にした。いちおう夏場の礼装きものの心配はなくなる。夏のきものはとても点数が少なく、あってもどうも柄付けが気に入らない物が多いので、これと思ったときに買っておかないと、次に出会うことはほとんどないのだ。

「白大島、入りました」

といわれ、去年、頼んでおいたのをころっと忘れていた。しまったと思いつつ、見せていただき三反のうちいちばん顔映りがよかった物を選ぶ。見るのと当ててみるのとはずいぶん違う。薄い色は特にそうだ。これまでは白なんて考えられず、ベージュや生成など少し色があるものを選んでいたが、最近はその色味によってとても顔がくすんでみえるようになった。今回、いちばん顔映りがよかったのも白地だった。この大島の織元の工房は、お笑いの「ホンジャマカ」の恵氏のご実家だそうで、
「ホンジャマカ大島」
と呼ぶことにする。二十数年前の小紋と紬の寸法直しと、きものの染め直しを一枚頼む。きものを着ると、ショールやストールをすることが多くなるので、アクセサリー売り場で、アールデコ当時のプラスチック製のブローチを何点か買った。セミのブローチを見つけてとてもうれしい。

## 三月十一日

お稽古日。また風が強い。郡上紬に桜柄の半幅帯。半襟は辛子色の絞り。ベルベット風のコートを着てショールをする。昨日買った、プラスチックのブローチを、ショール留めにする。ショールを手で押さえるのは女らしい仕草だけれども、手がそれでふさがるので、ちょっと不便なのだ。風が強い日は手を離すとあおられて飛んでいきそうになるので、私にとってはショール留めは必要なのである。
「ブローチやショール留めを選ぶ楽しみが増えてきたわね」

と不敵な笑いを浮かべる私。こんなことをしていたらきりがない。それでなくても散財したのだから、少しは自粛しなくては。そういえば小学生のとき、木彫りのブローチを作ったのを思い出した。他の女の子がひまわりやマーガレットのお花を彫っているのに、私だけが曲玉(まがたま)がつながったような形を彫って、出来上がったのは大人の人がするような、とても子供らしくないものだった覚えがある。あの当時から、可愛げがなかったのだ。

十五日に四月の舞台の下ざらいがあるので、そのときの演目をさらう。どうしても唄がうまく唄えないし、三味線もあっちこっちつっかかって、我ながら嫌になる。ちゃんとできるのかと不安になりながら、家に帰って昨日石鹼水につけておいた足袋と、履いて出かけた足袋を、しこしこ洗う。足袋も買うときに値段が安いものは、同じキャラコでもすぐにくたびれた感じがしたり、変色したような感じがする。足袋や半襟が汚れているのは、きものが汚れているよりも恥ずかしい。足袋を白く洗い上げることに、命を燃やしそうでこわい。

**三月十二日**

冬っぽい色合いの色半襟がついている襦袢から半襟をはずし、薄色の柄物や塩瀬の半襟につけ替える。お針の日々がはじまった。

**三月十三日**

セールのときに買った小紋が届く。早速、羽織ってみたが、問題があった。東雲色の地に白のみで梅柄が染められていて、裾回しも表地と同じ東雲色にしたのだ。そのとき、表地に透けないかと下に裾回しを当てて確認したのだが、胴裏とのコントラストをすっかり忘れて



3月11日
郡上紬に
桜柄の博多の半幅帯、
ルイ・ヴィトンの
ショール



3月25日
10日と同じ泥大島に、
エジプト柄の
博多の半幅帯

いたのだ。つまり裾回しは裾から六十センチくらいで胴裏と切り替えになる。胴裏の白と裾回しの東雲色と色の明るさの差が表地に映り出てしまい、お尻のあたりでくっきりと境目が出てしまっていたのだ。

「うーむ、もっとよく考えるべきだった。ぼかしの裾回しをつければよかったんだ」

と反省して、もったいないが裾回しを替えてもらうことにしようと、担当者に連絡をするが、休暇をとっていてつかまらなかった。

ワンタッチで袋帯が結べるという、「楽詩帯（らくしたい）」も一緒に届いた。これは手順通りに袋帯を形作り、帯揚げも帯締めも通しておけば、ほんの十秒で袋帯が身につけられるという、アイディアグッズである。袋帯は持っているけれども、結ぶのが面倒で名古屋帯ばかり締めていたが、これがあったら袋帯の出番も増えるかなと考えたのである。まずは四月五日の舞台には袋帯を締めなくてはいけないので、自分で締めるつもりではいるが、万が一、うまくいかなかったときを考えて、その保険のために買ったのだ。しかし説明書を見たら、装着は簡単だがセッティングの段階がたいへんそうな気がしてきて、くらくらしてきた。

**三月十四日**

三味線袋用の繻子の端ぎれが届く。緑色の濃淡の大きな格子と、赤地にクリーム色の矢羽根柄。生地もしっかりしているのでいい袋ができそうだ。明日は四月の舞台のための下ざらいが、浅草公会堂の集会所で行われる。また雨になりそうなので、ちょっとうんざりする。

**三月十五日**

家を出るときはやはり雨になった。以前は雨が降るときものを着るのはやめにしていたのだが、この企画のため雨でもなんでもきものとなると、雨コートの出番が多くなった。コートもさぞかし喜んでいることであろう。会場に到着すると、ほとんどの人が小紋か紬に名古屋帯を締めている。私は大島に桜の柄の半幅帯で、お稽古と同じ姿だったので、くだけすぎたようだ。

「着替えるわけにもいかないし。次から気を付けよう」

と反省する。

出演なさるお師匠さん方も大勢いらしていて、緊張する。といいながらも図々（ずうずう）しくみなさんはどんなきものをお召しなのか、失礼ながらじっと見てしまう。柄付けがあっさりした付下げか、一つ紋付きの色無地で、ほとんど無地に近いおきものばかりである。和の習い事にはいろいろあるが、小唄の会はこういうタイプのきものが王道なのだろう。

## 三月十六日

三味線袋を縫おうと三月九日に注文した布を取り出してみたが、木綿は平気なのだが、絹物を縫うとなると気後（きおく）れして、そのうち気力がなくなってやめた。

## 三月十七日

家にある端ぎれで、うまくつぎはぎすれば、うそつきが作れるかもと思い、押入から出してみたが、頭が働かずにまた押入（つっそで）に逆戻りさせた。昔の女性が端ぎれを、今風にいえばパッチワーク状態にして、肌着の筒袖の部分などにしていたものを見たことがあるが、自分で繰

りまわしが大事といっておきながら、ぱっぱと頭に浮かんでこないところが、まだ繰りまわしが身についていない証拠であろう。

**三月十八日**

お稽古日。縞の郡上紬にエジプト柄の半幅帯。半襟は薄いピンク色の塩瀬。ベルベットのお手軽コートでショールはなし。来月も初旬を過ぎたら帯付きになるから、半幅帯ではなくて名古屋帯でお稽古に行くつもりだ。コートの時期は、半幅帯でも道中はお尻がかくれているけれども、行き帰りの姿がお尻がむきだしというのは、どうも抵抗がある。誰も人の尻なんか見ていないと思うけれども、お太鼓のたれがお尻に少しかかっているだけで、安心なのである。若い人はどんな体型でも半幅帯でかわいらしいけれど、おばちゃんは自分に合った、見苦しくない方法を考えたほうがよい。姉弟子のKさんと顔を合わせると、

「偉いわねえ、がんばってね。ちゃんときれいに着られているわよ。大丈夫。私も若い頃は着ていたんだけど、今は楽だからついつい洋服を着ちゃうのよね。きものはいいなって思うんだけど。だからきものを着ている人を見ると、ほっとしてとてもいい気持ちになるの。きもの姿の人を見るのはとても好きなのよ。あなたが今年一年、ずっときものでって先生からうかがったでしょう。今日もおきものかなと思うと、お稽古に来るのも楽しみなのよ。だから私たちのためにもずっと続けてね」

と励ましていただいた。申し訳ない限りである。

**三月十九日**

この企画の一月、二月分のほぼ決定稿を渡す。コーディネートは一月十四日と同じ。ふだんにあれこれいろいろな物を着ると、洗いに出すまでには至らないが、平均的に薄汚れた物が増える。となると不経済なので、あるきものと帯を集中的に着て、シーズンの変わり目に生洗いに出そうという魂胆なのである。そう考えると、きものは袷、単衣、夏物と、季節によって約束事があって、素材違いが必要になるが、夏場は別にして、それほど枚数がなくてもいいような気がする。

下に着たベージュの茄子柄の襦袢が袖口からぺろんと出てくる。今まではそんなことはなかったのにと思いながら、安全ピンで留めつけて出かける。そのときの着方によるのか、何らかの具合でそうなってしまうのか。外出するときには、家で着ているときよりも意識してきものの着丈を長めにしたら、歩いていて裾が翻りにくくなった。たった二、三センチのことだろうと思うのだが、それでもずいぶん違った。

## 三月二十日

夕方から麻雀なので、洋服で出かけるつもりなのに、何を着ていいのやら見当がつかない。きものを買うようになってから、家で着るふだん着以外の、外できばって着るような服はほとんど買わなくなってしまったので、現在の自分に何が似合うのかわからない。出かけるときは、以前に買った、ジュンヤワタナベ、コムデギャルソン、ジル・サンダーの服、それぞれ二、三点ずつを、流行にかまわずあれこれ組み合わせて着ているのだが、似合ってんだか似合ってないんだか、よくわかんなくなってきている。きものだとあれこれ組み合わせが

浮かんでくるのに、洋服だと手持ちの点数が少ないというのに、ぜんぜん、頭に浮かばない。これではいけないとは思うのだが。結局、こんなもんでいいかという雰囲気で適当に選んで着ていった。

**三月二十一日**

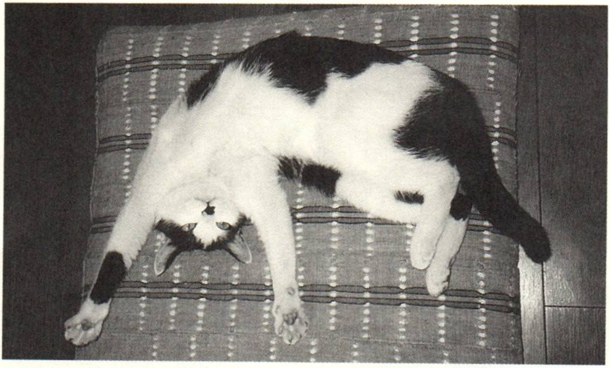
石鹼水につけておいた足袋を手洗いする。少しの汚れも意地になって、足袋用に購入した小さな洗濯板にこすりつけて洗ってしまう。絹の半襟も足袋みたいに、すっきりと汚れが落ちてくれればいいのに、なかなかそうはいかない。クリーニングは好きじゃないけれども、今度、出してみようか。

**三月二十二日**

四月からの帯付きの季節を考え、何点かあるつけ帯を出してみる。数年前にぽつぽつとデザインとして穴があいた木綿の古布をつけ帯にしてもらったが、取り出してみたら、どうも締めるには難しいような気がしてきた。若い人が締めるにはいいかもしれないが、今の私がすると薄汚くみえそうだった。周囲でもこの帯が似合いそうな人は思いつかず、生地が厚いので座布団カバーにすることにした。つけ帯なので普通の名古屋帯より長さはない。縦、横と布をあてがってみて、なんとかできそうなので安心する。

**三月二十三日**

座布団カバーを手縫いで縫う。ただ直線を縫っていくだけなので簡単だ。最後もファスナーなどつけずに、糸でただ留めつけていく。洗ったときの縮みを考え、たっぷりめに縫い代



座布団を奪取し、万歳（？）するしいちゃん

をとったら、残り布は幅五センチのみ。

「やった！」

という気分である。和風のものは、反物の幅、座布団の大きさ、すべてリンクしていて、本当に無駄がないと感心するばかりだ。三味線のお稽古をするときに使おうとしたら、うちのネコがささっときて、その上にころりと寝てしまう。

「あの、それ、おかあちゃんが今縫ったばかりなんだけど」

といっても、ぺろぺろと前足を舐めたりなんかして、知らんぷりである。座布団から離れたのを狙って、和室に持っていこうとしたら、

「んぎゃー」

とものすごい勢いで戻ってきて怒る。

「どうしてもこれがいいの」

と聞くと、

「んー」

という。結局、ネコ布団になってしまった。

三月二十四日

急に柄半襟が似合わなくなってきたような気がしてきて少し悩む。洋服はデザインによって、似合う似合わないが歴然として現れるが、きものもそうであることがわかってきた。二十代、三十代で買ったものが、どうも最近、しっくりこない。そのままで着るとどうも老けてみえるようになった。茶系、紺系ばかりだから仕方がない。若さがなくなってきたのを痛感した。

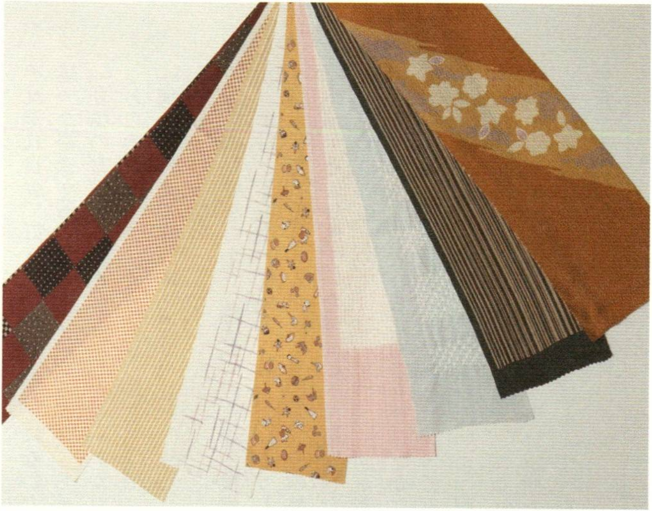
これまではそういった地味なきものに、柄半襟で変化を付けていたのだが、それがどうも似合わない。わざとらしいというか、浮わついた感じに見える。三十代にはあれだけ地味だった、ベージュや若草といった薄い色の半襟のほうが、見ていてなじみがいいのだ。

柄半襟でもシンプルな絞りや、柄が目立たないものだとまだ大丈夫だが、どちらにせよ、無地っぽい雰囲気でないと似合わない。そのかわりに大胆なきものの意匠の場合、年輩の人のほうが似合ったりすることもある。これが不思議なところである。こういうところがきものの奥深さで、一度足を踏み入れたらなかなか抜け出られない所以(ゆえん)だろう。

三月二十五日

お稽古日で雨が強い。縞の泥大島にエジプト柄の半幅帯。半襟は薄ピンクの塩瀬である。降りが強くてコートがびしょびしょに濡れる。

二年に一度、会ではお揃いの浴衣を誂えていたのに、今年からはそれが廃止になってしまった。私は入門した年に誂えたものが一枚あるだけ。楽しみだったのに残念だ。今年からは



持っているだけでも楽しい
おしゃれな柄半襟



半襟をつけるときなどに
活躍している
“ポータブル針箱”

それぞれ自分で好きなのを着ることになった。さあ、それまでに和裁の腕を上げて、自分で縫った浴衣が着られるようになるか？　ちょっと難しいかも……。師匠は、
「夏場のお稽古のときはどうしたらいいかしらねえ。うーん」
とこの企画について真剣に心配して下さっている。こちらは、
「何から何まで申し訳ありません」
というしかない。
師匠のお宅から十五分ほどの浅草寺の境内を歩きながら、ふと足元を見ると、足袋の甲がうっすらと赤くなっている。いったいどうしたのかと思いつつ、デパートのトイレで持っていた替足袋に履き替えて家に帰ると、その替えた足袋のかかとと甲が赤く染まっているではないか。その日着ていた雨コートは臙脂色（えんじいろ）だったのだが、その色が出たらしい。このコートは京都の老舗のもので、これまでも何回か着ているが、こんなことははじめてだった。たしかに今日は今まででいちばん降りがひどかったが。足袋が染まるくらいならまだしも、きものに色がついていたらいやだなと、調べてみたが染まっているふうでもなく、泥大島なので万が一染まっていても全然目立たないようだった。赤い色はどんなものに染められていても、色が出やすいと聞いたことがあるが、雨コートは防水や撥水（はっすい）加工がしてあるはずだし、それで色が出るのは困るのだ。雨コートは臙脂などの赤系の地のものが多いが、みなが問題なく着ているのを考えると、そんなにあるようなケースではないだろう。あったら困る。

## 三月二十六日

締切りが迫っているので、きものの整理もしたいのだが、やめにして原稿を書く。こんなに毎月、きものの整理をしなくてはと思いつつできないなんて、なんとかかんとかいう、片づけられない病気なんだろうか。赤く染まった足袋の色は、完全ではないがいちおうとれた。

**三月二十七日**

原稿書きに飽きて、この間、袖口からぺろんと出てきた茄子柄襦袢の裄(ゆき)の寸法をあたってみたら長くなっていた。実は着用後、風を通そうと思って、洋服用のハンガーにかけたまま、ほったらかしにしておいたのである。もう一枚のグリーンの男物の襦袢も調べてみたら、同じように肩の部分が伸びてしまっていた。ハンガーの肩から垂れ下がった部分がバイアスになってしまって、伸びてしまったようだ。よい子のみなさんはこういうことをしてはいけません。これらはうちで手洗いする襦袢なので、洗ったら元に戻るかもと期待しているのだが、どうなることやら。

**三月二十八日**

原稿を書いていても、四月からの半襟をどうするか、ちらちらと頭に浮かんでくる。きものを着る回数が多くなってくると、季節をより意識するようになった。前はただ「着る」ことに重点をおいていたが、週に一度でも着るのが当たり前になると、天気、気温、季節を考える。また人のために着るという意識も出てきた。自分が辛いのは問題外だが、多少のことだったら、春らしく見えるように、不愉快な感じにはならないようにということだ。これもある程度、歳をとった証拠だろうか。考え始めるときりがないので、頭を仕事に切り換える。

**三月二十九日**

原稿を書いていても、夏場のお稽古着をどうするか、こちらもちらちらと頭に浮かんでくる。きものをふだんに着ている方々は、みなさん、

「夏が……」

とおっしゃる。きものを着る人にとっては、大変な季節なのだろう。心しておかなくてはいけない。これまた考え始めるときりがないので、頭を仕事に切り換える。

**三月三十日**

何とか原稿を二本、仕上げる。これから汗をかく季節もやってくるから、今まで着たことがなかった、うそつきに挑戦してみよう。私はきもの好きよりも襦袢好きといったほうがいいくらいだったので、うそつきには縁がなかった。襦袢よりも着崩れしないそうだが、いったいどうなのだろう。

**三月三十一日**

端ぎれ、セールのときに買っておいた襦袢地の反物をじっと見つめる。絹物でも袖と裾除けなら何とか作れそうだ。一日が四十時間くらいあればいいのに。


「四月」

## 四月五日のコーディネート

きもの　ピンクがかった薄茶の、刺繍一つ紋付き角通(かくとお)し小紋
帯　川島織物の真珠色の有職紋様袋帯
帯揚げ　薄いピンク
帯締め　白の冠組(ゆるぎぐみ)で房の中が赤く染められたもの
半襟　白の塩瀬
襦袢　折鶴と風車が織りだされた、
ピンクとクリーム色のぼかし
足袋　白足袋
草履　クリーム色の革草履



マッチラベル柄の、お手製の三味線袋

# 四月

## 四月一日

一年以上前から練習していた、小唄の会がとうとう五日に開かれる。本当はうちの若先生の、見台開きなのだが、私もおまけで名取の名披露目を、三味線でさせていただくのである。着るものは二年前の名取式に作った、ピンクがかった薄茶色の刺繍紋付き*角通(かくとお)しに、川島の真珠色の地の袋帯に決めている。襦袢は折鶴と風車が織りだしてある、ピンクとクリーム色のぼかし。帯揚げは薄いピンク。帯締めはいちおうめでたさを出して、白の*冠組(ゆるぎぐみ)で房の中が赤く染められているものに決めた。



## 四月二日

単行本の打ち合わせだが、雨がひどいので掟を破って洋服で出かける。一枚の雨コートが丈直し、もう一枚が色が出てくるという有様で在庫がない。ポリエステル製の雨コート兼ちりよけの、*アップルコートがあるはずなのだが、整理途中の帯やきものの山の中から見つけることができず、断念してしまった。見つけておかなければいけない。

**四月三日**

舞台前の最後のお稽古。とっても春らしいいい日和だったので、今年、正月から着倒している、偽大島に丸や三角柄の半幅帯を締めて、桜色の*柳絞りの羽織を着た。ふだん地味な色ばかり着ているので、桜色はめずらしいのだが、たまにはいいものだ。風が強いので、裾が煽られる。たしか東スカートというものがあったはずと、仲見世の「かづさや」に寄ってみる。東スカートとは、裾除けの内側にパネルのように布が縫いつけられていて、簡単にいえば輪になっているので、これを穿いていれば、どんなに強風でも大根足がにょきっと出ないというわけなのである。絹のは店頭になかったので、

「また一週間後に来ますから、取り寄せておいていただけますか」

といったら、

「いえ、あるはずですから、すぐに倉庫から出してお送りします」

と店員さんが在庫確認をしてくれて、送り状を持ってきた。これで強風でも安心してきものが着られる。うれしくなったが、そんなことより肝心なのは舞台のことだろうと気付き、またちょっと暗くなる。



4月3日
着慣れた偽大島に
丸や三角の柄の
半幅帯。桜色に
若草色が入った
柳絞りの羽織で
春らしく



薄手の結城紬を
2種類の名古屋帯で着る。
上:茜染め(4月29日)
下:イカット(4月22日)

家に帰って「楽詩帯」と袋帯を取り出し、説明書と首っ引きでセッティングをしてみる。特許をとった商品で、胴に巻きつける幅広の布ベルトがあり、そこの中央部にお太鼓を形作り、右側に胴回り分の長さをとる。そして着るときと同じようにお太鼓の山の中に帯揚げにくるんだ帯枕*をいれ、ての部分も差し込んで帯締めをのせる。簡単にいえばお太鼓を形作った布ベルトを胴に巻き、その上に前帯部分を巻きつけて、お太鼓の背の部分にさしこみ、上に帯締めを締めて固定する。つまり帯は畳んでいるだけで一切、結んでおらず、体に巻きつけているだけなのである。胴回りの余分な分はぜんぶお太鼓の下に畳み込んで、マジックテープで固定するようになっている。

「ほおほお」

理屈ではわかるのだが、いざやってみると、前帯やお太鼓の柄出しがうまくいかず、ああだこうだとやっているうちに、頭が痛くなってきた。試しに普通の方法で袋帯を締めてみたら、ちゃんと一回で結べてしまった。

「なんだ、できるじゃん」

セッティングする手間を考えたら、自分で結んだほうが何倍も早かった。でも長すぎる袋帯を締めるときには具合がよさそうなので、また使うチャンスはあるだろう。

春先になると半襟の汚れがひどくなる。特に車の往来が激しいところを歩くと、てきめんに汚れ度が違う。首に触れているところはもちろんだが、抜いている襟の部分もはずしてみるとうっすらと汚れている。折り山のところではなくて、内側の部分だ。ほこりやら排気ガ

スが付着しているのではないだろうか。襟についているときはわからないが、はずしてみると、

「げげっ」

となって、洗濯に命を燃やしてしまうのである。

**四月四日**

明日着る襦袢、着物、帯を出しておく。半襟は新しいものにつけ替える。天気が悪いらしいので、あわてて和室の荷物をひっくり返したら、下のほうでぺっちゃんこになっていたアップルコートを発見。ひきずり出す。買っておいてよかった。

**四月五日**

舞台当日。朝、六時半に起き、ものすごい天気の悪さに、誰に文句をいえるわけではないが、むっとする。よりによって、今日じゃなくてもいいじゃないかというくらいの雨と風である。軽く朝食をとって、きものを着始めるが、裾丈を決めるのに難儀して、考えていた以上に時間がかかってしまった。柔らか物は着慣れていないので、どうもうまくいかない。感じからすると紬に比べて着丈を長く仕立ててあるようだ。それに比べて、袋帯は一回で締められた。なかなかいい展開である。腰ひもで裾をからげて、上にアップルコートを着て、タクシーを呼んで、荷物と三味線を持って、茅場町（かやばちょう）の証券ホールに出かける。何だかわからないが、私にとっては引っ越しと同じくらいの大仕事である。

同じ会の若いお嬢さんたちは、華やかな訪問着や小紋でとてもかわいらしい。自分が中年

になってからわかったが、若いときにはそのときにしか似合わないものがあるのだ。私の場合は若いころからねえやのきものみたいなものばかりにしか目がいかなかったし、母親も私と同じような好みなので、若い娘さん向きの柄は絶対に勧めなかった。自分にも着られるようなものを、私にちゃっかり勧めておいて、

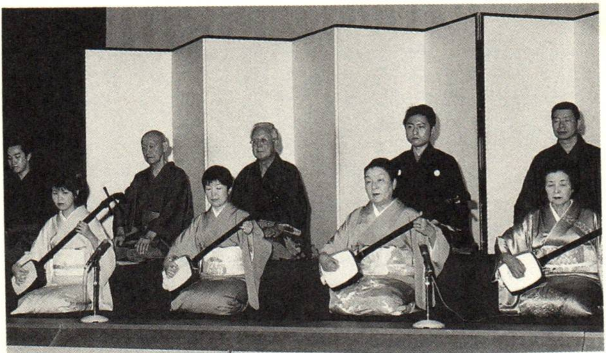
「あれはお姉ちゃんにはまだ地味だから、私が着て、着やすくしておいてあげる」

とわけのわからない理屈で持っていってしまった。結局、反物を選ぶときに私の好みに反対していたのは呉服店の人ばかりで、彼らがいつも当惑していたのを思い出す。頭の中には、「きものは一生物」というイメージがあったので、いつもおばあちゃんになっても着られるものを選んでいた。私は若いときだけしか似合わないものを、着る機会もなく選ぶこともなく、逃してしまったようだ。

なんとか舞台も午後七時前に無事終了。師匠のお話によると、小唄の会では証券ホールでは画期的なお客様の数だったそうだ。相変わらず雨降りの中をタクシーで帰る。家に帰ってきものを点検すると、あちらこちらにしみがついていた。楽屋で物を食べたりしているうちに、ついてしまったらしい。糸印をつけてすぐに伊勢丹で手入れをしてもらうことにする。十一時過ぎたら急に睡魔が襲ってきて、寝てしまった。

**四月六日**

見事に喉が赤い！　実は昨日、ずっとホールの中にいるし、移動もタクシーだからと、半袖シャツを着なかったら、てきめんにまっかっか。室内では汗ばむくらいだったのに、だか



4月5日の小唄の会で。前列右から２人目が師匠

らといって喉が赤くならないというわけではないようだ。それもものすごく痛い。

「ああ、念のために着ておけばよかった」

と後悔しても遅く、ひたすらうがいとのど飴を舐めまくる。

**四月七日**

昨日より喉の状態がひどい。咳は全然出ないものの、赤色がどんどんひどくなっていく。私には半袖シャツは、暖かくなっても必需品のようだ。

「ものすんごく、不愉快」

とむっとしながら、一日過ごす。肘から上の部分が暖かければ、喉は赤くならない。しかし昔の防寒用の肌着などを調べてみると、背中に真綿をのせた半襦袢があったり、羽織下を着たりしていたようだ。でも腕の部分が暖かくなっているようなものは見たことがない。特異体質なんだろうか。家できものを着はじめて喉が赤くなるのを発見したころ、背中が冷えるのが原因ではないかと、まっさきに疑ったのは半幅帯だった。

以前にきものを着たときは、ほとんど名古屋帯だったので、背中にお太鼓がある。それが保温につながっていたのに、半幅帯を締めて体が冷えたのではと考えていたのだ。しかし袋帯を締めても喉が赤くなるとわかった今、原因は半幅帯でもないし、背中が冷えているというわけでもないことが判明した。理由はすべて二の腕なのである。襦袢の下に着る薄手ニットのセーターのようなものも見たが、袖だけがウールというものはない。ま、考えてみたら当たり前だが。昔、事務の人がワイシャツの上にはめていた、汚れ防止の腕貫みたいなのを細い毛糸で編んで、それを二の腕にはめるしかないのか。

**四月八日**

女優の名取裕子（なとりゆうこ）さんとの、「青春と読書」での対談が十日にある。今年の夏に、私の小唄の師匠をモデルにした小説、『小美代姐さん花乱万丈』が三越劇場で舞台になる。名取さんは主演で小美代姐さんを演じてくださるのだ。前々から私の本を読んでくださっていたそうで、恐縮してしまった。

**四月九日**

対談の掲載月が六月なので、袷でいいのか、それとも単衣か、名取さんはどうなさるのか聞いてもらうと、袷の着物だということなので、それに合わせる。写真がモノクロなので、どうしようかと考えつつ、白大島にするか＊お召（めし）にするか考える。お召は水に濡れると縮むので、雨の気配のする日には絶対に着られない。天気予報によると間違いなく晴れらしいので、お召のほうに決める。帯は、川島のいちばん安いタイプの名古屋帯である。ポップでかわい

い帯を探していたのだが、見たとたんに、
「あ、これだっ」
と気に入ってしまったものである。帯揚げは若草色。帯締めは薄いベージュがいいかと思ったのだが、持っている冠組*ではその色がなかったので、トンボ玉がついた組み出し*の帯締めを前後逆に使う。

**四月十日**

雨は降りそうにないいい天気なので、お召に決定。半袖シャツを忘れずに着る。でもお洒落をしたときほど、下に半袖シャツを着るのは我ながら情けない。身八つ口が開いていない肌襦袢で、袖のところがぴったりめでネルでできてるとか、そういうのを作ればいいのだろうか。あれこれ試したいが、今のところは半袖シャツに頼るしかない。草履は東雲色（しののめいろ）でバッグは似たような色のフェンディ。行きは電車なので、ちりよけがわりに柳絞りの羽織を着ていく。本来ならば、四月は帯付きで、羽織だったら単衣なのだろうが、道行コート丈のちりよけは持っていないし、まあ、羽織の色も薄いし、十日はまだ初旬だからいいかと、羽織を着ていった。もちろん対談のときは脱ぐけれど。

名取さんは白大島を着ていて、白大島にしなくてよかったとほっとした。前からきものの雑誌できもの姿を拝見していて、素敵だなと思っていたが、さりげない装いですっきりしていてやはりとても素敵だった。テレビに出ている方はみなそうだが、実際にお会いするとみなさん細いのである。きものの柄や帯がごちゃごちゃしていないところが、名取さ

んの好みを表していて、まさに、
「きっぱり！」
といった感じだった。
私は白っぽい着物だと、ついつい襦袢も白っぽくしてしまうのだけれども、名取さんはブルー地に小さい丸が泡のように染め出されている、襦袢をお召しになっていた。なるほど、こういう合わせ方もあるのだなと感心した。名取さんは私よりも年下だけれども、すっきりとした大人の装い。私は五十路を前にして絣柄にポップな帯という、正反対のコーディネートになった。
「私って本当に、もうちょっと何とか、大人になったほうがいい」
と反省する。いつまでも「こけし」「猫娘」「ひよこ」「ぢぞう」とか呼ばれている場合ではないのである。名取さんを見習って、大人のきりっとした女性になるわ！　と思ったけれども、両耳の上あたりから、
「無理、無理」
という声が聞こえてきた。名取さんは顔も小さくてすらっとしているけれど、私は身長一六五センチの人をぐいっと上から押しつぶして、下半身だけ重点的に寸詰まっちゃったような体型だ。大人の女への道は遠いと思いつつ、
「来年、五十歳なのに何いってんだ。十分大人だろうが」
と自分に突っ込みをいれた。



同じ動物好きとしても話が弾んだ名取さんと（写真・秋元孝夫）

**四月十一日**

　毎日、きものを着ているわけではないけれども、ふだんにもきものを着るようになって、私のなかで変わったのは、雑誌に出ているきもの姿に興味がなくなってきたことだった。ある時期はきものの雑誌を見るのが、本当に楽しみだった。ページをめくるたびに、

「あれも素敵、これも素敵」

　とうっとりして、心の安らぎを得ていた。ところがふだんに着るとなると、いわゆるきれいな格好なんてしないから、動きやすいウール、木綿、紬に半幅帯スタイルで、自分の手持ちの中からあれこれ組み合わせる。そんなことをしているうちに、日常着の組み合わせのほうが面白くなって、雑誌に掲載されている、いわゆるお出かけ用のお洒落なきものに、興味が持てなくなってきたのである。

「この端ぎれ、こっちとはぎ合わせてうそつきの袖にしようか」

　とか、二十代の若いころに買った半幅帯を見て、

「あ、これ、この間のきものにぴったり」
と新たな発見をしたりして、受け身で雑誌を見ているよりも、数段面白い。きものは高校生のころから、ちょこちょこと買っていたから、まあ、在庫は多少あるわけだが、それが中高年といわれる今になっても、何とか生かして着ようと、ない知恵を絞るほうが面白くなってきた。こんなことをしていると、ますます店ではきものが売れなくなってしまうのだろうけど。

**四月十二日**

そろそろ半襟も整理しなくてはいけない。やはり同じような色合いでも、ぼってりした厚地のものは季節に合わないから。襦袢からはずして洗って、縫いつけてというお針子仕事。仕事が一段落しないとできないなあと、まとめて半襟つけをはじめると大変なのはわかっているけれども、ちょっと残念だ。

**四月十三日**

早く仕事を終えて、きもの周辺を調えたいと思うのだが、なかなかはかどらず。

**四月十四日**

伊勢丹に行って、色が出た雨コートと千總の小紋を渡す。頼んでおいた小紋の染め直しの色具合を見せてもらう。以前、誂えで破れ麻の葉を染めたのだが、上がってきた色合いが想像していたのと微妙にずれていて、そのときは、まあいいかと思ったものの、結局はタンスにしまったままだった。このままではこれからも着ないだろうし、生地は悪くないので紋付

きの黒羽織にしようと、黒に染めるように頼んでおいたのだ。模様も全部つぶれていて、ただ黒一色に見えるので、羽織に仕立ててもらうことにした。黒の紋付き羽織があれば、黒の角通しに黒い喪の帯で不祝儀にも行けるし。年齢のせいかこのごろはお祝いの席よりも不祝儀の席のほうが多く、ブラックフォーマルが必需品になってきた。といっても、センスのいい服はなかなか見つからず、無難なものを買っても三年経つと古臭く見えてくる。黒で安っぽいものは着たくないので、それなりの値段を出しても、長い間着られないのである。それだったらいっそのこと、これからはきもののほうが無駄がないと考えたのだ。いつもは冠組の帯締めばかりなのだが、変わった組の帯締めを買って帰った。

## 四月十五日

五日の舞台が終わってはじめてのお稽古日。雨模様なので、アップルコートに格子の紬、博多半幅帯を締めて出かける。若い頃に買ったこの紬は何となく着にくくて、タンスのこやしになっていたが、雨の日だから着てみようかという気になった。が、どうも太ってみえる。格子が大きすぎるようだ。

「でも、いいや。雨だから」

ときものには気の毒だが、これを選んだ。襦袢も本当はこういった紬に合わせるものではないのだが、ずいぶん着ていて生洗いに出す前に着てしまおうと、雨の日は結構、適当になる。

舞台が終わってお稽古も何だか半分、放心状態といった感じ。気候もあるのだろうが、やはりポリエステルのコートは暑い。汚れなどが気にならないのはいいが、湿気が多い季節に

は、サウナスーツになってちょっと私にはきついかも。それで痩せるのならいいけれど、そうはうまくいかないのである。

**四月十六日**

仕事をしながら、あさっての取材で着るきものを考える。

**四月十七日**

半襟つけをしなければとあせる。

**四月十八日**

雑誌の取材のため、椿山荘（ちんざんそう）へ。まるで初夏のような気候。きものを着るにはいいけれども、掲載が六月なので単衣か袷か迷ったが、*伊兵衛織（いへえおり）の薄手の単衣に、*ぜんまい織の名古屋帯。色だけは夏の雰囲気の、白地に緑色と黄色の大きな丸が、ところどころに飛んでいる袷の襦袢を着ていく。バッグは若草色で草履は薄いベージュ。取材を受けながらお太鼓とたれに手をやると、たれがずいぶん長くなっている。おかしいなと思いつつ、家に帰って調べたら、きっちり締めたはずなのに、帯締めがゆるんでいた。今日の帯締めは横長のトンボ玉の組み出しで、ひもの部分はうすいクリーム色なのだ。帯を締めるときに、ずいぶん、つるつるすべる感じがするなと思っていたのだが、帯締めとのバランスで、ゆるんできてしまうことがあるようだ。たれがびろーんと下がってこないで本当によかった。

**四月十九日**

「吉兆」での、伊勢丹主催の食事つき展示会。二年ぶりに知り合いのDさんと一緒に行く。

一月の取材のときに着ていた縞結城に、川島の紬綴の唐草柄の名古屋帯を締めていく。いつも出品されるのは川島織物の帯と千總の着物だが、今回は他社から夏物の*上布（じょうふ）類なども何点か出品されているらしい。買えなくても職人の手がかけられた品物を見るのは、目の保養になるし、気持ちが安らぐ。前に頼んでいた夏物の紋付き用の帯を見せてもらったので、そのなかから決めた。Dさんはワイン色の地の帯を気に入っていた。洒落た名古屋帯で、彼女は、

「派手かしら」

と気にしていたが、合わせてみたらとても素敵に似合っている。私も予定外だったが、リスが走っている名古屋帯を買ってしまう。私の大好きな、川島の十万円代の名古屋帯である。改まった柄のもの、エスニック系の柄のものが各種揃っていた。お値段は十三万円くらいから。品質は間違いないし、締めやすいし、何本か持っているが、それらの帯を締めていると、必ず誉（ほ）められる。私の一推し帯なのだ。柄付けは見えるところだけにしかされていないが、締めるにはそれで十分。ただあまりに体格がいい人には丈が足りなくて柄出しが大変かもしれないが、もともとの素材がいいのでとても扱いやすい。着られないけど、素晴らしい手仕事の振袖や、手描き友禅の小紋、見たこともないような、*小石丸の美しい白生地にくらくらする。本当にいいものからは目が離せず、ふと気が付くとものすごく顔を近づけていたりする。

眼福で幸せな気分のまま、Dさんと別れて師匠の家に行く。『小美代姐さん花乱万丈』と

いう本に、私と師匠のサインが欲しいということで、二十冊、書かなくてはならないのだ。師匠は、私の姿を見て、
「地味ねえ、私が着てもいいくらい。つばをつけておこうかしら」
と笑いながらおっしゃった。
「あなたは堅気(かたぎ)さんの趣味とは少しちがうのよね」
趣味のほうはわからないが、地味だというのはそうかもしれないなあと納得する。そういう色合いのほうが落ち着くのだけれども、年齢を考えると地味にしすぎると老けるので、そのへんを考えないといけないいなと思う。

**四月二十日**

そろそろ月末の締切りの準備があるので、終日、資料の本を読む。半襟もつけ替えたいが、どうも時間がとれない。きもののことを考えると、頭がそっちのほうに行ってしまうので、ひたすら資料に没頭するように努める。

**四月二十一日**

昨日と同じ。仕事の合間に意味もなく和室の中をぐるぐると歩きまわる。小物類の整理をするわけでもなく、ただ置いてあるものを見渡すだけ。自分でも何のためにそんなことをしているのかわからない。きものは着ないものの、そこにあるということで安心しているのか、それとも、これだけ整理しなくちゃいけないものがあるんだから、早く仕事をしろよという意味合いか。十分ほどうろうろした後、資料をふたたび読みはじめる。夜は眠るネコを膝の

上にのせたまま、ずっと資料を読み続け、
「はあ〜」
とため息をついてネコと一緒にベッドで寝た。

**四月二十二日**

お稽古日。かすれた感じの薄茶の薄手の結城紬に、イカット*の木綿の名古屋帯を締めて行く。帯揚げは石榴染め(ざくろぞめ)のグレーとピンクがまじったような色で、デパートで買ったものだが、これはとても使いやすい色だ。薄ピンク色の帯締めを締める。師匠に、
「きれいに着てるけど、やっぱり地味ねえ」
といわれ、お互いに顔を見合わせて笑ってしまう。

ありがたいことに、Tシャツを着なくても、喉は赤くならなくなった。私にとっての冬は去ったということだが、今度は暑さ対策が必要になってきた。家に帰ってきものを脱いだら、私はそれほど汗かきではないはずなのに、汗でじっとりと襦袢の上半身までしめっている。あわててきものハンガーにかけて、風を通す。最近は昔の気持ちのいい春の季節などほとんどなく、肌寒さから急に暑さに移行してしまうようだ。風情がなくものすごくつまらない気候である。外に出ても喉が赤くならず、汗もかかないような気候が、少しでも長く続いてほしいものだ。

**四月二十三日**

襦袢につけてある半襟が、強い色、こってりした柄だとおかしいので、春、初夏用の風合

いのものにつけ替えたいのだが、いかんせん仕事が詰まっていて何もできず。前に半襟をつけるときに、単衣用の襦袢にも半襟をつけておけばいいのに、袷の襦袢にばかり気がいっていたものだから、こんなことになるのだ。我ながら本当に段取りが悪いと呆(あき)れる。もうちょっと頭を使わないと無駄な時間が過ぎるだけである。あまりに半襟のことばかり考えすぎて、どの季節にどの半襟をつけるんだか、わからなくなってくる。これからはあまり濃い色の襦袢もふさわしくないし。ああ、また頭がいっぱいになってくる。お針子仕事が続くとうんざりするが、全くできないとこれがつまらない。わがままな自分にも呆れるばかりである。

**四月二十四日**

いつも品物を出しているバザー主催者から案内が来ていたのを思い出した。不要品といっては先方に失礼かもしれないが、うちでは使わないものを何度か出している。今回は先方から来た必要な品物リストのなかに和服があったので、これ幸いと整理することにした。大昔に買ったもので、周囲に似合う人もいそうになく、これからも絶対に着ることはない。ほどいて布地にしておくという方法もあるが、寝かせておくよりはサイズと好みの合う方にすぐに着てもらうか、すぐに再利用できる方の手に渡ったほうがいいと思い、数は少ないけれど木綿、紬、名古屋帯、帯揚げ、帯締めを送っておいた。きもの好きな人の目にとまって、使ってもらえたらうれしい。

**四月二十五日**

仕事がせっぱ詰まっているので、頭の三分の二は仕事のことだが、片隅で初夏の支度につ

涼しそうな感じがして好きだ。好きなのはいいけど、ちゃんと準備しておかなくては。

いて考える。冬場は色や柄の半襟をつけるが、夏単衣や薄物（うすもの）*のときは、やはり白地のほうが

## 四月二十六日

半襟だけではなく襦袢についても考えなくてはならない。仕事をしながらちらちらときもの

のが置いてある和室のほうを見る。うろうろしているとつい余計なことに手を出してしまう

ので、このところは和室に入るのも自粛している。

## 四月二十七日

世の中は日曜日だが、こういう仕事をしていると、休日、祭日など関係がなくなってくる。

お休みがきっちりと決まっている人だったら、休みの日にまとめて片づけを、と考えたりす

るだろうが、私のような仕事だと、いつまでたってもずるずるとそのままだ。えいっと一振

りしたら、ささーっときれいにすべての物を片づけてくれる魔法の棒が欲しい。

## 四月二十八日

いつになったらきものの整理ができるやらと頭が痛い。年明け早々から、同じことばかり

繰り返しているような気がする。今は桐タンス二棹（ふたさお）にきもの、羽織、コートなどを入れ、そ

れに入りきらないものは、箱のまま積んである。袋帯もステンレスの組立式の棚に積んだま

ま。名古屋帯はベッドルームに積んである。押入タンスには木綿のつけ帯、プラスチックケ

ースには端ぎれ、きもの用の肌着、ショールなどがいれてある。ベッドルームの洋服用のチ

ェストのひとつは襦袢入れになった。桐タンスをもう一棹買えば収まるのだろうが、値段を

考えるとどうしても二の足をふんでしまう。やっぱり量が多すぎるのか。在庫チェックが必要なのだろうか。

**四月二十九日**

祝日だがお稽古日。先週と同じ紬に、茜染め（あかねぞめ）の名古屋帯。襦袢も先週と同じである。肌色地に茜染めと同じ色の小さな絞りが飛んだ帯揚げに、白地に多色が入った帯締めを締めていく。実は出かけるときに手間取ってしまって時間がなく、帯締めを選んでいる時間がなくなって、適当に締めてしまったので、これでよかったのか、ぜーんぜんわからない。昔は寸分の隙もないようにと、前日にすべてきちっと揃えていたが、今はその点はとてもだらしがない。

これまでは「春日会」のほうから、二年に一度、お揃いの浴衣の反物が届いていたのが、廃止になってしまったのは、前にも書いたとおりである。それならばうちの師匠の「せい吉会」として、お揃いの浴衣を作ろうという話になったそうで、師匠が懇意にしている浅草の呉服店から、生地見本帳が届けられた。姉弟子のKさん、私がいたのだが、師匠が、

「私たちだけで決めちゃいましょ」

と大胆なことをおっしゃる。

「いえ、それは先生がお決めになれば……」

とKさんと私はあせった。男女兼用なので、あまりに男性ぽくても、女性ぽくてもいけない。でも女性のほうがどちらの柄も着られることを考えると、どうしても柄ゆきはより男性

用に近いものになってしまうのは否めないのだ。白地に藍で大きな扇面が散らしてあるものは、

「こういう柄ゆきは落語家さんがよく着てるわね」

と師匠が教えてくれた。

「これは踊りの人ね」

踊り手好みの柄は大ぶりで華やかだ。

「この柄は群さんにぴったりよ。あなたはこういう優しい柄が似合うわ」

白地に小ぶりな花が、流れるように配置してある。私自身はあまりこういう柄を選んだことがないので意外だったが、背は低いし体型を考えると、そうかもしれないなと思う。どうも性格が優しくないので、つい性格に合った直線的な柄ばかり選んでしまうが、これからは少し固定観念をはずしたほうがいいかもしれない。なかなか自分の思いこみは捨てられないものだ。きもののプロの師匠のアドバイスだから、間違いないだろう。これを頭の中にいれておけば、着られる柄の幅が広がりそうだ。ちょっと優しい柄ゆきを着るのは照れくさいけれど。

師匠がそのうちのひとつの柄を選んだ。筆で格子を描いたようなタッチのシンプルな柄で、あっさりしているけれどもとてもいい。夏場、浴衣ざらいがあると、一同、この浴衣を着て参加するのだ。反物が出来上がってくるのが楽しみだ。

暑い日で、帰ってみたらきもののちょうど帯枕があたるところまで、汗がしみている。襦

袢はまるで水でしめらせたようだ。
「どうしよう」
とうろたえる。他の襦袢と一緒に、三回くらいしか着なくても生洗いに出すつもりだが、やっぱりこれからの季節はうそつき襦袢のほうがいいかもしれない。身頃部分が晒だったら、袖だけをはずしてその日のうちにすぐに洗える。洋服と違って、襦袢の場合は汗をかいてもすぐに風を通せば、不潔感はほとんどない。心配なのは汗じみである。これまでのことを考えると、幸い、私の汗はしみにはなりにくいようではある。体質によっては、染料がしみ出て色移りしたり、ひどく汗じみができたりする場合もある。うそつきの袖が正絹だと、洗うときには袖をはずして、あとで縫いつける手間はあるが、それはたいした問題ではない。
「そうか、うそつきの季節なんだな」
と納得するも、冬場に準備していたうそつきには、紺色の半襟がついていて、これをつけ替えなくてはならない。しかし締切りが迫っている。忘れないようにうそつきを机の脇において、原稿を書く。

**四月三十日**

いちおううそつきの半襟ははずした。連載分の原稿はみんな渡したけれども、書き下ろしの分ができなかったので、ばんざーいと両手をあげてお針子の日々に戻るわけにはいかなかった。連休中、さらに原稿を書く日々は続くのであった。

# 五月



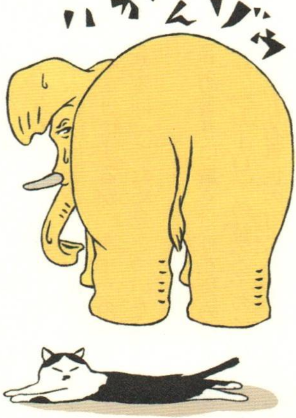
## 五月十六日のコーディネート

きもの　梅とよもぎ染めの大島紬
帯　与那国島の島繭（しままゆ）で織った名古屋帯
帯揚げ　花の地紋のある、ピンクがかったグレーベージュ
帯締め　鮮やかな水色の冠組（ゆるぎぐみ）
半襟　白の塩瀬
襦袢　白地にオレンジやブルーグレーの渦巻き柄
足袋　白足袋
草履　天がアバカで鼻緒がタイシルク
バッグ　インドネシアのアタバッグ



バッグ・コレクション

# 五月




**五月一日**

家にいるときも、きものが着たくなった。でも目の前の書き下ろしを書かなくてはならない。うそつき襦袢の半襟は冬用のままである。

**五月二日**

忸怩たる思いで原稿を書き続ける。これを乗り越えないと、お針子の日々に戻れない。

**五月三日**

半泣きになりながら、やっと書き下ろしの三月、四月分を送る。縫いかけの浴衣を取り出す。和裁の本と照らし合わせてよくよく見ると、縫う腕はともかく、きものってものすごく単純

にできているのだなとわかった。大変そうだと考えていたが、意外とできるかもと考え直す。

**五月四日**

押入から端ぎれを出して、うそつきにできそうなのを物色。木綿の袖も洗いがきいていいかもと、別の書き下ろし原稿を書きながら考える。浴衣の反物もたまっているし。早く何とかしたい。夜、大昔の襦袢をほどいて、うちで手洗いしたものがあったのを思い出し、袷用のうそつきの袖を縫うことにした。袖口側だけを縫っておしまい。

**五月五日**

まあ、このくらい渡しておけばいいかなという枚数の書き下ろしの原稿ができたので、仕事はおしまいにする。これから初夏のきものの支度のはじまりである。といっても新しいものを買うわけではなく、繰りまわしと半襟つけと襦袢の点検だ。袷の時期に着たきものと襦袢も、生洗いに出さなくてはならない。前と違って、きものの着用回数が違うので、どうしても汚れがちになる。着るたびにベンジンで拭く手入れ法は昔からあるが、下手をして取り返しが付かなくなっては怖いので、プロにまかせることにするが、あまりの分量にびっくりして、頭の中で手入れのための金額の数字がぐるぐる回ってため息をついた。

**五月六日**

お稽古日。一歩家の外にでたとたんに、あまりの暑さに驚く。紅花染めの地に藍で細い縞が通っている紬に、白地にお太鼓のところだけに「LIO」の*鏡文字の織柄がある名古屋帯を締める。前帯には全く柄がないので、ピンク色と若草色の市松の平打ちの帯締めにした。

帯揚げはこのところ大活躍の石榴染めのもの。値段がちょっと高めだったので迷ったのだが、きものや帯の色を選ばず、どんなものにもなじんでくれるので、大助かりだ。この帯は試作品で、嘘か本当か知らないが、西武ライオンズのファンの人がデザインしたものの、「こんなもん、売れるか」と上司にいわれてほったらかしになっていたらしい。白地でも風合いからいって袷用で、三月から五月向きといった感じだ。

　師匠に、

「まあ、今日のような日は袷だと暑いわねえ。本当ならば袷だけどねえ。今は陽気がおかしいから」

　といわれる。師匠は半襟なしで藍色地に太さの違う濃淡の縞が入った洒落た単衣に、辛子色の博多織の半幅帯姿で、いかにも涼しげだ。昔の衣更えも守らなくてはと思うけれども、最近はいい頃合いの時期がとても短かく、寒さから急に暑さに移られると、本当に困る。季節ごとの柄を楽しむなんて、地球温暖化と共に、どこかにいってしまいそうだ。

　午後、銀座で打ち合わせがあるのだが、その前に「くのや」に寄ってみる。前に行ったときに、連休明けに店の四階で浴衣が揃うからと店員さんから話を聞いていたので、行ってみた。ところがそういう気配はない。年輩の男性の店員さんに、

「あのう、浴衣は？」

　と聞いたら、

「あれ」

と十点ほどディスプレイされているコーナーを指さした。
「そうではなくて、前にこちらで連休明けに四階で揃うと聞いたのですが」
「十五日から」
もうちょっと何とか、物のいいようがありそうなものだが、つっけんどんだ。別に彼は意地悪そうでも性格が悪そうでもなかったが、そういった口調だった。東京だと三社祭（さんじゃまつり）が終わった後に、浴衣がぱっと出回るから、早すぎたらしい。でも前に行ったとき、女性の店員さんに、
「五月六日からですか」
と聞いたときに、
「そうですね」
といわれたから足を運んだのになあ。
打ち合わせに行くと、
「涼しそうですねえ」
といわれた。
「いーえ、本人は汗だくだくです」
と答える。夏場を想像すると恐ろしい。

**五月七日**

隣町の喫茶店で打ち合わせだが、風が強いのと帰りにお米や野菜などをまとめて買わなく



5月6日
紅花染めの紬に
西武ライオンズ(LIONS)の
鏡文字が入った名古屋帯



袷用の履物各種。
上から3番目の草履は
尊敬する大先輩からの
大事なプレゼント

てはいけないので、洋服で行く。

**五月八日**

風を通してあるきものを、ためつすがめつしながら、汗じみができているのではと心配になる。暑い日はやっぱり木綿の単衣かなあと考える。

**五月九日**

暑さ対策について考えながら、書き下ろしの原稿を書く。

**五月十日**

昨日と同じ。

**五月十一日**

四月五日の舞台の打ち上げを兼ねた懇親会。日本橋の和風レストランで唄三味線なしの、ランチを食べながらの会である。単衣を着ようにも、襦袢も半襟も準備していないので、曇りがちなのをいいことに、袷で出かける。この前、お稽古に着ていった薄茶の無地っぽい紬で、帯と帯揚げまで同じ。帯締めを琥珀(こはく)の丸い玉がついている組み出しにした。青木奈緒さんは涼やかに単衣を着ていらしていた。

ここでも踊りの与志江先生から、きものについてお話をうかがった。私と隣に座っていた青木さんは、

「はあ、そうですか」

とただうなずくだけである。現在のいちばんの問題点である、汗問題について尋ねると、

先生も師匠と同じように、ふだんにはうそつきを着ているという。

「襦袢だと一枚きりだけど、うそつきにすれば袖が何枚か分、取れるということもあるしね」

　踊りの場合は多少、特殊なのかもしれないが、先生は冬場でも裾除け（すそよけ）の上にうそつき襦袢と東（あずま）スカートできものを着るそうだ。

「だからいわゆる襦袢というものは着ません。何時間も踊りを教えるでしょう。重くて疲れちゃうのよね。きものも胴*抜きよ」

　やっぱり時間が経つと、先生のようなプロでも重く感じてくるのだ。東スカートは足を開いてふんばったりするから、踊りの方には必需品なのだろう。

「私は衣紋（えもん）を多めに抜くのでね、袖つけも前後の寸法を変えてるのよ。普通は同じ寸法だけど、そうすると着たときに前身頃の袖つけが短くなっちゃうでしょう。だからきものをたたむと前後の袖つけの長さがずいぶん違うわね。それがきもののいいところよ。自分に合わせて仕立てるんだから、着やすいようにしてもらわなくちゃね。ひも類も腰ひも一本だけだし、帯も普通の帯幅半分だと四寸（約十五・二センチ）だけど、私は帯の下側が腰骨にちょっとひっかかるくらいにして少し落として締めるから、四寸だと幅が狭いのよね。だから幅を広くしてもらってますよ。締めるときは下側をぎゅっと締め気味にして、上のほうはすかすか。そうしないと自分が苦しいでしょう」

　お太鼓ではなく半幅帯のこしらえだが、幅がやや広めになっている。白地の紬に透けた

羽織がとても粋で素敵だった。

私は三味線を習うようになってから、正座をしても乱れにくいように前幅を広めにしてもらうようにはしたけれども、考えてみればきものはオートクチュールみたいなものだから、注文はつけられるわけだ。それもきものを着込まないとそこまではわからない。そんなものかと思って、着てしまうだろう。きものをふだんから着ている方から話をうかがうのは、本当に参考になる。

**五月十二日**

汗じみ対策としてはじめて、極力シルクの風合いに近づけた、袷の合繊襦袢を見つけたので買ってみた。私はきものの場合、出来合いだとSサイズなので（別に痩せているわけではなく、ただ丈と裄が短いだけ）、市販の品物ではなかなかみつからない。うそつきの場合は、Mを買って肩幅を詰めればいいのだが、袷の襦袢の場合は丈が違うと直しが大変だから、市販品は買ったことがなかった。同じ素材の紗の襦袢も買ってみる。洗濯ネットにいれれば洗濯機で洗濯可能だそうだ。さて、どうなることやら。

**五月十三日**

先週と同じきものと帯に帯締めという手抜きの姿でお稽古に行く。ただし襦袢だけは単衣にしたが、それだけで涼しさが違う。午後は伊勢丹に行き、染め直しを頼んでいた羽織の色味を確認しに行く。とってもいい色合いに染め上がっていて、松葉の地紋がきれいに浮き出ている。前の柄のときは色柄に目がいって、地紋までよくわからなかったのだが、無地にし

たら、
「こういう地紋だったのね」
　と改めて気づかされた。ということはまるで新品と出会ったような気分である。裏も前のをそのまま使ってもらうように頼んできた。汗じみの問題を聞いたら、生洗いではなく、「汗取り」*という方法があるそうなのでほっとする。袷の季節が終わったら、襦袢ときものを持っていかなければ。
　三月に頼んだ「ホンジャマカ大島」が仕立て上がってきた。白地でいかにも単衣直前のものといった感じ。久米島紬（くめじまつむぎ）と苧麻（からむし）*の帯を見せてもらって、衝動買いしてしまう。紬のほうは柄がはっきりしたのと、優しい柄ゆきのと二反あったが、優しい柄ゆきのほうが似合った。とうとう私も毒気が抜けてきたか。涼しげに優しく見える小物と、エスニック風になる個性的な小物とをあわせてもらって、決めてきた。また働かなくては……（喜&涙）。

**五月十四日**
　うそつき襦袢の三枚分の肩幅を縫い縮める。

**五月十五日**
　明日はイラストレーターの平野恵理子（ひらのえりこ）さんと対談。きものでいかがでしょうかとお誘いしたものの天気があまりよろしくない。いったい何を着ようかと迷う。枚数はあるのにどれもぴんとこない。あまり濃い色のきものは合わないし、かといって湿気が多くてまるで梅雨のはしりのようなので、着るこちらの気分がちょっと晴れない。季節的には「ホンジャマカ大

島」はぴったりなのだが、仕立て下ろしになるので、天気のはっきりしない日には着たくない。あれこれ悩んだ結果、持っているなかでいちばん色が薄めの、梅とよもぎ染めの大島にする。染帯、薄手の織帯など、どの帯を合わせてもぴんとこないので、途方にくれる。ふと南のほうのきものには、やはり南の帯が似合うと何かに書いてあったのを思い出し、与那国島の島薾で織ったという名古屋帯を合わせてみたら、何とか合ったのでほっとする。

**五月十六日**

平野さんは白大島にブルーの紬の帯。帯揚げ、帯締めも微妙なきれいな色合いで、とても素敵だ。平野さんも昨晩、きものを前にして、あれこれ考え、よーく考えれば枚数はあるのに、

「あらー、着るものがないわ」

と思ったんだそうである。私と同じ言葉をつぶやいていたので、大笑いしてしまう。

「どうしてでしょうかねえ」

と平野さんがいう。

「それは欲望というものが、肩にはりついているんですよ。それできものの蟻地獄にはまってしまうんです」

「それではどんなにばたばたしても、抜け出られませんねえ」

「当人も、抜け出ようとしないところもありますけどね」

といってまた笑う。しかし笑ったとしても、泣き笑いである。

「ささ、どうぞ。おきもの用に資金は潤沢にご用意してありますので」
といわれるような人は別だが、平野さんも私も女一人で仕事をして、きものを買っている。お金はぼこぼことわき出てくるものではないことは十分承知である。そして、きものを買ってしまったら、後はどうなるかもよーくわかっている。それでも買ってしまうのがきものなのである。
「でも着る物に興味が持てるうちは、体が健康らしいですから、喜びましょう」
と安心することにした。きものがどうのこうのといえるのは、とても平和なことなのだ。家でもきものを着ている平野さんによると、やはりきもののベルトは便利で楽ちんなんだそうだ。もう一度、チャレンジしてみるか。

## 五月十七日

これからますます湿気が多く、蒸し暑くなることを考え、また半幅帯に考えが及ぶ。冬場は上に羽織やコートを着るからまだしも、帯付きの時期に、私が半幅帯をして出かけてＯＫか、冷静に判断しようと、薄い色の紬に博多織の半幅帯を締めてみた。鏡に映った前姿を見ると別に問題はなさそうだ。
「いけるんじゃないの」
と思って、後ろ姿を映したとたん、
「どっひゃー、これはいかん、いかんぞー」
とあわてふためいた。そこには巨大尻が……。まるで人を襲いそうな巨大尻だ。私は背が

低く、なで肩で足が短い。これで柳腰だったらよかったのに、そうはいかなかった。もともと尻が小さいとは思っていなかったが、まさかここまでとは思わなかった。

「前よりも少し細くなったといったあげくがこれか？」

しばし打ちひしがれる。三月のはじめ、ネコと一緒に下半身が痩せたと大喜びしたのは幻覚だったのか。お太鼓結びではごまかせていたのが、半幅帯を結んだら尻が世間に露呈されてしまい、我ながらものすごいものを見てしまったと、頭がくらくらした。世の中にお太鼓結びがあってよかった。冬場は濃い色のきものが多かったので、そんなに変だと思わなかったのだろうか。それとも冬場は錯覚で生きていたのか。家できものを着るときはまだしも、一歩、帯付きで外に出る季節には、世間様に多大な迷惑をかけるので、半幅帯では出かけられないと深くうなずかざるをえなかった。

**五月十八日**

ベッドルームの棚に半幅帯がたたんで置いてあるのを、複雑な思いで眺める。

**五月十九日**

二年ほど前に買った、仕立て上がり浴衣の裄を直す。

**五月二十日**

お稽古日。黄色の地に藍色でこまかな格子が入った紅花染めの紬を着ていく。ところどころにピンクやうすい緑で色が入っていて、明るい感じのものだ。帯は丹波布(たんばぬの)の紺色の格子柄で、帯締めは白にする。本来なら単衣でもいいのだろうが、汗取りのことを考えると、今月いっ

ぱいは袷を着て、それで手入れに出そうと決めた。このきものは、以前、色合いも明るく、薄手なので単衣にしてもらったのだが、たった一度着ただけなのに、着ると皺になるのがひどく、アイロンを当ててもとれないので、いったいどうなっているのかと買った店に問い合わせたのである。作家物でもあり、よく聞いてもらったら、この生地で単衣にした人はいない、今までクレームはないというので、そりゃあ、単衣で着た人はいないんだから、クレームも何もないだろうと、とにかく現物を送って見てもらうことにした。先方でも理由がわからず、もう一度、湯のしなどをしてくれたらしい。店のほうは、

「嫌だったらお金を返します」

といったのだが、お金を返してもらって済む問題ではない。私はこのきものを気に入って買ったのだから、はいそうですかというわけにはいかなかった。とにかく着たいので、袷に仕立ててそれでまただめだったら、そうさせてもらうといって、袷にしてもらった。そして心配しながら今日着てみた。袷にしたら大丈夫だった。単衣には向かない生地だったようで、袷でこれからも着られそうなのでほっとする。

**五月二十一日**

この書き下ろしの原稿の三月分、四月分を渡すために、隣町の喫茶店まで歩いていく。汗取りに出す都合上、昨日と同じ紬に、麻のつけ帯を締めていく。つけ帯だから簡単かと思ったら、うまく格好をつけるのに手間取ってしまい、名古屋帯を結ぶよりも時間がかかってしまった。帯枕は手拭いを折ってくるくると丸めたものに、モスリンのひもを縫いつけた手製。

下半身が細ければ、半幅帯で……といきたいのだが。薄紫の鼻緒がついた桐草履を履く。やはり桐草履は履きやすい。いつになったら下駄で歩くことができるのだろうか。どうも駒下駄のように歯があるものは、前につんのめりそうになったり、後ろに引っ張られそうになったりする。特に階段が怖くて外出時には履けない。少しずつ練習したほうがいいかもしれない。

底の白い足袋を履いていたので、下駄の色がついてしまった。急いでアルカリウォッシュを水にとかしてひたす。アルカリウォッシュというのは、石鹸よりもやや強力な汚れ落とし効果があるらしく、粉状で売られている。なんとか汚れが落ちて欲しい。

**五月二十二日**

あまり興味がなくなったとはいえ、いちおう「きものサロン」と「美しいキモノ」を買う。浴衣の季節が目の前なので、浴衣に半幅帯姿がたくさん載っている。それを見ながら、

「このまま引き下がっていいのか」

という思いがむくむくと頭をもたげる。そりゃあ、私は背は低いし尻もでかい。でもきものを着ている人で、そういう体型の人は私だけではないはずだ。昔だってたんといたのではないか。

「足りないところがあれば、頭を使え」

である。

写真を見ながらいろいろと考えた結果、私が結んだ貝の口の大きさが、小さかったような

気がした。帯位置も少し上だった。若い人は位置が高めでも問題ないが、中年の腰回りがどっしりしてくる体型だったら、半幅帯は帯位置が下のほうが、うまくお尻がカバーできるようだ。再びやる気になって、きものをまた着て、十七日と同じ博多の半幅帯を取り出した。前よりも大きめに結んでみたら、同じ貝の口でも、ずいぶん印象が違い、帯位置も下げたら、大きさはかわらないが、人を襲いそうな尻ではなくなった。

「これだったらいけるかも」

博多よりももう少し地厚な木綿や、半幅よりも少し幅が広めの帯だったらどうかと試した。それらで「ヤの字」*を結んでみたら、何とかこれで世の中のみなさまにご迷惑をかけなくてよさそうな具合になってきた。私の場合、地がしっかりしている木綿か、帯幅が半幅の四寸(約十五・二センチ)よりもやや広い、十六・五センチから十七センチくらいの幅のほうが、バランスがとれるようだ。

「へっへっへーっ」

ちょっと気分が明るくなってきた。

**五月二十三日**

一昨日から浸(ひた)しておいた足袋を洗うが、色がついて揉(も)んだくらいではとれないので、洗濯板で底をこすり洗いする。まあ、見事に落ちること。あまりやりすぎて穴を開けないように気をつけよう。塩瀬の半襟も石鹼水につけて洗う。しばらく浸した後、汚れがひどい部分に石鹼を塗りつけて、古歯ブラシでこすってみた。見た感じは汚れが落ちた気がするが、乾い

てみないとわからない。夜、よく見てみたら、やっぱりうっすらと汚れは残っている。手洗いだと完全には落ちないのだろうか。

**五月二十四日**

私の半襟のつけ方が、よく本に載っている方法と違うことに気が付いた。私は襦袢の襟を二つ折りにした襟芯で包むようにして、まず縫いつけ、その上に半襟をかけていた。しかしこの方法だと、うそつき襦袢につけた場合、半襟を取り、襟芯をつけたまま襦袢は洗えないから、洗うたびにはずさなくてはならない。二度手間になるわけだ。半襟を襟芯のほうにつけておけば、さっとはずせる。

「なーるほど」

今ごろ感心してどうするんだと、我ながらいいたくなったが、次からは襟芯に半襟をつける方法でやってみよう。

**五月二十五日**

襦袢の下に着る、シルクの打ち合わせ式のスリップをたたんでいたら、上半身に汗じみが広がって、変色しているのがわかった。下のスカート部分は何でもないので、上半身をカットして、スカート部分だけ裾除けとして活用することにする。切った部分を三つ折りにしてウエストのひも部分に縫いつけるだけなので、至極簡単である。丈は本物の裾除けよりも短いが、別に着用には問題なし。

**五月二十六日**

夜から会食。本日のきものと帯は、平野恵理子さんとの対談のときと同じものだ。会食の前に伊勢丹の呉服売り場に行って、年下の友だちの誕生日プレゼントを探す。白地にかわいいおもちゃ柄の反物があったので、それを襦袢に仕立ててもらうことにする。それと彼女に似合いそうな半襟二枚。私のほうは絽の長襦袢が一枚もないので、白と肌色とオレンジ色がまざったような色のを頼む。あれこれ見ているうちにあっという間に時間が経ち、待ち合わせ場所に移動する。

夕方、地震があったことを帰ってからのニュースで知った。ちょうど待ち合わせ場所から車で移動中だったので、全く気が付かなかったのだ。きものを着ているとき、大地震が来たらどうするかと考えたことはある。家だったら問題はないが、外出先だったらどうなるのだろうか。年輩の方だと「白木屋」の火事が頭に浮かぶのかもしれないが、私は万が一、下着をつけていなかったとしても、命と比べたら、そんなもん、見えたってかまわないと思うタイプなので心配はない。外出するときにいつももんぺを持参していれば安心だけど、どれくらいの確率で遭遇することやら。やはり備えあれば憂いなしか。

## 五月二十七日

担当編集者のHさんが、小唄の会に来てくれて、浅茅与志江先生の踊りを見て、踊りをはじめたいといっていたので、お引き合わせをすることになった。それを聞いた同じ会社の彼女よりも若い編集者のMさんが、急遽（きゅうきょ）、参加を希望してきた。雨が降りそうな気配だったので、先週と同じきものと帯に、携帯に便利なポリエステルのアップルコートを持って出る。

いっそ降ってくれたほうが、荷物が少なくて楽なのだがそうもいかない。浅草についたとたんに雨が降ってきた。次に出る本の打ち合わせをした後、師匠宅へ。まず地下にある与志江先生のお部屋にご挨拶に行く。

「よろしければ、そちらに粗茶と粗まんじゅうが……」

とおっしゃるので、思わず噴き出してしまう。与志江先生は落語協会のほうへ小唄振りを教えにも出向かれているのである。単衣の濃いグレー地の鮫小紋に、薄紫と淡いグレーがまじったような、何ともいえない色の博多織の帯を貝の口に締めておられる。帯幅は四寸よりもやや広い。若いきれいなお弟子さんが見え、鏡も見ないで浴衣に着替えようとする。

「席をはずしましょうか」

というと、

「いいえ、いいの。どんな場所でも着替えられるようにしないとね。最初に浴衣を羽織ってしまえば大丈夫なの。この人も一年前は着られなかったんだけど、今は着られるようになったのよ」

と先生がおっしゃるので、その場に座っていた。以前、落語家さんがお稽古にいらして、そこに着替え中の女性がいるのを知らないで、戸を開けてしまったことがあった。普通だったら、

「あ、ごめん」

とあわてて戸を閉めるのだろうが、彼は、「うっ」とびっくりした後、

てはいけません。

「どうもありがとう」

といって戸を閉めたというのである。人間、どんなアクシデントがあっても、笑いを忘れてはいけません。

あれこれお話しているうちに、きものの話になった。Hさん、Mさんも、私を含めた三人できものを着て、イタリア料理を食べに行ったりしたので、二人ともきものには興味がある。与志江先生が鏡も見ずに、ほどいた帯を手を後ろにまわしたまま、きれいに貝の口に結ぶのを見て、私たちはあっけにとられ、

「まるで手品のようですねえ」

とぼーっとしてしまった。

「全部、自分の手で覚えていればいいのよ。私だとこのくらいかな」

と二つ折りにした帯のてを脇のラインからやや前に持ってきて長さを調節し、それを後ろに持っていって、するするっと結ぶと、本当にきれいな貝の口になるのだ。

「あのう、私は前で結んでも、そんなにきれいにならないんですが……」

そういったら先生は笑っていた。

それからはQ＆Aになってしまい、

「横から見ると、お太鼓のところが、ふくらんでしまうんです」

と訴えた。

「ちょっといらっしゃい」

先生は舞台に呼んで、私の後ろ姿を見た。私はたれを長めにしてしまう癖があるのだが、先生のお話では、
「私は大きなお尻ですっていっているようなものなのよ」
だった。補正もしていないので、どうしてもお太鼓のたれとふくらみの接点の部分に、皺も寄りがちだった。
「こういうの、使ったことある？」
先生が腰当てを持ってきて下さった。
「使ったことはないですけれど。これ、肌襦袢の上につけるんですよね」
といったら、
「ううん、きものの上から使うのよ」
とおっしゃる。これにはびっくりした。ゴムベルトつきの帯板も取り、私は伊達締めをしたきもの姿のまま、鏡の前に立った。先生は腰当てを当てて前でひもを結んだ。
「*おはしょりがぶくぶくしている分を、こうやって、ひもの上に持ってくるの」
先生は腰当てを結んだひもから上に、余っている分を送り込んだ。ひもの上はギャザーがたくさん寄ってふくらんでいるが、ひもから下のおはしょりとして外に出る部分は、皺ひとつなく、ぴったりと体に添っている。私はきものを着るときに、おはしょりが一重になるように、下前のおはしょりを身頃側に三角に折り上げていたけれど、こちらのほうがはるかに腹まわりがすっきり見える。

「帯は結んだほうがいいのよ」
先生はぎゅっと背中で帯を結んだ。
「たれが上になるようにね。手つきはこうよ」
これまで私はてを背中までひきぬいて、仮ひもを使ってたれを折り上げる方法だったのだが、先生に結んでいただいたら、背中がとても軽いので驚いた。たれの長さはやはり人差し指くらいがきれいだということで、締めていただくと、お太鼓の上のほうにふくらみがあり、下がぴったりとしている。
「ひゃあ」
鏡を見てびっくりした。きものも帯も体型も同じで、使ったのは腰当てと、帯の締め方が少し違うだけなのに、五分前に比べると、体重が明らかに三キロ以上違うくらい、すっきり見えるではないか！
「これはすごい……」
驚嘆していると、そばで見ていたHさんもMさんも、
「そういえば……」
と目を丸くしている。自分に合った着方が大切なのだと、こんなに痛切に感じたことはなかった。我流できものを着ていると、自分の着た姿も、
「こんなもんだ」
と目慣れてしまうのだが、先生に教えていただいて、まだ開拓する余地があることがわか

った。
「これだとね、背中がぼこぼこしないので車に乗っても後ろによりかかれるの」
私は車に乗ったときに、前や横の手すりを握って、座席に背中がつかないように、必死にふんばって座っていたのだ。
先生が使っている帯板は、ゴムひもがついていない、帯を胴に巻きながら差し込めるタイプだった。
「母はね、帯留めをしたときのために、帯留めが当たるところだけの、こんな小さい帯板を使ったりしてますよ」
とおっしゃる。どうしても帯板をしないと、帯留めの周囲に皺が寄る。それを防ぐための小さなものを帯に差し入れるというのだ。
「うーむ、その場に応じて、臨機応変にするわけですね」
先生は袋帯もつけ帯になさっているといっていた。私もつけ帯は持っているが、お太鼓がすでに出来上がっている形なので、便利なようだが、前にも書いたけれども、それを背中にはりついたようではなく、きれいに形作るのが難しいのだ。
「自分でお太鼓を作るタイプのほうがきれいですよ。それに締めているうちに、お太鼓の角のほうが擦れるでしょう。自分でお太鼓を作るものだと、擦れた部分を少しずつずらしていくから、結果的には長く締められるの。寸法が知りたかったら、いつでも教えてあげますよ。*
私はだーっとミシンで縫って、自分で作っちゃうの。お太鼓がずれないように、トンボは使

うけれどね」
帯を固定する器具を見せていただいた。
「これがなくちゃだめっていうわけじゃなくて、おしぼりタオルを丸めて、帯枕を載せる台にすればいいのよ」
ただもう、「はー」「ほー」「へー」と驚嘆するばかりである。
「腰当ても自分で作れますけどね」
といいながら、先生が腰当てをくださったので、家に帰ってもう一度試してみることにする。その後、HさんとMさんは私の稽古風景を見学。Mさんは習うのを踊りにするか小唄にするか、真剣に悩んでいた。
師匠宅で用事がすべて済んだ後、師匠ご推薦の店でおいしい夕食を食べ、同じ方向のHさんとタクシーで帰った。試しにシートの後ろに寄っかかってみたが、とても楽だった。
「うーむ、本当に奥が深い」
目からうろこがぼろぼろ落ちる、濃厚な半日だった。

**五月二十八日**

昨日、先生に教えていただいたように、名古屋帯を結ぶ方式をやってみる。お太鼓がぶくぶくしない。締めるので帯がゆるまないからだろうか。仮ひもを使って折り上げる方式も、着付けの本のプロセス写真のように、折り紙を折るみたいにぴたっと合わせ、なるべく平らになるようになれば、背中は重くなくなるのか。両方試してみよう。

**五月二十九日**

そろそろ袷のきものの手入れをしてもらわなければと思いながら、仕事。

**五月三十日**

何とか連載の最後の原稿を送る。

**五月三十一日**

今、帯結びが私のなかでの懸案である。折り上げ方式に慣れてしまっているので、結ぶ方式がうまくいくのだろうか。あらためて感じたのは、どちらにしろいかに粗雑に帯を締めていたかということだ。

「基本的に何もわかってなかったのね」

これから覚えることが山のようにありそうだ。先輩たちにいろいろと教えていただこう。

# 「六月」



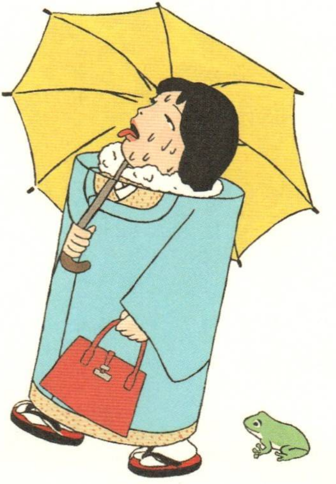
## 六月十九日のコーディネート

きもの　絹と綿が混ざった白地にブルーの柄の、紬の単衣(ひとえ)
帯　アメーバのような柄の麻の名古屋帯
帯揚げ　レモンイエロー
帯締め　生成の丸組
半襟　白の麻絽
襦袢　淡い若草色に白と薄ピンクで
　　朝顔が染められたもの
足袋　白足袋
草履　渋い青磁色の革草履、
　　前壺の赤がポイント



便利な三角袋
（上２点は夏用、下は袷(あわせ)用）

# 六月



## 六月一日

書き下ろしが終わらず、ずっと仕事。たまたま、仕事の合間にインターネットで検索をしていたら、あるきもの関係の掲示板にたどりついた。何気なく見たら私のことが載っていた。『きものが欲しい！』（世界文化社）で書いた文章を歪曲して書き込んである。この本はこれまで、私の周辺に起こったきもの関係の話や、きものに対する気持ちを書いたものだ。デパートの外商のきものの展示会に行って、母親に三十分で五百万円も買われた話。これは事実である。また若い人がまずきものを買いたいのなら、個人商店よりもデパートのほうが入りやすいし、見やすいのでお勧めと書いた。これも事実である。ところがそれが、

「ご推奨がデパートの外商で三十分で五百万円の買い物とは……」
と書いてあって、書いたこととは全く違う流れになっているのだ。
自分の都合のいいように文章をつなげるのは、悪意のある書き込みの常套手段でもある。私もこれまで掲示板には書かれた経験があるので、
「本もろくに読んでおらず、文章も書いたこともなく、読解力もない、若いお兄ちゃん、お姉ちゃんが、わけのわからんことをやっとるわい」
と黙殺してきた部分もあったのだが、今回は許せない。そのハンドルネームの人は、いい歳の大人だからだ。知り合いの結婚式で居合わせたことがあり、大学の講師もして文章も書いている。人に物を教えるような偏差値の高い人が、私のお気楽な文章を誤読するわけもない。式に招待されたときの席次とか、自分が着ていたきものと、私のきものの値段の格差が、何十倍だの何だのと自嘲気味に書いてもあったから、私が書いた文章を歪曲してまでも、私が不利な立場になるように、何も知らない不特定多数の人にいいたかったのだろう。掲示板をたまたま見ちゃったのが、その人の不運といえば不運だけど、大人としてはとても情けない行為である。その人の本性がよくわかった出来事だった。

**六月二日**

一時、痩せたと思われたヒップと太ももが見事に元通りになっていた。しかしその分、ウエストは細くなっている。いったい私の下半身は、どうなっているのだろうか。
単衣の時期になり、ベッドルームの棚に三つ折りにしておいた木綿のきものを取り出して

みて、思わず、
「ひええーっ」
と叫んでしまった。なかでいちばん気に入っていた、ブルーの片貝木綿のきものの片袖と折り目が、色あせしているではないか。直射日光が差し込む位置でもなく、たしかにいちばん上には置いていたが、風呂敷にくるんでいたのに。それでも窓から入る日差しに反応してしまったのだろうか。着るとちょうど膝（ひざ）あたりの位置で、どうしようもない。外に着て出るには無理だ。他の何枚かの木綿の単衣は何でもなかったのに。染料の違いだろうか。よい子のみなさんはこんなことをしてはいけません。

## 六月三日

お稽古日。単衣の時期がはじまった。昔買った夏結城に、時間がなくて帯を締める時間がなかったので、麻のつけ帯にする。*ヘンプを使ったもので、たしか生地代が三千円くらいだった。単衣の襦袢に薄手の塩瀬の白半襟、帯揚げは絽縮緬（ろちりめん）にしたが、組み合わせ方がこれでいいのか、よくわからない。帯揚げが絽縮緬なら、やっぱり半襟も絽縮緬？　それよりも絽塩瀬の半襟につけ替えておいたほうがよかったのかと、あれこれ考えたが、まあいいやと出かける。
　与志江先生に教えていただいたトンボは持っていないので、おしぼりタオルをたたんで胴帯の背中にいれておいたら、お太鼓が安定していた。前につけ帯をしていたら、お太鼓がだんだんずり落ちてきて、あわてて押し上げたりしてあせったことがあったが、こうすればし

っかり固定できるのもわかった。単衣の襦袢に単衣のきものは本当に軽いけれども、それでもやっぱり暑い。
「まあ、ちゃんと着てえらいわねえ」
と師匠が誉めてくださる。
「でも今日は時間がなかったので、つけ帯です」
「ええっ、じゃあ、今まで帯を締めてきてたの。それは大変だ」
と驚かれた。どうも日常的にきものを着る方のほうが、つけ帯率が高いようだ。
「締めないでタンスの中に入ったままのほうが、よっぽどもったいない」
という人も多い。そういう人々は合理的な方法をたくさんご存じなのだろう。みなさん、ここは譲れないというこだわりはお持ちだが、あとは合理的に割り切っているところも興味深い。私はいろいろなことにこだわりすぎたのかもしれない。
自分にとってのこだわりは何かと考えてみた。ポリエステルのきものはどうしても好きになれない。夏場の裾除けやうそつきの袖なら、洗いのきくキュプラのような素材でもいいかなと思うようになったけれども。身につけてみないとわからないから、初夏から夏へと暑さと簡便さを両天秤にかける人体実験が繰り広げられることだろう。
きものを脱ぐ前に、ためしに博多の半幅帯をヤの字に締めてみる。私も懲りない女である。ところがやっぱり、そこには人を襲いそうな巨大な尻が。
「ううむ、やっぱり博多の半幅帯はだめか」

単衣になったぶん、ますますでかく見える。

忘れることにした。

明日は昼食を食べながら新しい連載の打ち合わせがあるので、どのきものを着ていくか考える。会津木綿の縞のきものに、今日締めた麻のつけ帯に決める。このきものを着るのははじめてで、私の寸法にすべて合わせたのではなく、ＳＭＬの出来合いのなかで、Ｓサイズを選んで買った、プレタのきものみたいなものなのだ。多少、前幅が狭いのだが問題はない。夏結城よりもこちらのほうが着るとすっきりみえる。はっきりした縞柄ということもあるのかもしれないが、地の厚さも関係しているような気がする。私は洋服でも、てろんとした風合いの、柔らかい生地は似合わない。ぶ厚すぎるのも合わないし、ほどほどの厚みの生地が体に合う。人それぞれ体に合う生地の厚みがあるのだ。きものも同じで、薄手のものより、多少生地がしっかりしたもののほうが、体型をカバーしてくれる。夢二（ゆめじ）の女性とは正反対ということだ。やっぱりお嬢様より、ねえや系らしい。

うちの会のお揃いの浴衣の反物が出来上がってきた。家に帰ってよく考えてみたら、代金を支払わずに持って帰っていた。

**六月四日**

出かける前、空を見ると何となく雨が降りそうな気がしたのと、食材の買い出しが大量にあるので、予定を変更して洋服で出かける。案の定、昼食を食べつつ打ち合わせをしている間に、結構、強い雨が降りはじめた。食事を済ませて外に出ると、目の前を訪問着に礼装用の

帯を締めた女性が、コートも着ないで傘だけをさして堂々と歩いているので、びっくりする。

(訪問着が濡(ぬ)れてしまう!)

とびっくりしたのだが、よーく見ると洗えるきもののようだった。だからあんなに堂々としていたのかと納得がいったが、度肝を抜かれてしまった。お天気のいい日はともかく、雨模様のときはいくら雨に濡れても大丈夫なきものでも、紬、小紋風ではなく、訪問着クラスの柄付けだったら、合織のコートくらい着たほうが、見た感じはいいなと思った。

打ち合わせをした女性に聞いたら、彼女は訪問着は持っているが、雨コートは合織のものも持っていないという。

「だから訪問着を着ようと思っても、雨が降ってたり、降りそうだったら着るのをやめるんです」

私はそのような場所に着ていける、フォーマルな洋服を持っていないので、何が何でもきもので行かなくてはならない。雨が降ったときのことを考えて、それなりの準備はしてある。が、きものと洋服と両方準備してあったら、よっぽどでない限り、雨が降ったら洋服に手を通してしまうだろう。数少ない礼装のためのきものが、たまたま雨が降ったとしたら袖を通す機会が失われる。礼装のきものが、ずっとタンスの中に入ったままという人が多いのもうなずける。樋口一葉(ひぐちいちよう)の日記を読むと、約束があっても大雨が降ると、出かけるのをやめたりしている。きものと雨は相容(あいい)れない関係なのだ。しかしポリエステルのきものはそうではない。訪問着でも堂々と雨コートなしで歩ける。頭を切り換えなくてはいけないのかもしれな

い。私は着ないけど。

**六月五日**

仕事の合間に積み上げた箱を整理していたら、間からポリエステルの半襟が出てきた。うそつきの襟につけてみるが、どうも白がぴかぴかしているのが気になる。昨日着るはずだった、会津木綿のきものの下に着てみたが、どうも襟まわりがぴしっとしない。もともと合織ものには疑いを持っているので、気分的なものもあったかもしれない。また試しにそのきものに博多の半幅帯を締めてみたが、どういうわけか夏結城のときには人を襲いそうだったのに、博多の半幅帯でも、問題がない。といっても前と比べてという意味だが。

「うーむ。問題はやっぱりきものか……」

同じきものでも素材によって、こんなに体型が違ってみえるとは。若いときは目につくものを買っていたが、これからはきものを買う機会があったら、素材選びがとても大切になるのだろう。肩に当てるより尻に当ててみたほうがいいかも。きものは形が決まっているから、洋服のようにデザインで目をそらすわけにはいかない。となるとあとは柄と素材だ。夏結城はそれほどてろんとした生地ではないし……。柄の問題か？　また勉強しなくてはならないことが増えた。結局、うそつきのポリエステルの半襟ははずしてしまった。

**六月六日**

原稿を書く合間に、絽のうそつき袖を縫う。絽目（ろめ）があるので、反物をカットするのも縫うのも楽だろう。と思ったら、やはりずるずるして縫いにくい。なんとか一組は仕上がった。

もうちょっと欲しいが、七月末までに総枚数で三百枚の原稿を書かなきゃいけないのに、お針子をしている暇はあるのか。

**六月七日**

仲居さんなどきもので仕事をする人のための、業務用のワンピース式の夏用の下着をみつけたので、二枚購入。梅雨時の急な雨降りに備えて、携帯用のポリエステルの紗の雨コートも合わせて購入。ワンピース式の下着の襟には半襟がミシンでつけられていて、袖は筒袖のレースつき。下半身部分はキュプラでできている。ワンピース型肌着に襟がついたようなものだ。浴衣を半襟つきで着るときには、便利そう。ただ半襟はこの上に、絽塩瀬や絽麻をつけて、本体を洗うときにははずすつもり。

**六月八日**

仕事の合間合間に、針を持ってうそつき袖を縫いまくる。単衣の時期は後半になると夏のこしらえになるので、あまり単衣にとらわれるよりも、七月、八月のことを考えたほうがいいような気がする。絽の袖だったら単衣の時期も大丈夫らしいし。いつかは袖だけでなく、襦袢くらい縫えるようになりたい。と思い続けて何年経っていることだろうか。

**六月九日**

明日のお稽古に何を着ていくか考える。金鳥のコマーシャルではないが、

「あいうえ大きなお尻。かきくけ困ったお尻」

である。あの輪をかけて尻でかに見える夏結城はどうしたものかと悩んだが、きものには



6月5日
既製品の
単衣の縞の会津木綿に
博多の半幅帯



6月24日
母が縫い直してくれた
単衣の塩沢紬に
ミンサー風の柄の
半幅帯

罪はない。私の尻がそれなりだったら、問題はないのだ。

## 六月十日

先週と同じ夏結城に、紫色の地に波紋と魚が白い絞りで描かれている名古屋帯にする。

「やっぱり木綿のきものより、尻がでかくみえるなあ」

と思いつつ出かける。浴衣代金を忘れないようにお支払いする。

## 六月十一日

木綿のきものについて考える。色つきの浴衣ではなくて、もう少ししっかりした生地の木綿のきものがあったら、この温暖化の気候のなかでは便利だろう。浴衣も好きだけど、あるランク以上の浴衣は別にして、やはりコーマ*地の浴衣は消耗品だ。きものは下半身部分に圧力がかかるから、織り方が柔だとどうしてもお尻の部分がぼこっと出たりする。縞、格子、更紗柄（さらさがら）があって、家でもざぶざぶ洗えるようなもの。洋服生地やインテリア用の生地のなかから見つけて、縫うしかないのだろうか。

## 六月十二日

書き下ろしの平林（ひらばやし）たい子の評伝資料の写真を受け取るために、隣町の喫茶店で待ち合わせだが、雨が降っていて買い出しもあるので、きものはやめにする。本当にどう洋服を組み合わせていいやらわからなくなった。体型はもちろん、雰囲気も変わっていっているようで、去年のものがどことなく古くみえる。買い換えたほうがいいのかと考えるけれども、すぐに欲しいと思うようなアイテムが、全然、頭に浮かばない。これではいけないと思うのである

が、目先にきものがあるので、ついついそちらに意識がいってしまう。私は洋服に比べてきもののほうが好きだが、洋服も嫌いなわけではない。いくら好きでもきものをずっと着続けるのはしんどい。好きだから365日、毎日着られるとふんでいた私は甘かった。やっぱり着たくないときもある。自分を正当化するわけじゃないけれど、「何が何でも毎日きもので」と必死なところがある人は、ちょっと違うかなという気がする。せっかく洋服もきものも着られる立場にあるのだから、そのつど楽しめばいいんじゃないかと、だんだん気分がゆるくなってきた。もうちょっと、のんびり考えることにしよう。

平林たい子の日常の写真を何枚か受け取る。昭和の二十年代から三十年代の写真で、もちろん彼女はきもの姿である。彼女はとても体格がよく、柳腰とは全く違う体型である。おはしょりもどんと出ているし、裾はスカートみたいに広がっちゃっているけれども、だらしなくみえない。きっと当時の女の人たちは、そういう着方だったのだ。今でも高齢のおばあちゃんには、こういう着方をしている人が多くて、いかにもきものを着続けてきた人といった雰囲気で、私は好きなのだが、毎日、きものを着るのに挫折したので、このような楽ちんスタイルで着る自信は全くない。ゆるゆるに着て、だらしなくみえないようになるには、年季が必要だ。

**六月十三日**

スケジュール表を見ながら、ずるずると仕事ばかりしていたら、お針子仕事ができなくなると気づく。せめて土曜日か日曜日、丸一日休んで、お針子の日を作りたい。

この原稿を読んだ編集部の若い女性が、きものを着たいけれど、こんなに針仕事が必要だとはと、気持ちが萎えつつあるらしい。これは私がただ針を動かすのが好きなだけで、どうしてもこれをしなくてはだめだというわけではない。ファスナーで半襟が取り外しができる襦袢もあるようだし、両面テープや安全ピンで留める人もいるようだ。それも全部、嫌だというのなら、

「我慢して、やれ」

というしかない。

小唄の会の妹弟子のなかにも、ふだんきものを着ない人がほとんどだから、きものを着て会に集合となると、見ていて最初は大変そうだった。なんとか会場にたどりつけば、師匠や姉弟子が直してくださるから問題はないが、家から会場までが問題なのである。美容院で着せてもらうにしても、一仕事といっていい。

「自分できものが着られるのはいいですねえ」

と妹弟子にいわれたことがあった。

「あなたは短時間にあれだけ三味線が弾けるようになったんだから、きものなんて簡単に着られますよ。三味線より何倍もきものを着るほうが簡単なんだから」

と話したことがあった。私も着付け教室できちんと習った経験はない。ただどうしても自分で着たかったので、思い立つと鏡の前できものを着て、帯を結ぶ練習はしていた。

「一週間に一度でもいいから、試しに自分で着てみたら。ずっと着てなくてもいいの。私も

帯がちゃんと結べたらすぐ脱いだりしていたし。それでもずいぶん違うわよ」
　それから何回か会があったが、彼女はちゃんときものを着てくるようになった。慣れたのだろう。どこに出ても恥ずかしくない姿で、とても自然だ。きものを着たいという気持ちがそうさせたのだ。
「きものを着たいけど、着付けが……」
　という人は、ただ漠然と考えているだけで、真剣にきものが着たいとは思っていないのだろう。私があれこれ針仕事の願望が多いのに、全く捗らないのと同じである。人様のことばかりいえません。

**六月十四日**

　新しい半幅帯の結び方を、夜、やってみる。簡単にいうと、体に巻いたら結び、てを横にして、それをくるむように、たれをふんわりと二巻きほど巻きつける。貝の口やヤの字よりももうちょっと女らしい感じにみえる。締めてみたら意外と子供っぽくないので、私のような年齢でも大丈夫だった。帯の柄によって雰囲気がずいぶん変わりそうだ。浴衣向きの単衣の博多の半幅帯だとちょっと頼りない感じがするので、袷用の半幅帯くらいの厚みがあったほうがいい。他にもおばちゃんの尻がカバーできる半幅帯の結び方が知りたい。でもあまりかわいらしい感じのものは似合わないし、私の尻には半幅帯は似合わないのかもしれない。

**六月十五日**

　大昔に買ったものの、締める機会がなかった帯を、つけ帯にするかどうか思案する。お出

かけ用ではなく、洋服でいえばワンマイルウエアみたいなものだが、それで締める回数が増えたらいい。しかし変に手をいれないでそのまま誰かに差し上げたほうがいいかとも考えたが、結論は出ない。

**六月十六日**

六月の天気のいい日は、季節を先取りしたくなるが、どっぷり梅雨の雰囲気だと、どうも気分が盛り上がらない。肌寒いとなおさらだ。あまり涼しげな柄も不似合いなような気がするし、ぼてっとした単衣も合わない。夏場は夏物でわかりやすいけれども、五月下旬から六月末、九月初旬は頭が痛い時期だ。あれこれ考えるのも楽しみのひとつといえばそうだが、できればすっきりとした気分で着たいものだ。

**六月十七日**

お稽古日。この時期はきものを着るのも天気と相談だ。朝から雨が降っていると、そのほうがはっきりしていい。道中、雨コートを着るのをいいことに、でか尻夏結城に博多織の半幅帯を締めていく。襦袢は淡い若草色に白と薄ピンクで朝顔が描いてあるもの。柄からいって九月に着ることはできないので、今着るしかないのだ。

軽くて楽なのはいいが、ポリエステルのコートの蒸し暑さにまいる。サウナスーツを着ているような感覚だが、これで汗をどっさりかいて痩せられるか。それだったら我慢するけれども。きもの365日といいながら、確実に着るのは、週に一度のお稽古の日だけになっているが、雨の日でも、

「やっぱりきものはいいなあ」

と思った。ただし大股で歩けないので、買い出しには不向き。きもので重い物を持って歩くと、負担が大きくなるような気がする。家に帰ったら汗まみれ。すぐに半袖Tシャツとチノパンツに着替えてひと息つく。上にコートを着ていたせいか、きものの表面にまではっきりわかるくらい汗がしみ出していた。尻がでかく見えるといいながら、夏結城を着続けているのは、単純に汗取りに出す都合である。

**六月十八日**

夜、会食があるので、銀座まで出かける。夏大島に紗の名古屋帯にする。どちらも何年か前に作ったものだが、仕立て下ろしである。単衣の襦袢に薄手の塩瀬の洗える絹の半襟がついてたので、それをはずして塩瀬絽の白地にブルーと水色の水玉の刺繡(ししゅう)の半襟につけ替える。いくら洗える絹の半襟といっても、洗っても新品同様になるわけではない。消耗品だから仕方がないけれども、やはり刺繡襟をつけるのは痛し痒(かゆ)しといったところだ。襟元をゆったり合わせる人は、半襟が肌につかないのでそれほど汚れないのだろう。単衣の襦袢なのは毎度おなじみ、汗取りの都合である。雨が降っているので、コートも着る。

家を出て駅まで歩いているときに、四つ角の二軒目の家から自転車で出かけようとしている、六十半ばくらいのおばさんと、目が合った。別に気にもとめず、車も人も通っていない道路の左側を歩いていたら、背後から自転車のベルの音がする。振り返るとさっきのおばさんが、傘をさして自転車に乗っていた。やりすごそうと少し左側に避けても、よろよろしな

がら後ろについたままで、
「何を真ん中歩いてるんだよ、このバカ」
と怒鳴って、そのまま走り去っていった。おばちゃん、こわーい。今の世の中、背後から刺されなかっただけでも、ラッキーと思わなくてはいけないのかもしれない。細い道でもないし、車も全く通っていなかったし、私が歩いていたのは、ちょうど歩行者用の道路の白線あたりだった。別にまん真ん中を歩いていたわけでもない。走れるところなんていくらでもあったのに。たまたま自分が行きたい線上に私がいたのかもしれないが、恐ろしいことだ。人を教える立場の人間が掲示板に妙な書き込みをしたり、必要以上に激昂して怒鳴りつけたり、中高年がこのざまだったら、若い人に何もいえないなあと思いながら、電車に乗る。銀座に着いたら地図を持ってくるのを忘れたことに気付き、かすかな記憶を頼りに、新橋演舞場近くのコンビニエンスストアを目指したら、編集者が店の前に立っていてくれていて、ほっとした。カジュアルなフランス料理をお腹(なか)いっぱいいただいた。

**六月十九日**

今日も夜は打ち合わせを兼ねた会食。雨は降らないようなので、絹と綿が混ざった白地にブルーの柄の単衣に、麻地のアメーバ柄の名古屋帯、朝顔の襦袢を着ていく。風がとても強いので東スカートを下に穿(は)いたら、とても具合がよかった。特にコートや羽織を着ない帯付きの時期は、ばっとまくれあがって脚が見えないと思うだけでも安心だ。

**六月二十日**

二日分の襦袢ときものが、きものハンガーにかかって、ひらひらしている。やはり絹物は汗に濡れると風合いが違ってくる。特に襦袢はきものの下に着るので、それが著しい。もう頭の中は汗取りでいっぱいである。合成繊維もいろいろあるから、ポリエステルではなく素材を選べば通気性もいいのだろうか。昨日穿いた東スカートは店員さんが勧めてくれたベンベルグ製だったが、暑くもなかったし、ぺたぺたもしなかった。またいろいろと試してみよう。

**六月二十一日**

何年か前に買って、本置き場の奥深くに置いてあった、村林益子（むらばやしますこ）著『図説　きものの仕立方』（紫紅社）を引っ張り出す。あらためてぱらぱらとページをめくってみると、参考になることがたくさん書いてある。しかしお針子仕事にのめり込むと仕事に差し障りがあるので、後ろ髪を引かれながらやめておく。

**六月二十二日**

『きものの仕立方』に載っていた、＊湯文字（ゆもじ）ではない、晒（さらし）の裾除けが気になってしょうがないが、我慢する。

**六月二十三日**

以前、色が出てしまった雨コートが、色止めをしなおして戻ってきた。洗える絹の絽の襦袢も仕立て上がってきた。着々と夏の準備が進んでいく。夏場は紗の雨コートが必要だと思っていたが、あまり降りの強いときは、本当にあの透け具合で、役に立つのかと心配になっ

た。ポリエステルのコートは歩くサウナだし。早く梅雨が明けて欲しい。

**六月二十四日**

お稽古日。二十年前に母が縫い直した、塩沢紬を着ていく。

「襟つけのところを、失敗したあ」

といっていたが、着てみたらやっぱり失敗していた。よく見るとぷくぷくっとしていたが、まあ、プロではなく素人が縫ったのだから仕方がない。帯は緑色の地のミンサー*風の柄が織り込まれた、博多の半幅帯である。コートは昨日、復帰した雨コート。行き帰りは雨に降られたが、無事、色も出ず問題がなかった。薄手ではあるが、夏用のコートではないのに、ポリエステルのコートに比べて通気性が、断然違うのが着比べて明らかにわかった。

**六月二十五日**

夜に会食の約束があるので、天気が気になる。日中、ものすごい降りになって、どうしようかと悩んだが、夕方から雨が上がってくれたので安心する。それでも不意打ちに雨が降ると困るので、ポリエステルの雨コートを持って、昨日の塩沢紬に紫地の魚柄の帯を締める。

**六月二十六日**

来月からは夏物なので、襦袢の襟をとり、いつ汗取りに出してもいいように、たたんで準備をしておく。

**六月二十七日**

月末に渡す書き下ろしのめどがついたので、身頃も袖もすべて麻でできているうそつき襦



エレガントな刺繍半襟。
上の2枚は夏物。
その下は2月8日に
使用したもの



6月25日
単衣の塩沢紬に
魚の柄の絞りの
名古屋帯

袢の裄（ゆき）を二枚分直した。

**六月二十八日**

夏場の襦袢が整理できていないことに気が付いてあせる。

**六月二十九日**

書き下ろしの三回目が書き終わったので、録（と）っておいたビデオを見る。BSで「ウィークエンド・ジャパノロジー」という番組があって、日本人もよく知らない日本の事柄が紹介されるので、楽しみに見ている。といっても深夜、早朝に放送なのでビデオで録ってである。その回にゲストとして登場していたのは、テキスタイルデザイナーの女性で、きものも自分でデザインしているという。芸能人の愛用者も多いという。年齢はわからないが、経歴から察すると、私と同じくらいの年齢ではないかと思う。そこでキャスターの女性が、彼女の店に行き、若い人にも簡単に着られるきものを試着してみたのだが、そのとき、

「えっ」

と驚いたことがあった。きものを着て、作り帯を身につけるとき、キャスターの女性が帯の胴に巻く部分を手にして、

「これでいいんですか」

と巻きつけようとしたのだが、それは上下が逆だった。帯は半幅帯などで縫い目が両端にあるのは別にして、たいてい片方は輪の状態になっているので縫い目がない。袋帯の場合は幅を二つ折りにして締めるので、当然片側は輪になる。だから片方が輪の場合、その縫い目

がない輪のほうを下にして締めるのである。キャスターの女性は輪のほうを上にしていた。するとデザイナーの女性は、別にそれを直そうともせず、

「はい」

と返事をして、そのまま着付けてしまった。

「ああっ、逆、逆」

思わずビデオを見ながら声を出してしまったが、その後、帯が直された形跡はなかった。きものをほとんど着ないというキャスターの女性が、帯の扱い方がわからないのは当然である。彼女には罪はない。若い人にきものを着てもらいたいからと、着やすいきものを作ったといいながら、作り手がこれでは、やっぱりまずいんではないだろうか。もしかしたらテレビ出演で上がってしまったのだろうか。それにしても間違ったことを放送してしまうのはまずい。キャスターの女性が逆に持っているなら、

「いえ、そうではなくて帯はこのように締めます」

と教えるのが彼女の役目である。どうしてそんなことがわからなかったのだろう。若い人の目を引く素敵な柄もいい。着やすいこともいい。でも基本的なことはちゃんと押さえないといけない。作り手がこんな調子じゃ、きものの将来は暗いかもと、ちょっとがっかりした。

**六月三十日**

明日からは間違いなく薄物の季節である。近所に出かけるならば浴衣か。でもこの不安定な天候だと、午後から雨とわかっていたらとても着にくい。浴衣には雨コートは着ないもの

らしいし。もしも浴衣で遊びに行って、突然、大雨に降られたら、濡れっぱなしになってしまうわけだろうなあ。木綿だから濡れても大丈夫といえば大丈夫だが、ちょっと着ているほうとしては辛(つら)い。昔の人は雨のときは大変だったんだなあとあらためて思った。

# 「七月」



## 七月二十二日のコーディネート

きもの　芥子色と紺の格子柄の夏米沢紬
帯　紺地に薄いグレーの波柄の、織の名古屋帯
帯揚げ　レモンイエロー
帯締め　生成の丸組
半襟　白の麻絽
襦袢　白の麻
足袋　白足袋
草履　グレーがかった水色の革草履。鼻緒は木綿で
白地に濃紺の横縞入り
バッグ　メッシュのトートバッグ
日傘　縁のみレースの生成



強い味方！盥（たらい）と洗濯板

# 七月



## 七月一日

今月は火曜日が五回あるので、一週目のお稽古はお休み。「困ったお尻」も重要課題なのだが、背中側のウエストからお尻の上のあたりがへこんできて、帯を締めるとどうもたれのところに皺がよって格好悪い。ウエストとヒップの差が大きいグラマー体型なのではなく、どうも歳をとってきてお尻が垂れてきているかららしい。補正するのは好きではなかったけれども、与志江先生に教えていただいたように、腰当ては必要になった。暑いから身につけるものは一枚でも少なくしたいが、夏のきものはそうはいかない。下着をどんどん省略する人もいるようだが、体型によって、向く人、向かない人がいる。私の場合はだらしなく見え

るので、省略しないで着ている。夏用のメッシュの腰当てを見つけたので買ってみた。厚みがないので家にあった晒をたたんで縫いつけてみる。もしもこれが具合がよかったら、軽いし汗をかいてもすぐ洗えるし、使い勝手がよさそうだ。今週、会食があるから、そのときに使ってみよう。

午前中、NHKの「おしゃれ工房」で浴衣の特集の再放送を見た。浴衣というよりも柄が派手な木綿のきものという感じ。海外のデザイナーズブランドのものも、多く出ているらしい。浴衣といえどもきものの洋服化がいいのか悪いのか、私には判断しかねるところである。基本的に私は浴衣は藍と白、それ以外は木綿のきものと思っているのだが、若い人が色鮮やかな物を欲しがるのはしょうがないのだろう。しかしそれによって、正統派の藍、白の浴衣が手に入りにくくなるのは困る。以前、「竺仙(ちくせん)」で藍白のものすごくたくさんの浴衣の生地見本を見せていただき、誂(あつら)えられるというお話をうかがったが、これからは派手なプリントものに押されて、誂えるしかなくなってしまうのだろうか。作り手のほうもあまり世の中の大多数に迎合するのはやめていただきたいなと願うばかりである。

**七月二日**

夜、会食の約束がある。雨は上がって日差しが出てきた。薄物の季節なので、どれにしようか迷った結果、琉球美絣(りゅうきゅうびがすり)にする。美絣といっても見た感じは柔らかい雰囲気の格子柄なのだが。帯は前に締めた紗の名古屋帯。帯締めはガラスの帯留めを通した*三分紐。帯揚げは白地の絽縮緬の*飛び絞りである。本当ならば絽縮緬は単衣の時期のものなのだろうが、絽の

帯揚げは持っている枚数も少ないし、合う色がないのだ。気温はあまり高くないし出かけるのは夜なので、それほど透け感を出す必要もないだろうと、麻の薄茶の襦袢を引っ張りだした。草履はシルクの太めの鼻緒がついている、天*がパナマのものにする。

と、ひととおり決めたところで、午後になって所によってはにわか雨か雷雨だという天気予報を知った。空を見るとちょっとあやしい感じの曇りっぽくなってきた。袷、単衣の時期は、天候があやしいと雨コートをちりよけがわりに着て出られるが、薄物はそうはいかない。コート、傘、草履を持って出ることを考えたら、急に気分が萎(な)えてしまい、洋服で行くことにする。黒の薄手綿レーヨンの七分袖のセーターに、コム デ ギャルソン コルソ コモで買ったスカートを穿いて家を出た。このスカートは素材がシルクで、紺地に小さな水玉模様の上に、手縫いで同じシルクのフリンジがアトランダムに縫いつけてあるものだ。きもの以上の値段で目玉が飛び出てしまったのだが、さすがに着心地はいい。歩くとフリンジがふわふわとなびいてうれしいのだが、このスカートより値段が安くても、きものを着ているほうがやっぱりいいなあと、道中、ちょっと後悔した。

表参道でおいしい和食をお腹(なか)いっぱいいただく。結局、雨は降らず。湿気も少なくほどよく風も吹いて、絶好のきもの向きの夜だった。多少荷物が多くなっても、きものでくればよかったと後悔した。どうせならいっそのこと雨になってくれればあきらめがついたのに。

**七月三日**

夏場に雨が降りそうなときに、何を着たらいいかを真剣に考える。気張りすぎず、カジュ

アルすぎない店で、そこで知り合いと食事となったらどうするか。いちばん便利なのはポリエステルのきものとわかっていても、それが嫌となったら自分の着たいものを着て、コート、傘、草履一式を持って出るか、あとはタクシー移動しかないのだろうか。タクシー移動できるような距離だったらいいが、隣町くらいまで行くのに大雨だったらどうするかと、悩みはじめたら頭がぐるぐるしてきたので、考えるのをやめた。明日は隣町で、この書き下ろしの五月分、六月分の原稿を渡さなくてはいけない。予報によると天気は回復するようだが、昼はまだ雨が少し残るらしい。

「着るもんがないぞ」

というのは錯覚なのか、本当にないのか、自分でもよくわからなくなってきた。

**七月四日**

雨は降る気配はなさそうだが、結局、洋服で出かける。このときとばかりに食材を買い込む。昨日、疑問に思ったことを、またつらつら考えながら帰る。私の記憶だと、ふだんきものを着ている人の夏場のいでたちは、浴衣か洗えるきものがほとんどだった。うちの近所の商店街のおばあちゃんも浴衣を着ているが、お仕事もあるからだろうが、その上に木綿の上っ張りを着ている。おばあちゃんはおかしくない。また若い人がカラフルな浴衣を着て、隣町を歩いているのも見た。それもおかしくなかった。しかし五十歳を目前にしたおばちゃんである私はどうしたらいいのか。背もちっこいし貫禄(かんろく)も不足している。特に夏場はきものを着ている人が少ないし、ワンマイルウエアなのに、名古屋帯を締めて帯揚げ、帯締めという

のもそぐわない気がするし、かといってくだけすぎるのもどうかと気になる。おまけに雨が途中から降ったらどうすんだ？　わからん……。

## 七月五日

どうも雨用の透明の*爪革（つまかわ）がついた草履が好きになれない。かといって定番の下駄に爪革スタイルは、階段があるところを歩くのはとても怖い。ということで、雨に濡れても大丈夫というウレタン底の草履を買う。大丈夫といっても何のカバーもないので、足袋は濡れてしまうわけだが、ワンマイル用だったら問題はない。ひどく泥が足にかぶらない限り、そのうち足袋は乾いてしまうだろうし、替足袋を持って出れば問題はない。降るか降らないか微妙なときに、あの透明ドームがついている草履を履くのは、どうも格好が悪いような気がしてならない。

## 七月六日

昔買って、使わないまま派手になった絞りの半襟を出してみる。接（つ）ぎ合わせたら何か作れるかもしれないが、それはすべて締切りを終えてからだ。

## 七月七日

明日のお稽古に着るきものを出す。梅雨が明けてないし、曇りがちのようなので、透けるものじゃなくてもいいかなと思い、絞りの浴衣にする。試しに買った洗える紗の襦袢の裄を直したので着てみるつもりである。この襦袢は親切に*居敷当（いしきあ）てもついていて、よく考えて作られている。帯は何年か前に買った*紗献上（しゃけんじょう）で、生成地（きなりじ）にブルーと淡いグレーの柄が入って

いる。

## 七月八日

今月はじめてのお稽古日だったが、急用ができてしまったのでお休みする。せっかくなので準備しておいたきものを着て、隣町まで出かけたのはいいが、途中、とても困ってしまった。絞りのきものは滑りが悪いとは聞いていたが、歩いているうちに、裾がずんずんと上がってくる。コーマ地の浴衣ではそんなことはないけれども、絞りは表面がでこぼこしているので、そこにひっかかって、垂れることがないので、丈が思いのほか短くなっていくのだ。下に着ているのは洗える紗の襦袢なので、そちらのほうはすべりがよく、歩くたびに浴衣の下からちらちらと襦袢が顔をのぞかせるし、足袋は丸見えという状態になってしまった。夏場のきものだからと、丈を短めに着てしまったのと、私の所作ががさつで、大股で歩いたことも大きいかもしれない。幸い、住宅地の路地なので歩いている人も少なくて目撃されることはなかったが、めちゃくちゃあせった。おまけに家まであと少しという場所で雨に降られて、がっかり。メッシュの腰当ては、晒で厚みを加えても使い心地は、私には全くよくなかった。通気性がいいといわれても、いまひとつ実感がない。メッシュの帯板だったら、通気性のよさがわかるかもしれないけれど。

家に帰ってあれこれ考えた結果、夏場の私のワンマイルウエアは、コーマ地以外の浴衣、たとえば綿紅梅*(めんこうばい)、絞り。綿麻の小千谷縮(おぢやちぢみ)あたりで決定。綿絽はお稽古、日中のお出かけなど電車に乗る場合にも着用する。これだったら本来の浴衣の着方で半幅帯を締めて素足に下

駄でも、くだけすぎないで許されるのではないか。綿絽の浴衣は下にどんな襦袢を着たら、いいんだろうか。調べておかなくては。以前も夏にきものを着たことはあるが、一、二回しかなく、いわゆる夕方からのお出かけ用なので、あれこれ考える必要はなかった。きもののワンマイルウエアは全く頭になかったので、この企画がなければ、何も試せなかった。今年はこれからのきもの生活の試運転になるだろう。あれこれ試行錯誤、失敗して自分なりの衣生活が出来上がる。そうなったら後は楽ちんだ。自分に何が必要で、何が必要でないかもわかる。好きなものもそうでないものもわかる。恥もかいてはじめてわかるだろう。特に夏用の素材はたくさん種類があるから、とにかく出かける前に、シミュレーションをするのが大切だ。

**七月九日**

たくさんきものの本が出てきているようだ。喜ばしい傾向である。礼装きものにはルールがあって、あれこれうるさくいうおばさんがいたが、最近はふだん着のきものに注目が移るようになり、ふだん着は自由に好きなようにといいながら、あれこれ細かいことをいう人も出てきている。どうもきものというものは、女の人にひとこと言わさずにはいられない何かを持っているようだ。

たとえば浴衣の下に半襟がついた襦袢を着る、「夏のきもの」風の姿だったら足袋を履き、浴衣風だったら足袋は履かないのがいちおう決まりのようだが、踊りなどでは浴衣スタイルで足袋を履く。小唄の浴衣ざらいのときも半襟はなしで、帯はお太鼓で足袋を履く。何が何

でも浴衣のときは素足というのではなく、その人によって好きなように、浴衣のときに足袋を履いたっていいのではないだろうか。

冷房は足元にたまるし、冷え性の人は素足だと辛い。浴衣に半幅帯で足袋を履いても、浴衣をきもの風に着て名古屋帯を締め、足元は素足に下駄でもいいではないか。モデルさんがそういう姿でいると、間が抜けてみえても、意外に一般の人が着るとそうは見えない場合が多い。洋服ではスタイル抜群のモデルさんよりも、きものの場合は、着慣れた一般の人のほうが素敵に見えるのだから、とにかく鏡をよく見ればいいのだ。そして自分の着方と人が違っていても、趣味が違っていてもあれこれいわないことも大切だろう。特定の人の趣味や好みが、正しいという風にならないように、一人一人が自分の気持ちよさや体型と相談して考えていくべきことなのだ。きものの初心者は、だからいろいろな話があってわからないというのだが、基本を知り、情報を得たらあとは自分の目で見て、頭で考えて、自分に似合うかどうか決めればいいのだ。きものを着るのは自分なんだから。

綿絽の浴衣の場合の襦袢は、絽か麻らしい。カジュアルに着るのであれば、筒袖の袖口にレースがついた半襦袢。

## 七月十日

私が持っている麻の襦袢のほとんどには絽の半襟がついていた。絽はオールマイティとはいえ、綿や麻のきものには、麻の半襟のほうが合うのではと、原稿を書く合間にちょこちょことつけ替える。やはり夏場の白襟は清々(すがすが)しくていい。



色・柄ともに涼しげな
夏用の半幅帯



絞りの浴衣に
現代的な感覚の
博多帯を合わせる

## 七月十一日

いつになったら、かーっと暑くなるのだろうか。日中、きものだとどの程度暑いのか予想がつかないので不安だ。来るぞ、来るぞと構えていたので、ちょっと肩すかしをくった感じだが、その分、ものすごーい熱波が来るかもと、戦々恐々としている。でも夏のきものは好きだから、何とか耐えていきたいものだ。

## 七月十二日

綿絽の浴衣をきもの風に着るときのために、麻の襦袢に麻絽の半襟をつける。
鏡で見てみると、どうも私は基本的に浴衣が似合うタイプではないようだ。半襟がないとどことなく間が抜けて見える。タイプの問題か、柄選びが合っていないのか。師匠が、会の浴衣を選んだときに、
「こういうのが似合うわ」
といって下さった柄なら、似合うのかもしれないなあと思う。浴衣だったら気軽に雰囲気の違うものも買えるから、来年はこれまで持っていなかったような柄を探してみようかな。

## 七月十三日

*右近下駄（うこんげた）以外の下駄は、履き慣れずに前につんのめったり、後ろにのけぞったり、バランスをとるのが難しいのだが、足袋を履いていても夏場はやはり下駄がいい。足元も軽くて楽だ。夏用に頼んでいた下駄が届いた。鼻緒は太めの絹にしてもらった。お稽古のときに履いていこうか。本来は下駄には土の道がいちばんふさわしいのだろうが、アスファルトになっ

てしまう。これではいけないのだろうが。

たり階段が多くなったり、私は下駄自体は好きだが、状況を考えるとつい草履のほうを履い

## 七月十四日

このところ根を詰めて仕事をしていたので、夏物の襦袢や肌着を全部だして整理してみる。着る前に一度水に通したはいいが、丈を直さなくてはならない物が、何枚も出てきた。ちんちくりんは苦労するのである。夏は下に着るものが透ける場合があるので、着丈も注意して直す必要がある。とりあえず麻の上下つながったスリップの丈を二枚直す。

## 七月十五日

先週、急に休んでしまったので、薄物になってはじめてのお稽古日。それほど気温が高くなく曇り空なので、以前着た、夏大島と紗の名古屋帯のセットにする。足元が下駄だと軽過ぎる感じがしたので、天がパナマで鼻緒がシルクの草履にする。襦袢は麻の白である。気温が二十四度くらいなので、きものを着ていても暑くないので楽だった。

## 七月十六日

これからやって来るであろう、猛暑のために、夏のきものセットを襦袢から何から考えておいたほうがいいと気付く。素材がいろいろとあるので、当日、焦らないようにいちおうセットにしておけば安心だ。

「これと、これと」

とやっていると、あまりに楽しくてついのめりこんでしまう。ずっとやっていたい。が、

締切りがあるので、そればっかりやっていられず、仕事に戻る。

## 七月十七日

私が持っている浴衣下は、上半身が綿で下の部分は合織でできている。汗を吸うのは綿だが、裾捌き(すそさば)きの問題もあって全身が綿だと足にまとわりついて具合が悪いのだろう。私の頭の中には、冬場の防寒きもののスリップの一件がこびりついて離れない。暖かいのはよかったけれど、すべりが悪くてどんどん上にずり上がってきてしまい、股間に団子状にたまってしまった、あれである。やはりきものを着る上で、滑りはとても大切なように思う。夏用下着の麻やクレープのキュロットというか、ステテコは持っているが、家で浴衣を着たときにしか着ていない。家の中で着ているのと、外に出て歩きまわるのとでは、ずいぶん着た感じが違ってくる。家の中だったら多少裾が乱れても、平気で上前をまくってばんばん直せるけれども、外だとそういうわけにもいかない。やはり汗をかく時期は、裾捌きをいちばんに考えたほうがいいようだ。それだったらなぜ、絞りの浴衣を着たときに、下は合織の襦袢だったのに、ずりずりとずり上がってきたのだろうか。やっぱり私の所作が原因なのだろうか。

## 七月十八日

締切り二本を送る。今月末までに書かなくてはならないのは、あと五十五枚である。だいぶ気が楽になってきた。仕事の間にふと思いたって、腰ひもをきれいにたたんだりする。我ながらどうしてそんなことを急にやりたくなるのかわからない。また、ふだんはこまめに掃除をしない質(たち)なのに、仕事が詰まっているときほど、そういうことをしたくなる。仕事から

逃避しようとしているのだろうか。中年、更年期を迎えて、私はますます退行しているような気がする。

去年、どうしても座敷箒が欲しくなって手作りのものを買った。若い頃から平気で電気掃除機を使ってきたのに、使うのが嫌になってきたのである。理由は音がうるさいこと、出し入れに手間がかかること、使っているときにホースがからまって鬱陶しいこと。隅っこのゴミがよく取れないこと、などなど山のようにあるので、だんだん使わなくなってきた。箒は思いついたときに、ほいほい使えて軽いし、とても具合がいい。きものに割烹着に箒。昭和のおかあさんに近付きつつある。

### 七月十九日

本日は仕事はお休み。大事に手をつけるとやめられなくなるので、きものを着るときに使う小物類をまとめていれてあるバッグの整理をする。伊達締めにアイロンをかけ、ひもをきちんとまとめておく。足袋も一組ずつセットにしておくとか、そんなことだ。足袋も複数いれておくと、取り出してみたら右足ばかり出てきたりして、あわてて探すはめになったりするからだ。次に使うときに便利なようにというのが、整理整頓の基本らしいが、整理下手の私には常日頃できないことでもある。たまに心をいれかえて整理してみるが、毎回できないところが問題である。

### 七月二十日

原稿を書きつつ、夏の帯、浴衣を素材別に整理する。きものや帯は見慣れると、いちおう

すべて揃っているのに、何か足りないような気がしてくるので、
「そんなことないぞ。十分にあるぞ」
と必死に自己暗示をかける。ここで財布のひもをゆるめてしまうと、あとで泣きを見るのは必至である。

**七月二十一日**

明日、何を着ようかなとぼんやりと考えるが、原稿書きが切羽詰まっているので、家を出る前にそのときの気分で、行き当たりばったりで決めることにする。

**七月二十二日**

お稽古日。気温が高くないのできものを着るには助かる。夏前には、夏が大変とみなさんに心配していただいたり、自分も不安だったのだが、ずっと梅雨模様である。かーっと暑くないのでそれはいいのだが、天候が不安定なので出かけるとなると、いつ雨が降ってくるかとどきどきする。雨コートを持ってでるので、荷物も増える。

今日は数年前に作った格子柄の夏米沢に、作家の鷺沢萠（さぎさわめぐむ）さんのお母上からいただいた帯を締めていく。このきものを買ったとき、夏塩沢というのはよく聞くが、夏米沢という織物ははじめてだというと、試作品というわけではないが、新しい物だというので買ったのだ。着てみたら張りがあって皺にもなりにくく、私は好きな風合いだったが、それ以降、夏米沢という名前を聞かないところを見ると、企画倒れでそのまま終わっちゃったんだろうか。襦袢は先週と同じものだが、着ているとどうも襦袢の襟が五ミリほど出てくる。家に帰って見

てみたら、地の襟に芯と麻絽の半襟とがぴったりとついていなくて、五ミリほど幅広くなっていた。

家に帰ると背中のちょうど帯枕が当たるところに汗がにじんでいる。いくら涼しいといっても汗はかくので、きものハンガーにかけて、がんがん風を通した。半襟をつけ直さなくてはと思いながらも、原稿を書き始めたら中断できなくなって、明日、直すことにする。

## 七月二十三日

残りの原稿はあと二十枚足らずまで減った。あともう少しである。根を詰めずに一日のノルマを書いたらあとは休むことにする。麻絽の半襟をつけ直しているうちに、前に洗える絽でうそつき用の袖を縫ったが、がんばって襦袢を縫ってみようかと考える。でも今月中は無理なので、八月になって出版社がお休みで締切りが空いた時期にやってみるつもりだ。手元の襟のつけ直しをした襦袢を、しげしげと眺める。寸法もこの通りに縫ったら、何とかなるだろう。そういえば浴衣はどうなったんだ……。うーむ、考えてみれば問題は山積しているのだった。

## 七月二十四日

数年前に買って、湯上がりによく着ていた、黒地の絞りの浴衣を取り出してみたら、どうもぴんとこない。黒地は顔映りが悪くなってきた。家の中で着るだけだから、何でもよさそうだが、やっぱり顔映りは気になるので、ほどいて筒状に巻いておいた。暇なときに何に作り替えるか考えるとしよう。

## 七月二十五日

きものは繰りまわす楽しみがある反面、放っておくと、どんどん端ぎれやほどいた反物がたまるので困る。母親がどうしてこんなものをと思うものまで全部ため込んでいて、結局何にも再生されず、無駄としか思えなかったが、どんどんその姿に近付いている。この布はバッグにできる、これは前掛けにできる、パッチワークに使えるからと、三センチほどの端ぎれでも捨てられないから、何とか在庫を少なくしなくてはいけない。頭の中で考えるのと手が動くのと一致しないのが、これまた問題である。

## 七月二十六日

書店に行って辞書を買ったついでに、バッグや古裂(こぎれ)を使った小物の本を買って来る。何を作る予定もないまま、手芸店に寄って竹製のバッグの持ち手を二組、買って帰る。これで自分自身を追い込んだつもりであるが、ただ手芸材料の在庫が増えただけかも。本を見ているうちに、使えそうな生地が頭に浮かんできた。久しぶりにミシンも取り出してみよう。すべては来月になってからだ。

## 七月二十七日

夏のきものは買った店によって、居敷当てをつけてくれるところと、そうでないところがある。伊勢丹では夏のきものには、必要と思われたときは黙っていてもつけてくれている。後ろ身頃の内揚げしてあるところから、裾まで、幅は後ろ身幅いっぱいに、絽の白生地が縫いつけてある。去年までに着た夏のきものには、居敷当てはついていなかった。下着さえき

ちんとすれば透ける心配はなかったので、それでよかったのだが、お稽古のときに正座をしたりすると、お尻に負担がかかるので居敷当てがあったほうが、透ける心配も少なくなるので助かる。居敷当てのないきものには、安く買った絽の白生地があるので、それをくっつけようかと思ったり、着るときに一枚、裾除けを増やせばいいかと思ったり、こればっかりは試してみないとわからない。夏のきものは素材もたくさんあって、組み合わせも奥が深いが、表に出ない部分も奥が深いのであった。

**七月二十八日**

手持ちのきものや帯はポラロイド写真に撮(うつ)してあるが、それを見ているうちに、若いころはよかったが、ちょっとこれからは無理だなという夏帯が出てきた。どういうタイプかというと、ざっくりしたとても荒い織の自然素材のもの。若いころは締めても違和感がなかったが、この歳になるとラフすぎるものは、そこいらへんのラグを胴体に巻きつけているように見える。きものは派手な柄は別にして、それなりに寿命が長いけれども、帯はその年齢にふさわしいものがあるようだ。五十路(いそじ)を前にして、整理が必要だと痛感し、バザー供出用によけておく。

**七月二十九日**

朝から曇り。日中は曇りで夜から雨という予報だったが、念のために傘とポリエステルの携帯用雨コートをバッグにいれる。このところ、雨予報のおかげで大荷物で外出である。琉球美絣に紗献上の帯でお稽古に行く。襟をつけ直したおかげで、半襟は飛び出さなくなった。

腰当てもメッシュではないものにしたので、帯が落ち着いておさまりがいい。
浅草駅に到着して出口の階段を上がると、結構、強い降りの雨になっている。あわててその場で雨コートを着て傘をさす。草履がおろしたてなのに、雨に濡らす事態になったのがちょっと悲しいが、パナマの草履よりはましだった。いっそのことウレタン草履を履いてくるんだったと後悔する。アップルコートは私にはSではやや丈が短く、Mではちょっと長い。ちょうどその中間なのだが、携帯用と割り切ってSサイズにしたので、着た丈によってはきもののほうがちょっと出てしまう場合があるのだ。雨コートからちらちらときものが見え隠れしていたが、わからないようにと、知らんぷりして早足で歩く。コートを着ていると、大股で歩けるから具合がいい。こんなことをいっているから、いつまでたっても所作が身に付かないのであるが。
この夏の私の家の中での格好は、Tシャツにもんぺである。お稽古から帰ると、すぐに着替える。夏のきものは着ているときはそれなりにうれしいが、家に帰って脱いだときの開放感もまたうれしい。矛盾しているといえばしているのだが。友だちも、
「夏のきものは脱いだときに、すーっとして気分がいいのよね」
という。
「洋服だと、ずーっと暑いだけだものねえ」
落差があるということは、きものを着ているときには、着ている人に負担がかかっているということなのだが、私は冬場のきものよりも夏のきもののほうが好きだ。気が付かないという

ちに忍び寄ってくる、夏の冷えから体を守れるからである。夏は何を着ても暑いのだから、きものにTシャツと短パンの涼しさを求めても無理な話だ。ある程度の我慢が必要である。

　薄手の久留米絣のもんぺを穿いているが、もんぺってこんなに快適なものかと驚いた。ただ足首を締められるのが鬱陶しくてゴムは取ってしまったので、厳密にいえばポップな絣柄の木綿ズボンといったところだろうか。夏場、浴衣に半幅帯で毎日を過ごすという希望は、見事に玉砕したわけである。

　足袋を脱いでみると、両足の足袋の底のかかと部分が一円玉くらいの大きさで汚れていた。どうやら泥はねを全部ここで受け止めたらしい。草履も少し汚れていたので、乾かしてから泥をとり、革用のクリーナーを塗っておく。とにかく足袋の泥汚れを取らなくてはと、アルカリウォッシュをひとつまみ、石鹸水にいれて、つけおきしておく。

## 七月三十日

　洗濯板で足袋をこすり洗いしてみたら、泥汚れが取れる。偉いぞ、洗濯板！　乾くとほとんど汚れは目立たなくなっている。浴衣などの木綿のきものは家で手洗いしている。そのときに困ったことがある。洗濯機では洗いたくないから、もちろん袖だたみにして手洗いなのだが、洗うときの手頃な容器がないのだ。洗面所の洗面スペースも狭いし、風呂桶や洗面器も小さい。昔はどうだったっけと考えて、昔は盥というものがあったのだと思い出した。大きさはいろいろあるだろうが、サイズとしては袖だたみにした浴衣がちょうど入る大きさではないだろうか。

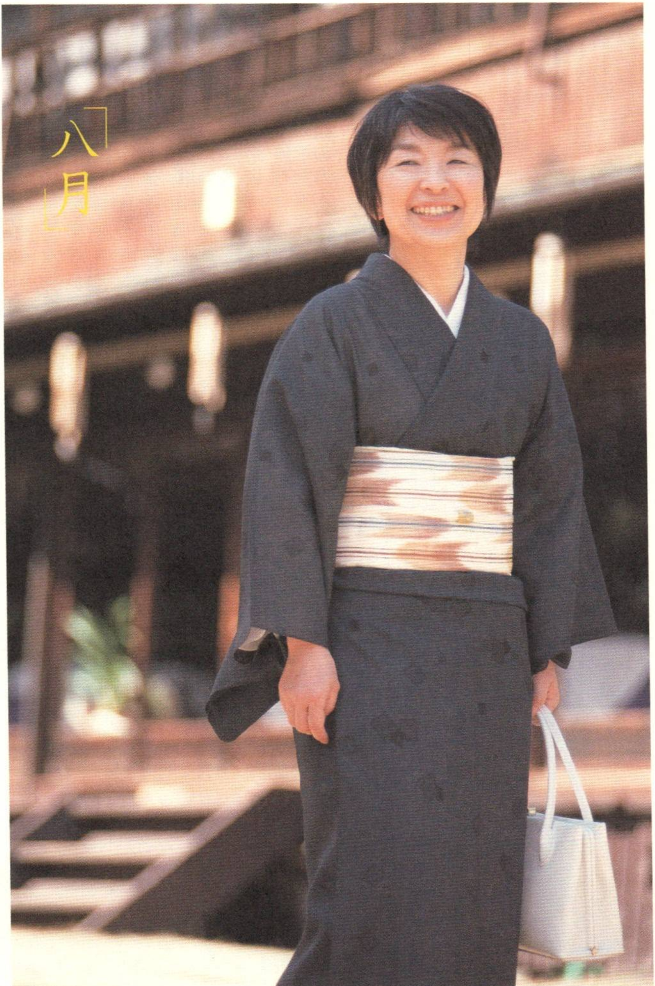
「そうだ、盥だ」

浴衣、単衣の木綿のきものを洗うには、これを使うしかない。思い立って買い物のついでに、幹線道路沿いにある荒物屋に行って聞いてみたら、倉庫にあるはずだから、これから見てくるといってくれたので、お願いする。ついでに大きめの洗濯板も。これでますます昭和に逆戻りである。

**七月三十一日**

すべての原稿が終わったので、ほっとする。これでやっと、明日からきものの整理にとりかかれる。荒物屋から盥と洗濯板を持って帰る。私が子供のころに家にあったのは、ブリキ製ではないかと思うが、これはアルミだ。直径が五十五センチくらいで、袖丈より長さがあれば十分だ。これで木綿のきものの洗濯は万全である。日本のものはそれなりにつながって、使いやすいようになっているのだ。

風呂場で盥に水を張って、袖の大きさにたたんだ浴衣をいれて、何度か押し洗いをする。襟元にほんの少しだけ固形石鹸をつけて洗う。それでまた水を替えて押し洗いをし、バスタオルに包んで、十秒ほど脱水してきものハンガーにかけて陰干しをする。見るからにさっぱりした感じでうれしくなる。藍色もさえざえしたようだ。でもコーマ地の浴衣は水を通すたびに、くたくたっとしてくるのが悲しい。消耗品なのはわかっているが、処分することなどとてもじゃないけどできない。師匠が浴衣がたまってしまうとおっしゃっていたのが、よくわかる。


八月

## 八月二十一日のコーディネート

きもの　四角の飛び柄の、藍染め夏大島紬
帯　壺たれ風の柄の紗の名古屋帯
帯揚げ　生成
帯締め　ベージュの三分紐（さんぶひも）にガラスの小さな帯留めを通したもの
半襟　白の麻絽
襦袢　白の麻
足袋　白足袋
草履　パナマ
バッグ　白のカーフ



愛しのしいちゃん

# 八月



八月一日
先月、絞りの浴衣がずりあがってきた件であるが、どうも私は着たときに下前の褄（つま）を上げすぎたようだ。浴衣の場合は絹物よりもすべりが悪いので、五センチくらいでいいそうだ。ちなみに紬は十センチ、柔らか物は十五センチが標準であるらしい。
　麻の襦袢を洗濯する。
八月二日
　きものと帯はポラロイド写真で管理していたが、半幅帯、草履、下駄などはほったらかしだったので、写真に撮っておいたほうが便利なので片っ端から撮影する。こっちはポラロイ

ドフィルムにすると経費がかかるし、デジカメは持ってないので、35ミリフィルムで撮る。すぐに見られないのが難点だが、急ぐ必要もないし、白地をバックにただひたすら、置いて、撮る、を繰り返した。

**八月三日**

二十数年前に作った袷襦袢で派手になったもの、着ていると何となく生地が重くて肩が凝るもの、どういうわけか寸法が違っていたもの（母親と私の寸法を取り違えていたらしい）、の袖だけを取りはずして、うそつき用の袖にする。袖幅が大きいものは詰めた。身頃のほうは裾除けにするべく、待機中である。

**八月四日**

だんだん夏っぽくなってきた。あまりに梅雨の気配が長いので、夏を忘れていたが、

「そうだ、これ、これ」

と思い出した。この分だと九月に残暑が厳しくなって、夏物と単衣でまた頭を悩ませるかもしれない。小物用にしている押入用桐タンスの一段に、一年中の帯締め、帯揚げをいれていたのだが、他の一段を整理して、袷用と夏物用とで分けた。整理下手には隙間があるとそこに詰め込もうという習性があるらしく、整理上手の人は、この引き出しにはこれだけと決めると、ぎゅうぎゅう詰めにはしないんだそうだ。夏物は数が少ないので、すかすかになっているが、

「整理整頓のためにはこれでいいんだ」

と自分自身を納得させた。確かに物が探しやすくなったのは確かだ。

**八月五日**

八月最初のお稽古日。暑い。よーし、やってやろうという気になる。竺仙の藍染めの綿絽の浴衣に、麻の襦袢と麻絽の襟。帯は博多の半幅帯と先週と同じ紗献上の名古屋帯を出しておいたが、尻のでかさが改善されていないため、紗献上を締める。与志江先生に教えていただいた、腰当てが大活躍である。腰当てひとつで帯がこんなに安定するとは思わなかった。売っている物は、ひもの位置が体に合わなかったのでつけ替えたけれども、腰当てはこれから手放せなくなった。

夏大島も夏米沢も、琉球美絣もいいが、夏場は絹物よりも木綿や麻のほうが気持ちがいい。綿絽は軽くて透けすぎないし、はじめて着たが、とてもいい感じである。襦袢なしでも浴衣として着られるし。これは伊勢丹で買ったけれども、居敷当てはついていない。師匠には、

「んまあ、暑いのに偉いわねえ、本当に偉いわねえ。いくらお仕事とはいえ、感心してるのよ」

といっていただく。

「はい、もう、ほとんど修行のつもりです」

とお答えする。実際、夏のきものがいちばん大変なのは、着るときなのだ。今日も着終わったとたん、どーっと顔面に汗が流れ、タオルでぬぐって出てきた。電車の中は冷房がきいているので、手首、足首まで覆われていると冷え過ぎなくて、私には快適だ。あとは外を歩

いているときだけだが、それも日傘があれば問題はない。歩いたあと立ち止まったところに冷房がないというのは、汗が急に噴き出してきて辛いけど。

歩き方が悪く、下前が飛び出してくる。どうしても大股になって、脚を蹴り出してしまう。

「足が短いくせに、どうして大股なんだ」

と歩きながら自分にちょっと腹が立ってくる。せっかちなので、早く歩きたいという性格にも原因がある。家に帰ってみると、帯揚げと帯に藍が少し色移りしていた。藍は色止めしてもこのようなことがあるので、がっくりはしないけれども、やはり落ちるものなら落とそうと、帯揚げを手洗いしてみる。やはりうっすらと藍は残ったが、それよりも思いのほか、帯揚げの白地がきれいになったのに驚く。そうはみえなくても、結構、汚れていたのだ。そういえば去年、二度ほど使って、今年は単衣の時期から何度か使っていたので、その間にじわじわと汚れていたようだ。洗うと風合いが多少、変わったけれども、使うには支障がない。

帯は締め捨てというけれども、やっぱりせっかく買ったものは長く使いたい。藍がついたのはきものに触れる胴の前帯の部分と、背中の帯枕が接するところだ。前帯は隠れるから問題はないが、帯枕が当たるところは、少しずつずらしてお太鼓のところに出ないようにするか、あとはつけ帯にすればしばらく使えるだろう。

**八月六日**

洗える紗の襦袢を家で着てみたら、肌にちくちくしてきたのでギブアップ。合繊素材を着られる人がうらやましい。ただベンベルグだけは大丈夫だった。



8月5日
「竺仙」の
藍染めの綿絽の浴衣に
紗献上の名古屋帯



8月19日
色鮮やかな琉球美絣に
芭蕉布の名古屋帯

**八月七日**

綿レースが余ったので、うそつき用の筒袖を縫おうと、麻の端ぎれを使って筒袖だけを縫う。袖ばっかり縫って、一向に本体を縫う段階までいかない。

**八月八日**

ずいぶん前に買った、夏久米島に居敷当てがついていないので、やっぱりつけたほうがいいかなと考える。

**八月九日**

颱風(たいふう)で大風、大雨である。外の景色を見ながら、こんな日にコートなしで外に出たら、一気にきものの裾がまくれあがって、すごいことになるなあと、下らないことを考える。東スカートの存在を知ってからは、強風のときはそれを穿いて出かけるので、気が楽になったけれども、それまでは右手で上前を押さえて大変だった。いちおう誰も見る人はいないと思いつつ、裾がまくれあがっているのに平気で歩ける剛胆な神経までは、まだ至っていない。ずいぶん前の話だが、きものだからとがんばって、頭にヘアピースをつけていた人は、強風の中、右手を上前、左手を頭に当てて、ものすごくお間抜けな、イヤミのシェーくずれみたいな格好で歩かなくてはならなかったと聞いたこともある。風にはキュロットタイプの下着か、東スカートが必需品だ。裾がめくれてきれいな脚が見えるのならいいけど、私の脚はダイコンというよりも、長さがないカブ脚なので（中学生のころ、父が命名。おまけに母手作りの緑色のスカートを穿いているのを見て、手を叩(たた)いて大喜びした……）、世の中に迷惑をかけ

ないためにも、なるたけ覆わなくてはいけない。そういえば弟に、
「お姉ちゃんはきものを着て、＊御高祖頭巾をかぶれば、もう完璧！」
といわれたな。つまり何にも出すなということである。ぼーっとしながら下らないことばかり考える。我ながら頭はあんまりよくないなーと思う。
颱風のニュースを見ようとテレビをつけたら、ある女優さんがきものを選んでいる画面が目に入った。紹のきものを選んでいるようで、何点かピックアップしている。たとえば選んでいるのが洋服なら、黙って見ていられるのに、きものだと、ついつい、
「うーん、それよりはさっきのほうがいい。きっと飽きるから。帯も今当てているほうが、ずっとお似合いよ」
と頼まれてもいないのに、ぶつぶつと感想をいってしまう。私もおせっかいおばさんの仲間に入りつつある。

## 八月十日

昨日と一転して真夏日。夏はこれでなくちゃと思いつつ、風があるので救いはあるが、ちょっとだれる。原稿を一本書き上げて送信した後、別の原稿の下書きをして、仕事はひと段落ついたので、きものの整理をはじめるが、いくらやってもすっきり片づかない。何かに作り替えようとしても、その物自体は減らないわけで、どうしてこういうことになってるのか冷静に考える。写真ファイルを見ると、どれも必要な気がするのだが、収納スペースよりも品数が多いからこうなるのか。よーく考えてみよう。リサイクルショップでもどんなサイズ

の人にも対応できる、大きめのサイズのほうが喜ばれるらしい。既製品ではSサイズとなると、幅はともかく今の若い人には丈が足りない。丈を伸ばすのも限界があるしなあと考える。でもあれこれ考えているうちに、また締切りがやってくるので、それっきりになる。この繰り返しは何とか打破しなくてはいけない。

**八月十一日**

たまった端ぎれやきものの整理をきっちりするはずだったのに、ほとんど何もしないまま日が過ぎて、そしてまた締切りが近付いてくる。あー、どうしよう。

**八月十二日**

お稽古日。夏らしく暑い日だが、例年ほどではない感じ。きものも帯も先週と同じ。師匠に、

「暑いんだからそんなにきちんとしないで、綿絽だったら下に半襦袢を着て、細帯でいらっしゃいよ」

といっていただく。帯揚げ、帯締め、帯枕がない分、ずいぶん涼しいだろう。実は半幅帯も出していたのだが、電車に乗って外に出るとなると、どうしても名古屋帯に手が伸びる。浅草だと芸者さんがお稽古に通っているのか、白地の浴衣に半幅帯で、歩いている姿をよく見かける。なかには日本髪に浴衣、半幅帯で、下駄履きで自転車に乗っている人もいる。きもの姿が当たり前に見られるので、とてもいいのだが、普通の住宅地では正直いって浮いている。自宅近くの商店街にはいつもきもののおばあちゃんが一人いらっしゃるが、うちの近

所で浴衣姿で歩いている人を、いまだ一人たりとも見ていない。
「やはり半襟をするとなると名古屋帯。半襟なしだと半幅帯ですねえ。袷はそうじゃないけれど、夏物の場合は半襟姿に半幅帯というのは、ほとんどしなかったような……」
そう師匠がお話して下さったが、袷の組み合わせとは少し違うようだ。

**八月十三日**

何と二ヶ月半ぶりにヘアカット。ヘアメイクの人に家に来てもらってカットしているのだが、ショートなのに二ヶ月半もほったらかしにしていたというこのひどさ。仕事が詰まっているときはたとえヘアカットでも途中で用事が入ると、気持ちが萎えてしまうので、なるべく集中したいのである。で、ずるずるしているうちに、今日になってしまったのだ。
「でもそれなりに、形になってますから、おかしくないですよ」
とヘアメイクの女性にいわれたが、まるでお釜をかぶったような重い感じだった。カットしてもらって軽くなった。

**八月十四日**

雨が降り肌寒い。とても八月とは思えない。かーっと暑いと、透けが強いきものが素敵かもしれないが、今年のような天気だと、あまり透けが強くなくてもいいので、私のような夏のきもの初心者には助かっている。

**八月十五日**

本日も朝から大雨で寒い。原稿を書くのに飽きると、もう着ないであろう道中着をほどき

にかかった。これはずいぶん前に個人商店で誂えたものだが、ほどいてみたら目に見えないところが、ミシンで縫われていたのがわかって、びっくりする。そんなことはひとこともいわれていなかったからだ。いわれていたら当然、全部手縫いにしてもらっている。どうして勝手にそんなことをするのかわからない。合織や木綿で、家で手洗いする場合にそなえて丈夫にするためにというわけではなく、正絹の反物を客に黙ってミシン縫いにしてしまう神経はちょっと理解できない。その店とは他にもトラブルがあったので、すでにおつき合いはないが、ちょっといやな感じがした。

## 八月十六日

二、三ヶ月ほど前、老舗旅館の女将(おかみ)が毎日、きものを着るときの姿をテレビで見たとき、袋帯を前で結んでくるりと後ろに回しているのを思い出して、試しにやってみた。すべりがいいように、まず胴回りに刺繡半襟が入っていた厚手のビニール袋を巻き、その上に名古屋帯を締めてみる。たれが上になるように体の中央で結び、背中で結ぶのと同じ手順でお太鼓を形作るが、自分の目で確認できるのでとても楽だ。帯枕と帯揚げはゆるめに背中で結び、帯締めもゆるめに結んでから、帯を右方向に背中に回す。そこで帯枕と帯揚げをととのえて締め直し、帯締めもしっかり締めたら、問題なくちゃんとできた。ビニール袋を抜いて帯板を差し込めば出来上がり。これだったら袋帯も楽に締められるかもしれない。背中で結ぶのとは、ての出方が反対になるのだが、てにも柄があった場合は、前結びと後ろ結びとで、両面が楽しめることになる。ただ後ろ結びは結んでいる格好自体が、運動になっていて、腕や

背中の筋が伸びて体にはいいようだが。

**八月十七日**

　まるで梅雨である。雨の中近所に買い物に出たら、裏の路地で浴衣姿の女性を見かけた。今年初めて、商店街のおばあちゃんではなく、近所で目撃したのだ。こうなるとまるで、
「ツチノコを見た！」
のと同じ感覚だ。年齢は三十代後半くらいで、黒地の*片身替(かたみが)わりの大胆なデザインで、日に焼けた顔にとてもよく似合っていた。雨なので傘をさしていたが、濡れてもやっぱりコートなしなのだなと、とにかく雨が気になる私は、雨に濡れた後のことばかり考えた。

**八月十八日**

　ずっと雨。師匠、姉弟子の、
「夏が大変ねえ」
　と心配して下さった言葉を思い出す。ありがたいといえばありがたい気候だが、かーっとした暑さを覚悟していたので、拍子抜けだ。今年はとにかくきものに関しては何でも修行の身なので、かーっとした中を歩くのも、体験として必要だったのに。でもこの分だったら、九月に入って残暑で修行させられるかもしれない。

**八月十九日**

　朝から飽きずに小雨が降っていて寒い。琉球美絣に芭蕉布(ばしょうふ)の帯を締めていく。携帯用のポリエステルのコートは本当に重宝なのだが、むっちゃくちゃ暑い。コートなしで歩きたい

くらいだが、そうもいかず、サウナスーツを着たような気分でお稽古に行く。とにかく汗が噴き出しているのがわかる。きっとコートなしで歩いていたら、風が通ってこんなことはないはずだ。締めているのは名古屋帯だが、それですら背中が重く感じる。家に帰ってコートを脱いだら、すーっと体にまとわりついた熱が引いていく感じ。帯をほどいてためしに浴衣用の木綿の兵児帯(へこおび)を巻きつけてみたら、軽いの何の。次に半幅帯を結んでみたら、木綿で幅は十七センチと広めながら、ものすごく楽だった。帯枕や帯揚げ、帯締めなど、若い頃は平気だったけど、歳をとるとだんだんひとつひとつの重さや締めつけが、負担になってくる。だから軽いつけ帯を愛用する人が多くなるのだろう。礼装の場合は別だが、なるべく自分が快適にきものが着られるように考えよう。

　きものを脱いだら、襦袢、下着もろとももものすごい汗になっていた。ちょっと痩せたかと期待してヘルスメーターに乗ってみたら、〇・五キロ減っていた。夏場のポリエステルきもの＋(プラス)雨コートダイエットっていうのもできるかもしれない。伊達締めに空アイロンをかけて汗をとばし、足袋も前と同じようにかかとの底のところに泥がついていたので、石鹸水につけおきしておく。

**八月二十日**

　買い出しに行った隣町で、きもの姿の二十代半ばくらいの女性を見る。あまり失礼のないようににじり寄ると、きものではなくて細かい柄ゆきの浴衣だった。彼女にしては地味だし、近ごろ見ない柄なので、お母さんから譲られたものかもしれない、くすんだピンク色の半幅

帯を*文庫に結んで、足袋に草履。浴衣に足袋を履いているので、お稽古のようだった。

師匠をモデルにした『小美代姐さん花乱万丈』が、鴨下信一(かもしたしんいち)氏演出、重森孝子(しげもりたかこ)さん脚本、名取裕子さん主演で舞台になり、明日が初日である。舞台化されることも全く予想していなかったし、師匠がフィナーレで出演することも予想していなかったので、ここ何ヶ月かは、驚きの連続だった。

どのきものを着ていこうかと、夏のきものを出してみる。黒地の紗の小紋に、白地の絽綴(ろつづれ)の帯を第一候補にして、試しに着てみたら、黒地の紗小紋が妙に私からみて色っぽい感じだ。柄自体はシンプルなかすったような柄なのに、透け具合がなまめかしい。後ろ身頃の裏には透け防止の白い居敷当てがつけられているので、黒地に白が透けてみえる。しかし前は左右の身頃が重ね合わさっているので、ほとんど透けない。前からみると黒地のきもの、後ろからみると、黒地に白が透けてみえる。しかし横から見ると、体の厚み半分で、くっきりと黒いのと白いのが分かれていて、どうも私の雰囲気には合わない。

「やっぱり女らしく透け感がきついものは合わないか」

と思いつつ、夏大島と紗名古屋の組み合わせにする。麻のきものもあるが、ずっと椅子に座ることを考えると、皺になりにくい素材にしたいので、そうなると夏大島しか持ってない。本来ならば単衣との端境期(はざかいき)に着るものなのだろうが、

「早めの秋単衣(あきひとえ)の端境期ともいえる」

と考えて、この組み合わせにする。草履はパナマ、帯締めはベージュの三分紐にガラスの

小さな帯留めを通した。

八月二十一日

昨日決めた組み合わせで出かける。ここ一週間ではいちばん夏らしい日だが、さすがにクーラーを使わない我が家で、きものを着ていると汗だくになる。おやじのように、着終わったとたん、タオルで顔や首筋を拭く始末である。お芝居はほぼ満席で、きもの姿の方も見かけられた。上布、絽、薄手の単衣、なかにはしっかりした紬の秋単衣の組み合わせの方もいらしたが、別に変だとは思わなかった。プライベートで着るときは、みなそれぞれの着方でいいとあらためて思う。きものを着てお芝居を観に行きたいという気持ちのほうが大切だ。ふだん着にまであれこれうるさくいう、おせっかいおばさんもいるけれど、ああいう人たちは別の星の人だと思うことにしよう。その前にいちおうのきものの常識の範囲のことは知っておく必要はあるが。お芝居のほうは舞台美術がポップでキッチュで楽しく、本とは多少作りは違っているけれども、基本的に私がいいたいことを伝えてくださっていたので、うれしかった。

八月二十二日

襦袢を二枚洗濯。麻絽の半襟、襟芯をはずして押し洗い。洗える襟だったら、つけたまま洗えるのになあと思いつつ、きものハンガーにかけて乾かす。半襟も洗ったが片方が切りっぱなしになっているので、ぼろぼろとほつれてくる。くけなくてはいけない。七月分のこの書き下ろしの原稿を渡すために、隣町の喫茶店で待ち合わせ。襦袢を洗濯してしまったので、

以前に買った業務用の半襦袢と裾除けがくっついたワンピース式のものを、下に着ればいいやと思っていたら、どうも体に合わない。裾除け部分の寸法は問題ないのに、身頃部分がどうもきゅうくつでならない。打ち合わせ分がゆったりとられていないので、動くと襟がぱかっと開いてしまうのである。襟の乱れ防止用に、後からつけられるようにマジックテープが付属品としてついていた。どうしてこんなものがと首をかしげていたのだが、こうなる状態を見越してのことだったのだろうか。マジックテープをつける気にならず、きもの、といっても綿絽の浴衣だが、着ていくのはあきらめる。それほど暑くなければ隣町までは歩いていくから、浴衣姿でいいのだが、真夏は歩くと途中で倒れそうなので電車に乗る。他の人がそうしていても気にならないが、自分が襟をつけない浴衣姿で電車に乗るのには、抵抗があるのだ。

家に帰って、洗った麻絽の半襟のほつれをくけて襦袢に縫いつける。業務用のワンピース式は、筒袖はうそつき用に使うために肩から切り落として端をまつり、下の部分は裾除けに縫い直すので、縫い目からカット。あとの部分は掃除のときに使う布にする。

## 八月二十三日

連載の原稿は渡し終わったが、月末までに百枚の一挙掲載分の校正と、書き下ろし小説四十枚分を書かなくてはならない。送られてきた雑誌を見ていたら、街で見かけたきもの姿の人という小さなスナップ写真で、洒落た格子柄の雨コートを着た女性が載っていた。コートとドーム形のカバーがついた雨用草履の鼻緒とがお揃いなのだ。もちろんオリジナルなのだ

ろうが、こうすると私が好きじゃない雨用草履も、かわいくなるなあと感心する。どことなく野暮ったい雨用草履が、自分の好きな鼻緒にするだけで、こんなに素敵になると勉強になった。立派なきもの雑誌にはこういう情報は載ってない。以前はきものの雑誌にお世話になったし、なめるように何度も読み返したりしたけれど、最近は興味がなくなって買わなくなった。毎日着るのは挫折したけれども、格段に着る回数が多くなった身としては、目の保養にはなるけれども、特別、欲しいものもないし、見る必要がなくなってしまった。

**八月二十四日**

おとといカットした筒袖の始末をする。ふと雨の日に履いた足袋の汚れが頭に浮かび、ひとつの疑問が頭に浮かんだ。

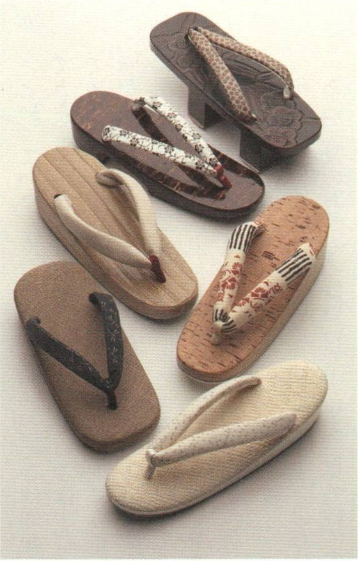
「私はなぜ足袋カバーを持ってんだ？」

雨が降りそうなときは、足袋カバーを履いていけばよかったんである。持っているくせになんでそういうことを思いつかないのか。我ながら馬鹿ではないかとあきれ果てる。もしかして呆けがはじまってるのだろうか。そうしたら、洗濯板で必死にごしごしとこすり洗いしなくても済んだはずなのだ。これも整理整頓がきちんとなってないのが原因だ。

**八月二十五日**

隣町でお昼を食べながら仕事の打ち合わせ。お稽古に着ていっている綿絽の浴衣をきもの風に着ていく。

「涼しそうですねえ」



いろいろな素材、
雰囲気の夏用の履物。
上のふたつは下駄



薄物、単衣用の
帯揚げと帯締め。
優雅さと涼しさを
演出する

といっていただく。実は着終わったときは顔からどっと汗が流れて、タオルでぬぐって出てきた。きっと化粧もほとんどとれているはずだ。帯は毎度おなじみの紗献上。風があるので着ていても風が通って気持ちがいい。前にも書いたが、やっぱり夏場は絹物よりも木綿や麻が気持ちいい。琉球美絣と綿絽浴衣の価格差は二十四倍だが、私にとってははるかに、綿絽浴衣のほうが着やすくて活用できる。もちろんＴＰＯがあるから、どこでも可というわけにはいかないが。上布も何枚か持っているが、皺になるのを考えると着るのに臆(おく)してしまい、着て出かけたことはない。どれだけ皺になるのか、家でシミュレーションしたほうが、心の準備ができるかもしれない。

帰りに買い物に寄った店で、私より年上と思われるお店の女性に、

「ああ、夏のおきものはいいですねえ。見ていて本当に涼しそう。まあ、本当にいいですねえ」

と過分に誉めていただいてどぎまぎしてしまう。着ている本人はそれなりに暑いけれど、見た方が涼しげと感じてくださったのなら、汗だくになって着ても、着てよかったなと思ったが、いつものお気楽なＴシャツとパンツ姿では、これからその店に行き難くなってしまった。

**八月二十六日**

お稽古日。琉球美絣に紗献上。汗取りの都合ゆえのコーディネートである。夕方からにわか雨という予報だったが、早まると困るのでまた雨降り用具一式を持って出る。結局、雨は降らず。思えばいちおう鬼門だった夏のきものの件は、本日でクリアということになる。暑

さ対策よりも雨対策に悩んだ夏だった。お稽古なのか、浴衣に半幅帯、足袋姿の女性を二人見る。私の姿よりも軽やかで涼しそうだった。電車に乗るのに「浴衣に半幅帯」でいくか。袷に半幅帯だったら平気なんだけど。これは来年の夏までに決定しよう。ここのところ、履物専門店で買ったのではない草履を履いていたが、これで歩くととても疲れる。台のクッションがよくないのだろうか。いつも車で移動する人は関係ないかもしれないが、私みたいに基本的に歩くタイプは草履や下駄によって、疲労度が全く違ってくるのだ。麻地の鼻緒はとても気に入っているのに、鼻緒だけはずしてとっておけないのだろうか。

昨日履いていたパナマの草履は、長時間履いても全然疲れない。頭のてっぺんからつま先まで身につけていたもののなかで、いちばん草履の値段が高かったのだから、履き心地がよくないと困るのだけど。いい草履は、履いて歩いた記憶がないくらい、足が疲れない。やっぱり履物は大切だ。靴も同じだろうけれども、若いころはデザイン優先で、多少どこかが当たったり、指が窮屈でも我慢して履けるけれども、歳を重ねるとそうはいかなくなる。体の安楽さが第一なのだ。それとデザイン性が一致しないから靴は難しいけれど、草履や下駄はそうではない。足元が辛いと頭まで痛くなってくるので、慎重に選ぶことにしよう。

**八月二十七日**

テレビをつけたらＮＨＫの朝のテレビ小説「こころ」が映った。主人公のこころが着ているきものが、私が持っているのと全く同じ物だったので驚く。四、五年ほど前に作った綿麻のきもので、ふだん着にはぴったりの、家で洗えてお値段も手頃なものだった。今は実家に

置いてある。同じきものを着ている人を見たのははじめてだったので、まじまじとテレビを見てしまった。

## 八月二十八日

一挙掲載、百枚分のゲラを全部チェックして返送する。昼間は仕事をして、夜は本を読んだり縫い物をしたりしているが、ゲラのチェックのときは夜にかかってしまうので、きもの関係のことは何もできない。月末までに書き下ろし分、四十枚を書かなくてはいけないのだが、ここのところこのゲラにかかりっきりだったので、明日は仕事はしないことにする。

## 八月二十九日

嘘か本当か知らないが、友だちが、

「噂だけど、来月は気温が四十度になるらしいよ」

という。フランスの熱波がめぐりめぐって日本に来るらしい。いったい何を着ればいいんだということが頭に浮かぶ。四十度は勘弁してもらいたい。お稽古があるので、週に一度は、必ず外出ということになるのだが、浅草駅から師匠のお宅までが、実は大変なのである。こういうことをいったらばちがあたるかもしれないが、浅草寺境内を通り抜けるときが、暑い！　日差しを遮るものが何もないので、日傘をさしていても脳天がやけるような感じがしてくる。もしも四十度の日がやってきたら、日傘をさしたまま、境内で倒れてしまうかもしれない。

## 八月三十日

世界陸上の男子マラソンを見ながら、紗献上の帯など夏物の整理。この帯は一昨年買ったものだが、ひと夏越すたびに年季が入ってきた。夏物の帯は袷の帯と違って、着用回数は少なくても、老朽化が激しい。やはり日差しと汗の具合だろうか。来年はこれを締めての外出は無理かもと思いつつ、箱に入れる。

**八月三十一日**

午前中に雨が降ったが、午後からは日差しが強くなる。明日からは単衣だが天気がどうなることやら。実家に置いてあるので電話をしてみたら、こころが着ていたきものを思い出し、以前に買った夏物のふだん着の一部は、直して、思いっきり着ていたことが判明。目の前が真っ暗になる。母親は、

「こころと同じ！」

と無邪気にはしゃいでいた……。

夜、洗った麻の襦袢を、室内できものハンガーにかけておいたら、大きなゴキブリが飛んできて、襦袢にとまりそうになったので、逆上して手近にあった雑誌をぶんぶん振り回して追い払った。世界陸上の女子マラソンを見ながら、いい加減にうそつき袖だけじゃなくて、ちゃんとした形のものを縫わなければと、再び思う。

浴衣を着た女の子は見たけれども、ひと頃流行(はや)った、女の子の甚平(じんべえ)姿は見事に見られなくなった。さすがに甚平では、乙女心を満足させられなくなったのだろうか。今年も三分の二が終わってしまった。

# 「九月」



## 九月二日のコーディネート

きもの　萩と流水の柄の綿縮(めんちぢみ)
帯　動物たちがお月見の句会をしている柄の麻の名古屋帯（前帯の柄は月に薄(すすき)）
帯揚げ　生成
帯締め　生成の丸組
半襟　白の麻絽
襦袢　洗える麻混
足袋　白足袋
草履　パナマ



袷(あわせ)用のつけ帯いろいろ

# 九月





## 九月一日

きもののしきたりでは、本日から秋単衣（あきひとえ）の時期になる。今日も比較的涼しいが、秋晴れにはほど遠い天気だ。きものの整理をしなくてはとそればかり気になっているが、これから生きていくうえで、整理に頭を悩ますほどきものが必要なのかと考える。洋服と違って、季節のしきたりがあるから、礼装用、袷（あわせ）、単衣、薄物（うすもの）とバリエーションが必要ではある。が、半分コレクターのような人は別にして、ただ着るだけだったら、そんなに数はいらないわけである。うちの母親のように、人のものでも手元にあるだけでうれしいというタイプもいるかもしれないが、物を持ちすぎているのはしんどい。所有しているだけで管理にエネルギーを

使うのである。

だいたいどこに何があるのか把握できていない。少しずつきもの関係のものを整理しているのだが、風呂敷をたたんで積んである間から、あしべ織の汗取り（夏用の肌襦袢）が出てきて、しばし首をかしげたあげく、昔、買ったことを思い出した。だいたい本棚を整理していて、本の間からビニールパックされた、「ハンロ」のパンツが出てくるくらいだから、私の場合、当たり前といっちゃ当たり前、といったことなのであるが。足の踏み場もないほど散らかしてはいないが、一見、整理されているようで、実は細かくは分類されていないというのが、私の問題点なのである。

何の本だったか忘れたが、自分が所有しているものは、

「あなたが死ねば、全部ゴミ」

と書いてあって、大笑いしてしまったのだが、まさにその通りである。私などは子供もいないので、それ以外の人が整理してくれるわけだが、残した品物が多ければ多いほど、時間もかかるし迷惑千万だろう。

これもずいぶん前に読んだ話だが、お母さんが亡くなった後、ものすごい量の物品が残されていた。子供、お嫁さんがひとつひとつ整理したあげく、どう考えてもどうしようもない物が、二トントラック三台分も出たそうだ。後始末をした人は、本当にぐったりと疲れたという。この話を読んだときはまだ私は若かったから、

「なるほどね、大変なもんだ」

とうなずいていたが、二〇〇四年には五十歳になる私としては、これからのことを真剣に考えておくべきなのである。生き方とかそういうことではなく、自分の持っている物品をである。三十代はまだ実家のローンがなかったから、その分をきものの購入にまわせたけれども、実家を建ててからは年にン百万もローンを払わなくてはならないので、そうそう買うわけにはいかない。丁度いいといえば丁度いいのだが、それにしても私の整理能力からいって、多すぎるような気がしている。処分することなく有効活用するには、毎日、着るしかないのか、と挫折したくせに懲りずに考えている。

秋になったら〝毎日きもの〟にもう一度挑戦したいのだが、これはうちのネコと相談である。今でも私がきものを着始めると、悲しそうな顔をして部屋の隅からじっと見ている。きものイコールお出かけがインプットされて、まだ抜けてないのだ。今年のはじめ、何度も説得を試みたが、じーっと疑り深い目でこちらを見る。毎日いやというほど見せつけて、きものを着ていても、出かけないときもあるということを教えたいのだが、その間、ネコに緊張を強いるのもかわいそうだし。ネコはきものとは比べものにならないほど大事だし。いったいどうしたらいいのだろうか。

## 九月二日

お稽古日で昼は打ち合わせを兼ねて、浅草で食事。萩の柄の綿縮の下に洗える麻混の襦袢を着て行く。帯は、きっと藍染めの藍の色がついてしまうだろうから、白地の博多献上はやめにして、麻地に、薄の野で月を見ながら一句ひねっている、サル、キツネ、タヌキが

手描きされている帯にする。前帯の柄は月に薄。この時期にしか締められないし、お太鼓柄で締める場所もほぼ決まっているので、何回か締めたらこれもつけ帯にするつもり。夕立という予報だったので、また雨用具一式を持った大荷物である。結局、降らなかった。

食事の後に喫茶店でお茶を飲んでいたら、きもの姿のとても素敵なおばあちゃまが入ってこられた。グレーの地に白で波模様が全体に描かれている絽のきものに、献上柄の帯。きれいな白髪で、表情もにこやかで本当に素敵だった。やはり人間に必要なのは品だ。それはその人の顔つきに表れるものだ。雑誌を見てもマニュアルを勉強しても、高学歴でもお金があってもどうにもならず、本人の心のありかたによるものだが。

今は便利にきものを着られる道具が増えて、それを活用している人も多い。私もこの企画のために、いろいろと買って試してみたが、やはり昔ながらのやり方に落ち着いた。半襟を直接長襦袢の地襟に縫いつけ、中にプラスティックの襟芯（えりしん）を通す方法も、夏の麻の襦袢には便利だろうと試してみたが、やはり*三河芯（みかわしん）をつけて半襟を縫いつけたほうが襟元がきれいだ。胸ひもをしないので、汗をかいても博多織の伊達締め（だてじめ）をきちんと締めたほうがおさまりがいい。きものベルトも再度試してみたが、やはり襟が前にかぶってくるので、私の体型には合わない。昔ながらの方式で着るほうがやっぱり落ち着く。誰にも見せるわけではないが、伊達締めを選ぶ楽しみもあるし。

## 九月三日

連載と書き下ろしの原稿を書きつつ、盛夏用の帯をしまう。これまではきものに関して、

着慣れている人のアイディアや、なるべく簡便で快適に着られる情報をたくさん集めようとしてきたが、やめにした。参考にさせていただいた情報もたくさんあって、役に立ったけれども、結局は自分の着る物だから、自分で考えればいいのだと、やっとこさ、わかった。Aさん、Bさん、Cさん各人の持つ情報から自分に役立ちそうな情報を、いいとこどりしようとしたわけだが、それに疲れてきたのである。あふれる情報の中で、うろちょろしている。これは私が小馬鹿にしていた、女性誌の流す情報に左右される、女性たちと同じだからだ。自分の手持ちのなかで、やりくりすればいい。幸い、私の周辺にはきものに詳しい方もいらっしゃるので、わからないときは聞けばいい。きものはしょせん着る物だから、みんな自分たちが気持ちがいいように着ればそれでいいのである。

## 九月四日

　連載、書き下ろしとも出来上がったので、編集者に送っておく。これでしばらくは針仕事などに精を出せる。早速、顔映りが悪くなってきた、黒地の絞りの浴衣を縫い直すことに決定。風呂上がりに着るバスローブみたいなものがいいような気がする。前は浴衣をそのまま着て、麻の端(は)ぎれで幅十センチくらいの帯を縫って締めていたのだが、あまりに汗が噴き出るので、おはしょりもなくもうちょっとあっさりした形のもののほうが便利なのだ。大塚末子(おおつかすえこ)さんのきものの本に、*おくみなしの対丈のきものの縫い方が載っていたので、それを参考にして、なるべく浴衣の本体を活かして作ることにする。袖は筒袖、襟つけもなるべく長くしないで、直線のあっさりとした形にする。でも細かく寸法は考えないで、すべて大雑把(おおざっぱ)で

ある。こういうときに鯨尺（くじらじゃく）は便利だ。

**九月五日**

仕事が続いていて録画していても見られなかった番組のビデオを見る。NHKスペシャルの「昭和の戦争と平和　カラーフィルムでよみがえる時代の表情」である。きっと昭和のきものを着た女性たちの姿が見られるだろうと、予想したのだがそのとおり、多くのきもの姿、それも今、人気があるアンティーク柄（もちろんそのときはアンティークではないが）のきものを着た娘さんが、とても優雅で美しい。当時のままではフィルムが褪色（たいしょく）しているので、デジタル技術で復元してあるため、きものの色が鮮明で目を奪われた。昭和九年の、アメリカ人に日本を紹介するドキュメンタリー映画、「桜の花の咲く頃」の一部が放映されたが、日本の風景ってこんなにきれいだったのか、きものってこんなに美しかったのかと、放心状態になりそうだった。娘さんの髪結いの様子、きものの着付け、お嬢さんたちが華やかなきものを着て、連れだってお出かけしている。

同年にアメリカ人旅行家が撮影した「モダン東京」では、銀座、浅草のいかにも空気の抜けがいい、すっきりとした街並みが見られる。昭和十二年になると、洋服の女性も多くなるが、それでも思い思いの斬新（ざんしん）な柄のきものを着た女性たちが銀座を歩いていく。後ろ姿を見るとお太鼓は曲がって、ちょっと下にずれてるみたいだし、着丈も足袋（たび）が見えそうなくらいに短い人もいるが、みな内股（うちまた）でしゃなりしゃなりと歩いているわけではない。それよりもおおらかにきものを着ているのがわかって、とても気持ちがいい。夏場、幼い子供の手を引い

て砂浜を歩いている、裕福な家の奥様は、濃地の薄物に大きな白い井桁の柄で、日傘をさしている。カメラを向けたときの、人々の表情がとてもいいのも印象深かった。今の日本人はこんなおおらかな表情ができるだろうか。その後、戦争で壊滅的な打撃を受け、美しい街並みも風景も無くなってしまった。女性がきものを着て歩けるのは、平和な証拠なのだ。戦前の日本人は何にしてもおおらかだった。きっと考え方もまっとうな人がほとんどだったから、みんなきりきりしないで生活できたのだろう。今の日本人の顔つきは悲しい。

## 九月六日

昔の婦人雑誌の附録を何冊か持っているのだが、昭和十三年、十四年あたりの附録を見ると、着る人がなるべく便利がいいようにと工夫された縫い方、裁ち方が掲載されている。スカート式の裾除けも、当時から考えられていて、洋装のときと兼用できると書いてある。また、襦袢を着ないで肌襦袢の上に襟だけつける簡易襟の縫い方も紹介されている。風が吹いたときに、裾が乱れない襦袢の縫い方も紹介されている。襦袢の裾から何十センチかが輪になっていて、着るときには打ち合わせ分をひだとして折り畳む。つまり襦袢の右側にプリーツがひとつあるような感じだ。

他の附録を見ると、学校の先生が早縫い法を紹介している。普通、和裁の基本の運針は、背筋を伸ばし、右手と左手の位置は体と平行になるように保つのがよしとされているが、この早縫い法では左手をぐいと前に出せとある。つまり小学校のかけっこの、よーいどんのときの手つきになるのである。そして、その位置関係を崩さずに、右手は縫いながら左手に近

付いていく。平行に縫うより、そのほうが遥かに早いらしい。また縫い方の順序も、浴衣の場合だが、左右身頃の袖つけを縫ってから、袖下を縫う。その後に背縫いをする。最初に背縫いをするのではなく、左右の身頃を別々にこしらえて、合体させるやり方だ。こんな方法ははじめて知った。とにかく早いらしいのだが、現在、全く聞かないところを見ると、無視されてしまったようだ。きっと先生は画期的な方法を発見したと自信満々だっただろうに、お気の毒である。

**九月七日**

そういえばサマーウールも、自分で縫おうと反物を買っておいたのだなあと、反物が入っている籠をうらめしく眺める。その前に浴衣も……。

**九月八日**

きもの365日といいながら、年頭に挫折してしまったので忸怩たる思いである。秋になったら、せめて週に三日くらいはと、秘かにチャレンジの炎を燃やしていたのに、この暑さでは見事にその気持ちも萎える。打ち合わせで隣町の喫茶店まで行ったら、男性の担当編集者二人に、

「きものはどうしたんです」

といわれた。ほとんどの担当編集者がこの企画を知っているので、チェックが厳しいのである。そのたびにもごもごと弁解の言葉を口ごもる自分が情けない。

**九月九日**

先週と同じ組み合わせでお稽古に行くことにする。ものすごく暑いので、せっかくだから

あしべ織汗取りを着てみる。これは半袖の肌襦袢の形をしているが、胸からウエストあたりまで、自然素材の*燈芯（具体的に私はどんなものかわからず）が中に縫い込んであって、これが汗を吸い取ってくれる。ふくらはぎの下くらいの長さの、シルクのキュロットを穿いて腰当てをつける。その上に麻混の長襦袢、綿縮のきもの。汗取りを着ると、前の打ち合わせ部分が二重にぶ厚くなる。当然、補正をしているのと同じことになるので、ウエストまわりに厚みが出る。薄いと用をなさないのでこれは仕方がない。私の場合、ウエストの補正は必要がないので、

「ちょっと、胴まわりがぶっといかしら」

と思ったけれども、汗じみができるよりはましなので、それで出かけた。厚みがあるわりには快適だったが、おばちゃんとしてはウエストまわりがぶっとくなるのはちょっと抵抗がある。でも汗は吸っているのにひんやりべたべたした感じはしなかったので、細身の人にはいいかもしれない。

三味線の皮が破れてしまったので、三味線屋さんに持っていって、張り替えを頼んだ。浅草の「文扇堂」で扇子を買う。前に頼んでいたものがあって、立ち寄って三本購入。コスモス柄、ネコ二匹、それと薄紫の細い縦縞の柄だ。帯に扇子を挟みはじめると、夏場は実用を兼ねているが、挟んでいないと忘れ物をしているようで落ち着かなくなってしまった。末広というから身につけていたら、厄よけになるかも。昨今は物騒だからお守りがわりにしようか。家に帰ってみたら、きものの帯枕が当たる部分は少しだけ汗がしみていたが、他の部分

は全くといっていいほど被害はなかった。帯にはまた見事に藍の色がついてしまった。

**九月十日**

真夏のように暑い。半月ほど夏が遅れてきたようだ。昨日着た襦袢を洗う。まだ麻絽の半襟をつけていたが、来週はもうつけられないだろうし、襦袢も洗ったら来年までお休みだ。汗で湿った伊達締めにアイロンをかける。冬場はそのままだが、夏場は一回、一回、空アイロンをかけないと気持ちが悪い。麻布で伊達締めを縫ったらどうかと、ふと考えた。たしか端ぎれがあったはずだから、検討してみよう。実家に置いてあり、母親の魔の手の手つかずになっているものを送り返してもらう。母親が毎日電話をかけてきて、

「あれも送らなくちゃだめ？　これも？」

と恨みがましくいちいち確認するので、面倒くさくなって、

「じゃあ、着たいものは置いておけばいいでしょう」

と怒る。結局、私が自分のお金で買い、母親の着たいものリストから落とされたものが、袷、単衣、薄物と全種取り揃（そろ）えて送り返されてきた。

「え、これだけ？」

と驚いた。どうも他のめぼしい大島などは、取られちゃったようだ。戻ってきたきものすべてに、防虫香の匂いがして閉口する。私は匂い袋の香りや、お香そのものの香りは好きなのだが、タンスの中の防虫香は苦手で、気持ちが悪くなってくる。それ自体の匂いをかぐとそうでもないのだが、きものに移ったときの香りが、何ともよくない。このきものを着てその匂

いが体臭だと思われたら、ショックで倒れそうだ。入っていた防虫香を捨てて、畳紙を変える。

戻ってきたなかに、二十年前に勧められて買った、私にしてはかわいらしい柄の小紋があって恥じる。同じく二十年前に買った型染め小紋に、派手な裾回しがついているので、また恥じる。紬以外には興味がなかったので、買ったことすら忘れていた。当時、表地と同系色の裾回しをつけるといったのに、京都出身の女性店主が、

「そんなん、地味すぎ！」

といい張り、プロの意見も聞いたほうがいいのかなと思って従ったのだが、今まで身につけず、忘れ去っていたことを考えると、失敗だったのだ。彼女が選んだ裾回しは、柄のなかのいちばん分量の少ない色だった。たしかにポイントになってコントラストはつくが、こういう裾回しをつけてしまうと、帯や小物を選ぶのに困る。私は色数を使うと野暮ったくなるタイプなので、無難だけど表地と裾回しは同系色のほうが着やすい。でもあのときは確かに同系色では地味だったかもしれない。ヘアスタイルもおかっぱだったしなあ、と時の流れを感じ、裾回しを替えてもらおうと決める。そうしたら柄からいって、おばあさんになっても着られる。総絞りの羽織も送り返されてきて、これを買ったときに貯金を全部はたいたことを思い出した。当時は大胆だと敬遠していた柄ゆきのきものも、羽織ってみたら意外と平気だったので、新しくきものが増えたみたいでうれしくなる。

**九月十一日**

友だちがいったように、四十度にはならないが猛暑である。午前中にはぱたっと風もやん

でしまい、うだるような暑さだ。藍の色がついた、麻の名古屋帯をつけ帯に縫い変えることに最終的に決定。お太鼓を自分で形作るタイプもあるが、これは藍の色がついてしまって、結局はその部分を避けて締めなくてはならない。すでにお太鼓を形作ってあるほうが汚れを気にすることなく締められるので、そちらの方式にした。家にある帯の寸法を測りつつ、前帯の部分がポイント柄なので、それがいい位置に来るように、何度も胴に巻いたり、寸法を測ったりと、長さを調整するのが大変だった。帯の長さが十分にあったので助かった。お太鼓柄なので藍の色がついたところが、お太鼓のほうに響かないように位置を決める。心持ちもうちょっと柄が下にあったほうがバランスがよかったかもしれないが、これ以上、位置をずらすと汚れが見えてしまうので、これがぎりぎりだった。柄出しを気にしなくていい帯だったら、ものすごく簡単にできる。うそつきの袖以外に身につけて外に出られるものがはじめてできた。全部手縫いだったが、つけ帯作りにはまりそうでこわい。

## 九月十二日

暑い。どうも私はあの程度の時代のものをアンティークというには抵抗があるので、古着といってしまうが、古着のきものの雑誌が書店にずらっと並べられるようになった。そういった雑誌を見ると、感じがいいものもあるし、首をかしげたくなるものもある。柄、柄、柄の五段、六段重ねでおまけにアクセサリーもてんこ盛り。もともときものは柄と柄の組み合わせだけれども、きものの知識がない人が、感覚だけで柄だけを見て組み合わせる面白さももちろんあるだろうが、あまりにエスカレートしすぎると、ちょっとくどい。スタイリスト

のグラビア用のコーディネートよりも、素人のきもの好きの人たちの姿のほうが、よっぽどチャーミングだし素敵だ。柄やお飾りがてんこ盛りのモデルさんを見て、直感的にイメージしたのは、昔の小説に出てくるような、お金持ちの家に生まれた、美しい気の触れた娘さんだ。ばあややねえやが目を離したすきに、おうちにあるものを、みんな身につけて出てきちゃった感じ。

## 九月十三日

連日、暑い。こんな日にきもので出かけろといわれたら、何を着ていいかわからない。本当ならば麻、綿紅梅（めんこうばい）、絹紅梅（きぬこうばい）は八月末までだが、あまり白っぽすぎなければ、着てもいいじゃないかといいたくなる。新しいきものの衣更え（ころもがえ）暦が必要だ。というか、もう、あまり、礼装以外はきちきちすぎるのはやめましょう、と勝手に決める。

ちょっと腹が立つことが重なり、妙に行動的になってさっさときものの整理なんぞをしたりなんかする。私はふだん、仕事以外はのらくら、ぼーっとしている怠け者タイプである。以前、ものすごく激怒したことがあって、怒りにまかせてパワーが湧き、懸案だった本の整理が半日で済んでしまったという事実もある。だからたまには怒ることも、私の日常においては必要なのである。でも今回は最初は爆発したけれども、だんだん怒りが尻すぼみになってしまい、今ひとつ成果が上がらなかった。

## 九月十四日

今日もまた暑い。午前中は抜けるような真っ青な秋晴れだったが、午後から夕立がきそう

な曇り空になった。実家から戻ってきた単衣のなかに、これまでどれに合わせようかと思っていた、麻のカニちゃん柄の帯が締められそうなものがあったので、これもつけ帯にしようかと、原稿を書く合間に考える。

## 九月十五日

明日のお稽古に着ていくきものを考えるが、一向に頭に浮かばない。あまり白っぽいものは避けたほうがいいかなとは思うが、連日の暑さを考えると、濃い色のもちょっとなあと迷う。結局、以前、食事のときに着て出かけた、白地にブルーの柄の絹綿のきものと、送り返されてきた綿麻の挽き茶色と白の市松のきものを候補にしたが、市松のほうはまだ防虫香臭いので、きものハンガーにかけたまま、風を通しておく。

## 九月十六日

多少、気温が下がり、秋風が吹いているほどではないが、やはり白地のきものはどうもはずしているような気がして、急遽変更してベージュ地の*吉野間道の伊兵衛織の紬に、柿渋染めの帯を締めて出かけた。市松はまだ少し臭いので、そのままハンガーにかけておいた。とりあえず出かけたが、これもまたしっくり来ない。道中、いつになくきもの姿の人を多くみかけた。単衣の小紋に絽縮緬の染帯、渋い緑色の単衣紬に濃紺の帯、グレー地に濃紺の片身替わりの紬にベージュの帯と、さまざまである。私の格好は涼しげといった観点からみると、少しはずれている。秋らしい色合いといったら、まあそれにははずれてないだろう。九月のこういう気候のときは、いったいどっちをとればいいんだ。ま、間違っていたとしても、



9月16日
耐久性の強い伊兵衛織に
柿渋染めの名古屋帯



9月27日
浴衣ざらいの日。
「せい吉会」で作った
お揃いの浴衣に、
博多献上の名古屋帯

着ちゃったもんはしょうがない。この時期のこのような気候にぴったりのきものは持ってないし。こういうことがあるから、手持ちのきものがあったとしても、ないような感覚に陥ってしまうのだろう。季節が昔のようにきちんきちんとしていてくれれば、散財はしなくても済みそうだ。ま、根本的には反物を前にしたときの、本人の自制心が問題なわけですが。

　今日も汗取りを着た。柿渋染めの帯が比較的ざっくりしていたこともあって、胴回りが妙に立派である。全身を鏡に映してみると、腹まわりがふくれてエンタシスのようだった。私の体型には腰当てだけのほうがすっきりみえるのだけれども、きものを守るためには、汗取りは必要だし、辛(つら)いところである。

**九月十七日**

　十四日に思いついたカニちゃんの帯を、単衣に合わせてみたら、ぜーんぜん合わなかった。

**九月十八日**

　畳紙を替えただけでは、匂いは取れないようなので、交代できものをハンガーにかけて風を通すことにする。時期的に着る可能性が高い単衣と袷に風を通す。黄土色の琉球絣(りゅうきゅうがすり)、白地に茶とグレーの格子柄の*じゃじゃ織、紫の濃淡の*両面染めの大島紬。

**九月十九日**

　市松のはやっと匂いが抜けたようなので、次に紺地に細いワイン色の*綿唐桟(めんとうざん)をハンガーにかける。四枚とものれんみたいにひらひらしているが、近付くと防虫香の匂いが漂ってきて、ちょっと困る。早く匂いが抜けて欲しい。

## 九月二十日

颱風が近付いているので、久しぶりに雨が降ってずいぶん気温が下がっている。匂いとりは雨が降っている間はやめにする。『和布のスカート』（今村洋子著、文化出版局）を買う。きものを洋服にすると、似合う人は似合うけど、似合わない人にはとんでもなく似合わないという現象が起こる。私はそのとんでもなく似合わないタイプである。しかしこの本に載っているスカートは、デザインがお洒落でとってもかわいい。モデルさんも素人の方がほとんどで、若い人だけではなく年輩の方もいて年齢を問わず、それなりにみなさん素敵だ。私はなるべくきものはきもののままで着たいし、きもので着られなくても、きもの関連のものに仕立て直したいと思っているけれども、端ぎれをうまく組み合わせて、こんなスカートなら作ってみたい。

## 九月二十一日

昨日に増して肌寒い。こういう日はきものを着たくなる。寒いときも着たくなるし、夏は暑いといいながら、やっぱり着たくなる。どうして今年の頭に、毎日きものを着たら辛かったのだろうか。

## 九月二十二日

私がきものを着るときにつけている、キュロットタイプの肌着は、本当に快適なので放せなくなってしまった。きものを着たときにトイレに行くと、着崩れるという人もいるが、私の場合はそういうことを感じたことはない。腰ひももウエストに締めるようにしたら、これ

またとても楽になった。腰骨の上に締めていたときは、補正をしていなかったので、すべりのいい表地のときは、ウエストのほうへずり上がってくることもあったけど、それなら最初っからずり上がるところへひもを締めたら、当然のことながら、ずり上がることがなくなった。唯一、着崩れに関係するのは腰当てだが、それも適当にごそごそやると、なんとか落ち着くものだ。ステテコ（これが売られている名前だからしょうがない）だと、万が一、避難が必要な有事に遭遇しても、下にズボンを穿いているのと同じだから、活動的だし。以前、買った、『きもの地で、今着たい服』（昆布尚子（こんぶひさこ）著、文化出版局）という本に、羽織を仕立て直したズボンのパターンが載っていたから、うちにある反物の端ぎれでできるかもしれない。

**九月二十三日**

お稽古日。それほど暑くないので、紺地の結城（ゆうき）の単衣に、紋織*の博多帯を締めていく。会の方々は誉（ほ）めてくださるけれども、「渋い」「地味」といわれる。やっぱり私の好みは地味なんだろうか。洋服でも華やかな色はほとんど着ないで、紺、黒といった色合いばかりだし、花柄も着ない。これからは歳もとるし、あまりに地味よりも帯は少し華やかなもののほうがいいのかもしれない。道中、きものを着ている方を六、七人見て、うれしかった。ただしみなさん、私よりも御歳上の方々ばかりだったが。

**九月二十四日**

桐タンス二棹（ふたさお）に入りきらなくなって、和室にあふれているきものや帯を、どうするか本気で考えた。人に差しあげるにしても周囲にいるほとんどの人が私よりも大柄で、直すのに費



紺地の単衣の結城紬に
2種類の名古屋帯。
9月23日
紋織の博多の名古屋帯
9月30日
結城紬の帯



きもの365日、
汗と涙の（?）記録写真。
整理・資料用に
役立てたい

用がかかってしまう。また帯は私の場合、きものは地味で、いってしまえば無地、縞、格子などありふれたものなのだが、帯で組み合わせの変化をしようと選んでいるので、帯は他の誰に似合うかと考えると、誰にも合わない。やっぱり自分にいちばん似合うのである。袖を通したものは申し訳ないので、若い頃に作って、着ないままになって派手になったきものを、サイズが近い若い友人に貰ってもらおうと申し出たら、受け取ってくれるというので、喜んで選別する。かわいいかしらと思って買った帯揚げも、結局、私にはかわいらしすぎたので、彼女に貰ってもらうことにする。

**九月二十五日**

三十代のときに買った、洒落袋帯*を取り出してみる。つけ帯にすれば、締めるのに便利だなと思いながら、これは気合いをいれて一気にやらないと、大変なことになるぞと思い、ただ確認しただけで終わる。いったい何のために箱から出したのか、自分でもよくわからない。

**九月二十六日**

明日は小唄の会の浴衣(ゆかた)ざらいである。毎年、九月の頭に行われる、松峰派との合同の会が、師匠の三越の舞台があったために、この日に移ったのである。季節的にはちょっと浴衣ざらいといった雰囲気ではないが、お揃いの浴衣に帯を合わせようとして迷う。九月の終わりだし、白地の博多献上だと、柄の藍色が帯に移ると困るので、地色の濃い、紺地の博多献上で妥協する。

**九月二十七日**

三味線を革ケースに入れると四キロの重さがあるので、タクシーで行く。途中、信号待ち

をしているときに、駅からきもの姿の若い女性が出てくるのを見た。青紫の地に紫色の格子の単衣に、白地の帯を締めていた。自分で着たのだろう、髪の毛もあごくらいの長さのストレートで、とても自然な感じでよかった。きものを、洋服を着るときとは全く違う雰囲気で着たいという人もいるだろうが、私は洋服とはかけはなれないような感じで着たいと思っている。彼女はそちらの雰囲気だった。

会の途中、着ているうちに浴衣の藍が落ちてきて、手指が青く染まってきた。隣の席に座っていらした与志江先生が、

「藍の浴衣は本当は一年寝かせてから仕立てると、色が落ち着くからいいんですけどね。脱いだら霧を吹いて、風を通して汗をとばして、寝押ししてからしまうといいのよ」

と教えてくださった。車で移動して、室内にずっといたので汗はほとんどかかなかったが、皺になったところに霧を吹いて、きものハンガーにかけておく。縫う時間がなくてほったらかしになっている浴衣の反物も、寝かせているのと同じ状態だなーと考えることにする。

**九月二十八日**

天気がいいので窓を開けて、風を通す。他に室内には、汗取りに出す単衣の襦袢二枚がはためいている。そろそろ袷の準備もしておかなくては。なんだかそう考えると一年というのは、あっという間だ。

**九月二十九日**

頼んでいた仕立て直し、汗取りのきものの受け取りと交換に、夏のきものや襦袢の汗取り

の追加と、小紋の裾回しの取り替え、ふだん用の紬の仕立てを頼む。ずっと前にきものを仕立て直してコートにしたときに余った、裾回しと胴裏があったので、包みのなかにいれておく。汗取りされたきものは、みなふっくらとして新品のようになって戻ってきて、とてもうれしい。ただし請求書がまだ来ていないので、どれくらいの費用になるかわからないのであるが。いくら水を通すと紬などはしなやかになるとはいえ、やはりまず、なるべくきものを汚さないように気遣うのが、心得というものなのだろう。

**九月三十日**

お稽古日。ものすごく風が強い。今日の風は、下手(へた)をしたら膝上(ひざうえ)までまくれ上がるのではないかというくらいの強さである。先週と同じ結城紬の単衣に、結城の格子柄の帯にする。ちりよけがわりにアップルコートを着て出かける。あしべ織汗取りを着て帯を締めると、やっぱり胴回りが、ぎりぎりである。名古屋帯だと、ここからお太鼓になりますよという、胴に巻く部分が開いた三角形の部分があるけれども、ての長さをとると、もう、本当にぎりぎりなのである。つまり胴回りを補正したら、これ以上は絶対に太れない。私は背が低いので、お太鼓に必要な長さは、普通の人より短くて済むのだろうが、これでは帯の長さのほとんどが、胴回り分になるのではないかと不安である。きものは洋服に比べて融通がきくから、気を許すとどんどんふくらんで行きそうだ。困ったお尻だけではなく、困った胴回りにならないように、体も気もひきしめなくてはいけない。


「十月」

## 十月七日のコーディネート

きもの　緑の地に微妙に市松模様が織り込まれた結城紬
帯　染めの名古屋帯
帯揚げ　サーモンピンク
帯締め　琥珀（こはく）の組み出し
半襟　クリーム色の塩瀬
襦袢　明るい黄土色の地に、動物たちが麻雀をしている柄
足袋　白足袋
草履　鼻緒が本天の、酒袋の草履
バッグ　茶色の革のトートバッグ
裾回し　着物と同系色の地色に小紋柄を染めたもの



印伝（いんでん）の巾着袋（上）と
柳行李（やなぎごうり）のバッグ（元は弁当箱）

# 十月



## 十月一日

この連載の八月分、九月分を渡すので、隣町まで行く。いい加減、『きもの365日』という書名に合った生活をしないと、まずいのではないだろうかと気合いをいれて、きものを着た。今日から袷である。袷用の襦袢に袖を通したとたん、

「暑！」

という感じだったので、昨日着た単衣の襦袢に変更する。袖が単衣なだけでも感じる暑さがずいぶん違う。365日に燃えていたころによく着た、偽大島にペルーの古布のつけ帯を締める。足元は、軽い、辛子色の本天の太めの鼻緒がついた桐草履。

## 十月二日

この時期、襦袢を単衣にしてきものを袷にしたほうがいいのか、襦袢を袷にしてきものを単衣にしたほうがいいのか、よくわからない。礼装ではないので好きにすればいいのかもしれないけれど、どちらがふさわしいのだろうか。うーむ、わからない。ただ見た目では、私は秋口はきものが袷のほうがいいかなと思っているのだが。最近は湿気が多くて、蒸し暑い日が多くなっているから、袷の襦袢の袖も、振りと袖口の見えるところだけ二重にして、本体は単衣のほうがいいんじゃないだろうか。寒いときは普通の無双（むそう）のものを着る。となるとどちらにせよ、袖だけ替えられるうそつきは、合理的なのだなあとあらためて思った。そういえばきもの雑誌に、袖口と振りの部分に袷風に布を縫いつけた袖の縫い方を紹介した記事があったことを思い出した。ファイルを探してみよう。

## 十月三日

「クロワッサン」の連載シリーズ「着物の時間」の撮影できものを着ていく。秋らしい色合いのものをと、草木染めの縞の紬に、染めの名古屋帯を締めていく。天気はとてもいいのだけれど、昨日ほどではないにしろ、気温が上がりそうなので、汗取りを着る。当然、腹まわりは立派になるのだが、そのせいか名古屋帯の前柄がうまく出ないで悪戦苦闘する。汗取りをやめれば解決するが、そこまでしたら大事になるので、だましだまし締めて何とかする。私はゆるめに帯を締めるが、今日はきっちり巻いてやっとだった。琥珀（こはく）がついた組み出しの帯締めに、蓑虫（みのむし）の鼻緒の草履を履いていく。襦袢はきものとの色合わせの都合で、鳥獣戯画

に出てくる動物とネコが、麻雀をしているところを描いてもらった物にしたが、ちらちらと袖口から襦袢が出てくる。最近、単衣の襦袢でもそういうことが多くなったのだが、着方に何か問題があるのだろうか。急いで袖のところを、安全ピンで止める。

何か小物をという依頼だったので、手持ちの白襟を染め、刺繡してもらったものを持っていく。佃の住吉神社で撮影していたら、次々とお詣りに来る人がいて驚いた。神社の中には鰹塚というでっかい塚もあり、魚市場組合から奉納された柱も建っている。あらためてこの辺りは、漁業と関係が深かったのだなあと思った。私は東京の小石川で生まれて、四歳で引っ越してからは、ずっと西部地域で過ごしたので、佃あたりのことはほとんど知らない。友人が佃リバーサイドに住んでいるので、何度か来たことがあって、その周辺は知っているが、開発されていない普通の住宅地の雰囲気がとてもよかった。

## 十月四日

しぼのある生地の単衣の朝顔柄の襦袢の裄が、着ているうちにどんどん長くなってくる。汗を吸ってしぼが伸びてしまうらしい。着たときは平気なのに、汗をかくとずるずると袖から出てくるので、汗取りには出さずにうちで洗って、うそつき用に縫い替えることにした。きものハンガーにかけて乾かした後、寸法を測ってみたら、丈は縮んで裄はきものよりも長くなっていた。裄を直すことにしよう。

## 十月五日

ふだん着としてきものを着ていると、何も関係ない赤の他人に、聞こえよがしにあれこれ

いわれることがあるらしい。そういう無礼な奴等(やつら)は礼装のきものがいちばんだと思っているか、頭の凝り固まった大馬鹿野郎である。もうぶっとばしてやりたい。だいたいそういう輩(やから)は、自分ではきものを着ない人ばかりだろう。少数派になると風当たりも強くなるが、そんなことにめげて、きものを着ることにくじけたらもったいない。大馬鹿野郎は無視することにしよう。悲しいかな人間というものは、悪口は口をついてすぐに出るけれども、誉めことばはなかなか出ないものだ。きっときものを着ていることで、いいなと思ってくれる人は、あれこれいう人以上にいるはずだ。日本人が日本独特の衣類を着て、同じ日本人にあれこれいわれるなんて、ものすごく変だ。そんなことをいう日本人は、頭がおかしくなっているのではないだろうか。

それと外国人から見ると、帯は四角い箱を背負っているようで変に見えるらしいので、海外ではお太鼓ではない結び方にするとか、白い足袋も奇異に見えるらしいと書いている本を読んだことがあるが、そんなことほっておけといいたい。どうして何も知らぬ外国人に合わせなくてはならないのだろうか。それをいうなら、スコットランドの男性の正装である、タータンチェックの巻きスカート、キルトはどうなるんだ。外国人にお追従(ついしょう)する偽(にせ)外国人みたいな日本人は嫌いだ。

**十月六日**

隣町で新しい連載の打ち合わせ。汗取りからあがってきた縞の泥大島に、半幅帯を貝の口にして、同系色でずどーんと締まりがない感じだったので、辛子色の帯締めをする。雨が降

っているのでその上にアップルコート。足元は雪でも滑らないという、雨草履である。コートを着る前に、鏡で全身を映してみたら、どうもお尻のあたりがぶくぶくしていた。おかしいなと思いながら、上にコートを羽織ってしまえば、他の人にはわからないので、着方が悪かったのかしらと首をかしげつつ、そのまま出かけた。うそつき襦袢を着たこともあったので、そのせいかなとも思った。これは袖に木綿がついていて、襟には木綿の端ぎれがついている。裾除けも巻きつけスタイルではなく、ウエストがゴムになった、ペチコートスタイルのものだ。どうも襟まわりがうまくなじまず、浮きがちになって気になる。背には引き布、身頃にはひもがついていて、襟が固定されるようになっているのに、着心地が悪い。袖が木綿というのは気分がよかったので、絹の襦袢で袖だけが木綿というのはどうかと考えてみたが、胴が木綿だからうそつきの便利さがあるので、そこが正絹だったら、あまり意味がないことに気がついた。

家に戻ってきものハンガーにかけてみたら、きものが袋*になっていた。以前にも他の大島を生洗いに出したら、ものすごく袋になっていて、びっくりしたことがあった。仕立てはいいはずなのに、こういう現象が起きるのはなぜなのだろうか。直しに出さなければ着られないと思うと、がっくりする。また懐に涼しい風が吹く。他にもそういう物がないか、調べなくてはいけないが、今週末に締切りがあるので、そうもいかずに、

「うーむ」

とうなりながら気分は重い。そろそろ例の「喉赤（のどあか）」の季節が到来したらしく、喉が少し赤

くなった。久々にTシャツの出番がめぐってきたらしい。

## 十月七日

お稽古日。本当は昨日と同じきものを着るつもりだったのに、袋になってしまったので、結城紬に「クロワッサン」の取材のときと同じ、名古屋帯を締める。これは緑色の地に、よーく見ると、微妙に市松柄が織り込まれている。緑色と黒で二センチ角の縦縞、横縞が交互に織られていて、近くで見ると、市松柄に見える織り方になっている。無地っぽいので裾回しには同系色の地の小紋柄を染めてつけてもらった。このまま何度か着て楽しんで、洗いに出さなくてはならなくなったら、無地の裾回しに替えてもらうつもりだ。そのほうが帯合わせに苦労しないし。足元は酒袋*の草履である。

お稽古が終わって帰る途中、浅草寺の境内で同門のKさんとばったり会って、しばらく立ち話した後、駅に向かって歩いていたら、突然、左側からかさこそとした音が追いかけてきた。何かしらと思ったとたん、

「あの、わたくしとお茶をご一緒していただけませんか」

と声がする。びっくりして横を見ると、スーツを着てソフト帽を被(かぶ)り、精一杯お洒落をした七十歳ぐらいと思われる痩(や)せた男性が息をはずませている。一瞬、びっくりしたが、

「すみません、これから仕事がありますので」

とお断りすると、

「そうですか、うーん、残念だなあ」

といいながら、またかさこそと音をたてて戻っていった。相手をとても急いで探しているふうであったが、駅までの道のり、おかしくておかしくて、声を出して笑いそうになった。まさか五十近くなってナンパされるとは想像もしていなかった。まだ七十歳以上には、私のマーケットはあるということか。でも特別うれしくもなく、行きずりの人に道を聞かれたのと同じ感覚だった。

今日着たきものも、ハンガーにかけてみたら、どうもシルエットがおかしい。点検してみるとほんの少しだが袋になっている。このきものは汗取りにも手入れにも出していないし、長い間ハンガーにもかけていないし、これまで二回着ただけだ。

「私の体が悪いのか」

体から、きものを袋にする妙なガスでも出ているのだろうか。このごろの悩みの種は袋である。こんな調子で着るたびに袋になって、仕立て直しをしていたら、いくらお金があっても足りないじゃないか。それでなくても貯金がないというのに（実家のローンがまだあるので、めちゃくちゃ赤字！）、いったいどうすんだと腹が立つ。このきものは知らないうちにミシン仕立てにされていた店で買ったのだが、仕立てが悪いのか、三回着たらこういうものなのか、それとも私の体から悪いガスが出ているのか、理由はわからない。絹物で収縮率が違うであろう表地と裏地をぴったり合わせるのは大変なのだろうが、着るたびにこれだと、ちょっとなあという感じがする。ひどい袋ではないので着るときにシルエットを見ながら、腰ひものところでつまむか、だぶついている分をおはしょりで隠れる部分でつまんで縫い止

めるかのどれかが応急処置だろう。
「ああ、やっぱり針仕事か……」
とため息をつく。半襟をつけられない人には、
「半襟くらいつけられるように、努力したら」
というが、袋になったとしても、和裁ができれば自分で直すことができるだろう。なるべく出費を控えようとすると、どこまでいっても、きものと針仕事は二人三脚でやってくる。浴衣でさえ襟つけの前で中断しているのに、こんな私が袷の袋直しなんぞできるわけがない。できるように努力しようかと思うが、あまりに長い道のりだ。あとは礼装以外では袷のきものではなく、単衣のきものを着続けるという手もある。伊兵衛織は袷の時期でも単衣で着るものだし。とにかく締切りが終わったら、他のきものも点検しなくては。Tシャツのおかげか、喉は赤くならなかった。

**十月八日**

仕事の途中、年下の友人に貰ってもらうきものを選ぶ。本体には手をつけられないので、ポラロイド写真のファイルを見て選別する。気に入ってもらえればいいのだが。

**十月九日**

やっと原稿を書き上げて先方に送る。きものの整理をはじめる。派手になったきもの、結城、越後上布（えちごじょうふ）も何枚かあるので、そのなかで彼女に似合いそうなものを選び出した。

**十月十日**

やはり彼女が着るには、帯も何点かあったほうがいいと思い、夏帯を出してみる。

### 十月十一日

昨日に続き、結城などの紬に合わせるために、洒落袋帯もあったほうがいいだろうと、彼女に似合いそうな白地に明るい更紗(さらさ)柄(がら)の帯を選んだ。白地の洒落袋帯は何点か持っているし、私には少し派手なので、彼女にはちょうどよさそうだ。

### 十月十二日

きものなどを包む畳紙をひっぱり出す。和紙のものは何でも捨て難いものだが、取っておいてよかった。

### 十月十三日

朝から蒸し暑い。午前中は晴れていたが、午後から突然の豪雨になる。きものを広げるのはちょっとと思われたので、貰ってもらうきものの整理はとりやめ。

### 十月十四日

お稽古日。昼から雨らしいから、荷物を少しでも減らすために、臙脂色(えんじいろ)の細かい格子の繻子(しゅす)の雨コートを着ていく。草履も雪でもすべらないウレタン雨草履。きものは綿唐桟(めんとうざん)で、蠟引(ろうび)きがしてあるようなので、雨に強いかもと着てみた。帯は半幅で半襟は薄いベージュ。お稽古が終わって外に出ると雨が降っていた。どしゃ降りではなく、そこそこの降りだったらきものでも歩くのは楽しい。今日の格好は綿唐桟で、ごくごくふだん着のきものだが、縞のきものに半幅帯のこういう格好をしていると、年輩の女性がじっと見る。きっとかつてこう

いう格好で日常、過ごしておられたのではないだろうか。紬の地味な色合いで、エスニック系の帯を締めていると、若い女性が見る。そして小唄関係の会以外にはほとんど着ないけれども、柔らか物を着ていると男性が見る。パターン化していて面白い。

## 十月十五日

出かける予定があったのだが、先方の急用で急遽中止になったので、縫いかけの浴衣を取り出して、じっと眺める。じっと眺めても襟がつくわけではないのだが、ついじっと眺めてしまった。

「眺める暇があったら、一針でも二針でも縫えよ!」

と自分を叱(しか)りつけたが、

「どうもすみましぇん」

と別の自分があやまって、縫いかけの浴衣はまた引き出しに収まることとなった。かわいそうな浴衣である。

畳紙を出して貰ってもらうきものの包装作業。着用時期や素材を書いたメモもいれておく。

## 十月十六日

昼過ぎに、きものを貰ってくれる彼女が、わざわざ取りに来てくれた。洋服の上から羽織ってもらったら、丈や幅は直す必要がなく、心持ち裄が短いかなという感じ。気に入ってもらったようで安心する。

夜は関川夏央(せきかわなつお)氏が出版社の賞を受賞したというので、かつての旅行仲間でお祝いの食事会。



袷の博多の半幅帯。
博多帯はしめやすく、
愛用している



10月14日
薄手の綿唐桟に
お気に入りの
幾何学柄の半幅帯

沖縄懐石料理を食べに行く。先週の火曜日に着た、緑色の結城に黄土色に四角いブルーが並んでいる、ざっくりとした織の名古屋帯を締めた。多少の袋は腰ひもを締めたあとに、ちょこっとひもに挟み込んでごまかした。きものを着るのに、やっと快適な季節がきたという感じだ。

## 十月十七日

きものを着た後、きものハンガーにかけてあるのを見て、きものに入る皺が少なくなってきたのに気がついた。今年のはじめはお稽古にきものを着て、正座を三十分して立ち上がると、もう、恥ずかしくなるくらい後ろに皺が寄った。しかし十ヶ月たった今、みっともなくないくらいの、最小限の皺しか寄らなくなった。少しずつ慣れてきているらしい。本来の目的である、毎日きものということができなかったので、私としてはうーむという気持ちだったのだが、多少、報われたような気がした。

それとどんどんきものを着るのが楽になってきたということだ。きものの質によって、腰ひもの締め具合を調整できるようになったし（浴衣、木綿はすべりが悪いので多少ゆるめでも大丈夫とか、絹物でも親の敵（かたき）みたいにぎゅうぎゅう締めなくても大丈夫とか）。たまにしか着なかったときは、

「きものを着る！」

と肩をいからせていたのに、今は楽に巻きつけるという雰囲気だ。もちろん下半身はすっきり、上半身はゆったりだけれども。やはり洋服でもそうだが、きものも多少恥をかいても、

じゃんじゃん着続けることが大事なようだ。

**十月十八日**

自分を追い込もうと、食材の買い出しのついでに、たまっているウールの反物の端っこを切って、手芸店に縫い糸を買いに行く。考えてみれば、一月、浅草の縫い物の神様の淡島さまのお守りまでもらってきたのだ。それでこのざまだと、淡島さまに叱られてしまう。縫い糸を眺めながら、

「ちゃんとやれよ」

とつぶやいた。

**十月十九日**

月の下旬は締切りが集中しているので、何となく落ち着かない。仕事以外のことが集中してできないので、忸怩（じくじ）たる思いである。それでも何となく触っていたいので、帯揚げや帯締めの整理をして気をまぎらわす。

**十月二十日**

とある連載で書いたのだが、古着ブームになってきものが若い人に身近になったのはいいが、その後のきものについて、私は心配になっている。たとえば骨董市（こっとういち）などで三千円と値段が付けられている、絹のきものっていったいどういう質なのかという点である。このブームに乗って、以前は小物などの素材用として売っていたものも、一部は着用できるきものとして販売しているのではないかと。ポリエステルや交織ならともかく、正絹でその値段という

のは何か問題があるに違いない。古着の値段設定のほうが、新品の反物よりもずっとシビアなのではないかと考えるからだ。本当にきものが好きなのではなく、流行(はや)っているから着たいと思っている女性が買う。布の状態もあまりよくないだろうから、力がかかるお尻部分は縫い目が裂ける可能性もあるだろうし、袖つけをひっかけてほころびたりすることもあるだろう。半襟さえもつけるのが面倒くさいといっている女性たちが、そのほころびたきものをどうするのか、それが気になって仕方がないのだ。

若い女性でも針を手にして、繕い物をしたり、小物や帯まで、また和裁にもチャレンジしたりしている人がいる。そういう人はもしもきものが破れたとしても、繕ったり、また別のものに作り替えたりすることをいとわないだろう。私はきもの好きというのは、そういう部分も含めてだと考えている。繰りまわしなしにきものというものは、私のなかで存在しないのである。針を手にしたこともなく、する気もない女性たちが着て、運悪く破れてしまったきものは、いったいどうなってしまうのか。やっぱりゴミ箱行きなのだろうか。もともと古着はリサイクルだから、第二の命をもらったといってもいいのかもしれないが、絹のきものは布きれになっても、使い道がある。五センチ角の端布でも和布は捨てられない。

「あら、破れちゃった、やだー。でも二千円だから、いいか」

と捨てられたりしたら、やっぱり悲しい。

十月二十一日

お稽古日。先週と同じ綿唐桟に半幅帯で行く。男性のきものの本を読んでいたら、骨董市

できものを買い始めた方は、三十枚のきものを安く買ったうち、二十枚は品物がよくなくて捨てたそうである。市の場合は買う方が慣れてないと、難しい場合が多いが、やはりある程度の授業料を払わないと身につかないものだ。この男性のように、それが将来の本当のきもの好きにつながっていけばいいけれど、今の若い女性の古着ブームについては、着捨て状態になるのではと懸念してしまうのである。ふと思ったのだが、きものを着る男性で、自分で半襟をつける人っているのだろうか。奥さん頼りなのだろうか。ちょっとずるい気がする。

## 十月二十二日

私は基本的に、着る物は何でも新しいデザインのものを、どんどん着たいタイプではなく、質がよくて気に入ったものを長く着たいタイプである。だから流行はほとんど無視である。袖口の裏地のほつれを繕いながら八年間着た、マックスマーラのコートや、プラダのジャケットが、いよいよどうしようもなくなって処分する日が来たときは、断腸の思いであった。もちろん全部をそこまで気に入っているわけではなく、買ったものの袖を通さない服もある。それはバザーに出したり、処分してしまうのだが、洋服圏、特にヨーロッパの人々からしたら、とんでもないことだといわれてしまうだろう。私がきものを粗末にするとむっとするように、ずっと洋服を着てきた人々は、日本人よりも洋服に愛着があるのではないかと思う。ずいぶん前に、貧しい階級ではない、社会的地位のある働く女性が、おばあさんの穿いていたブルマーを繕って穿いていると読んだことがあって、びっくりした覚えがある。下着まで

そうして代々受け継いでいるのだ。これは母、祖母の長襦袢を受け継いで着ているのと同じだ。私が育った世代はまだきもの姿のお母さんたちもいたし、母親の着ていた*銘仙（めいせん）の繰りまわし状況や、柔らか物の染め直し、仕立て直し、白い胴裏がはたきに変身するのも見ていた。だからきものは繰りまわすものとインプットされている。でも今の若い女性たちは、よほどじゃない限り、そういう場面を目にすることもないし、実感としてわかないのだろう。昔と違って、仕立て直し、染め直しをするごとに、結構費用がかかるし、きものも着捨ての時代になってしまうのだろうか。

## 十月二十三日

一部日焼けしてしまった片貝木綿のきものを取り出して、何とか着られないかと見てみたが、肩山など三つ折りに畳んでいた部分が褪色していて、それが裏にも及んでいるので、きものとして着るには無理と判断する。うまく接ぎ合わせて、上っ張りにはできるんじゃないかと考えるが、原稿を書かなくてはいけないので、結論を出さないまま中断する。

## 十月二十四日

原稿を書きながら、その休み時間にまた昨日の木綿のきものを取り出す。まずは解いたほうがいいと思い、晩御飯を食べた後、襟から解きにかかる。途中、これをすぐに上っ張りに仕立てずに、単衣のきものの型紙に使うことを思いつく。和裁の本を何冊か持っているが、人間の着るものは三十数年前に浴衣を一枚縫ったきりの超初心者としては、写真やイラストよりも現物を見ながらのほうが、わかりやすい。袖と襟をはずし、ふむふむと眺める。家に

い上げたい。

## 十月二十五日

風呂に入った後、唐突にきものを着たくなったので、縦縞の会津木綿に半幅帯を締めて、ぼーっとする。きものに着替えたものだから、出かけてしまうのではないかと、ネコがびっくりして部屋の隅でかちかちに固まってしまった。抱っこして、

「どこにも行かないよ、大丈夫だよ」

というと、安心したらしく抱っこされたそのままの格好で寝てしまった。赤ん坊を抱いているような姿のまま、ソファに座ってじっとしている。袖がちょうどハンモックみたいになって、ネコも気分がいいのか、ごろごろと喉を鳴らしていた。この分だったら家できものを着るのも大丈夫になったのかもと、期待した。

下には私が袖を縫ったうそつき襦袢を着たが、やはり襟元がうまく決まらない。ちょうど背縫いの部分が、U字形に襟に添うのではなく、逆Vの字、つまりVの角が首につくような形になってしまうのだ。何度直しても同じ状態で、理由がわからない。この間、別のうそつき襦袢を着たときも、うまく襟に添わなかったのだが、襦袢に問題があるのか、着方に問題があるのか、うそつき襦袢初心者としては首をかしげるばかりである。また木綿のきものに、この木綿の袖はちょっと分厚かったようで、袖がもこもこする。木綿の布で作るのだったら、袖は薄手のほうがなじんでいいようだ。

十月二十六日

昨日着た、うそつき襦袢を取り出して点検してみるに、やはり襟の張りがいまひとつである。差し込み式の襟芯を入れてみたが、やっぱり私の体型では襟が浮いてしまった。これが使えると、木綿の半襟をつけて襟芯だけを抜いて洗濯機で洗えるので、とても便利なのだが。

十月二十七日

夕方から新連載の打ち合わせ。今年の六月十九日もこの店で打ち合わせをしたのだが、実はそのとき、外ポケットに太いジッパーがついたショルダーバッグを持った女性が後ろを通った際に、金具で帯をひっかかれて、織糸がびろーんと出てしまった。たしかに私はカウンター席に座っていたし、背中から単衣帯の厚みがせり出ていたかもしれないが、せいぜい四、五センチだろう。後ろを通るときに狭い通路を大きなショルダーバッグをかけたまま、人に当てながら歩くのはどうかと思ったが、同時にきものを着てきた私が悪いのかしらと反省もしたのだ。きものを着たいのはやまやまだったが、再びのアクシデント発生を恐れて洋服で行くことにする。いつものチノパンにセーターではなく、これしかないジュンヤワタナベのジャケットとジル・サンダーのスカートのお出かけ用セットを着たが、久しぶりにジャケットを着たら、こっちのほうがきものよりも窮屈に感じられて面白かった。

十月二十八日

朝から本降りの雨。雨にも強いといわれる伊兵衛織に木綿の半幅帯。臙脂色の雨コートに雨草履で出かける。浅草駅に着いてから降りがひどくなる。お稽古が終わってふと足元を見

たら、色止めをしてもらったはずのコートから色が出て、足袋が赤く染まっている。替足袋に履き替えて外に出たら、朝方よりもひどい降りになっていた。予定では途中、買い物でもしようかと思っていたのだが、中止して脇目もふらずに帰る。家の近くはそれほど降りはひどくなかったが、やはり履き替えた足袋も赤く染まっていた。もしかしたらと調べてみたら、何ときものにも赤い色が染まっていた。ショックを受ける。とても気に入っているコートだが、二度もこうなっては雨コートの役目を果たさないので、残念だが交換してもらうしかないだろう。伊勢丹の呉服部に連絡をして、電話を切った後、汗取りをして袋になった大島の話をしようとして、ころっと忘れていたのに気付く。

### 十月二十九日

新しく出る麻雀雑誌の連載の打ち合わせが、隣町であった。相手は麻雀プロの若い男性で、私の麻雀仲間でもある。きものでびっくりさせるといけないので洋服で行く。帰り道、一昨日のことと合わせて考えて、やっぱりきものはいいなあと思う。

### 十月三十日

『小美代姐さん花乱万丈』の続編の取材のため、師匠のところに伺う。本当は伊兵衛織を着ようと思っていたのだが、雨コートの色が移ってしまったので、郡上紬にする。帯は添田敏子さんの「平家秋麗」と題がついた染帯。着た後に地味すぎるとちょっと感じたけれども、えいっとそのまま出かけてしまった。自分の頭の中に浮かんだコーディネートと、実際に着たときに、

「あれ?」
と首をかしげる回数が多くなった。これまでのコーディネートだと、どうしても沈むのである。といっても私の場合、背が低いのできものと帯のコントラストをつけすぎると、ただでさえ短いのにそれが分断されて、具合がよくない。襦袢や小物で明るい色を添えたほうがいいかと、着るときには帯揚げや帯締めの色を何種類か揃えておく。でも時間がないときには、適当に手近にあったのをしてしまうので、外出先で、
「あーあ」
となることも多い。
新たなコーディネートの楽しみが広がったと、前向きに考えることにしよう。やっぱりきものを着るのは楽しいから。

## 十月三十一日

伊勢丹に、雨コート、色移りしたきもの、足袋、袋になった大島、汗取りに出す単衣を持っていく。荷物が多いので洋服であるが、お出かけセットはワンセットしかないので、二十七日と同じである。特に冬場のお出かけ用スカートは、この一枚しかないので、五年前からフル稼働であるが、どこも何ともなくシルエットを保ってくれている。おととし、裾揚げがロックミシンになっているのが嫌で、裾をほどいてバイアステープでくるみ、手まつりし直したので、ますます愛着がわいている。
雨コートやきものは、先方は取りに来て下さるといったのだが、連日出かける用事があっ

て時間が決まらなかったので、用事のついでに立ち寄ることにしたのである。好きで買った雨コートをあきらめるのは、とても残念だった。担当の方々がみなさんものすごく深刻な顔をして、丁寧にあやまって下さる。足袋を買おうと思っていたら、新しい足袋をいただいてしまい恐縮した。


「十二月」

## 十一月九日のコーディネート

きもの　黒地の小紋。ろうけつ染めの切りばめ模様

帯　白地に花と松葉の柄の名古屋帯

帯揚げ　薄いピンク色

帯締め　煉瓦(れんが)色(いろ)の冠組(ゆるぎぐみ)

半襟　白の塩瀬

襦袢　折鶴と風車が織りだされた、ピンクとクリーム色のぼかし

足袋　白足袋

草履　ピンクの真綿の草履



愛用の道中着

# 十一月



## 十一月一日

書き下ろしの原稿が月末に渡せなかったので、ひたすら原稿を書く。きものが着たいなあと思いつつ、パソコンに向かってキーを叩く。こんなことなら仕事をはじめる前に、きものを着ておけばよかったと後悔する。仕事を中断してきものを着ると、そのまましゅーっとやる気が失せて、のんびりモードになるので、仕事をする前に着るに限るのである。

男性のきものの本を読んでいて、先月、男性は自分で半襟をつけるのだろうか、つけないのだったらちょっとずるいというようなことを書いたが、今日、続きを読んでいたら、自分で半襟を縫いつける人も何人かおられた。女性も面倒くさいだの何だのといわないで、見習

わなくてはいけません。

**十一月二日**

いつも着ている襦袢についている半襟が汚れたので、必死に洗う。全体が汚れるのならまだしも、半襟はほんの一部分、ライン状に汚れるだけだ。あと二回着たらまた洗わなくてはいけない。汚れとの格闘である。ふと思いついたが、半襟は一枚の布きれとして売られているが、ロール式のメートル売りってどうだろうか。三メートル巻きとか、五メートル巻きがあって、自分の使いよい長さにカットしてつける。洗える絹だとベスト。そうすれば汚れない無駄な面積が最低限になるではないか。私は絹の半襟を使っているので、汚れた部分とそうでない部分を眺めると、長さ約一メートル、幅約十三センチのうち、ほとんど汚れていない部分が、○千円分もあるなんてと思ってしまうのだ。好きな長さにカットできれば、腰ひもに近いほうの部分を無駄にしなくて済む。私は半襟をつける器具より、こっちのほうを先に売り出してもらいたい。

**十一月三日**

うそつき襦袢の半襟をはずし、三河芯をとりつけて半襟をつけ直す。これでふにゃふにゃした感じはなくなった。会津木綿に半幅帯で過ごす。足元は柄足袋。うそつきの木綿の袖は布の厚さを考えないと、着づらい。柄だけに目を奪われてはいけないとわかった。

**十一月四日**

お稽古日。九日、与志江先生の踊りの会に、小唄の会からも何人かゲスト参加することに

なった。私もそのうちの一人である。三味線で伴奏をするので、唄方の来られる時間帯に合わせて昼前に家を出る。郡上紬に木綿の半幅帯。この帯はインターネットで買ったのであるが、若い人向きなのでいろいろな帯結びができるように、長めになっていた。おばちゃんの腹まわりでも貝の口を締めるには長く、ぐるぐると巻いているうちに、まるで関取のまわしみたいになってしまった。まさにどすこい！　である。若い人のようにリボン結びなどしないから、せめてヤの字が結べるくらいに長さをカットしたほうがいいようだ。なんとなく胴回りのぶっといのが気になるので、上に羽織を着ていく。それでも胴回りが肥大していて、テレビで見た相撲部屋の親方のような姿になっているのではと怯える。おばちゃんにはなるべくすっきりした帯のほうがいいという現実を実感する。博多帯が軽くていちばんふさわしいのかも。献上柄もシンプルで好きだけど、博多織の名古屋帯も半幅帯も、面白い柄がたくさん増えてほしい。もう「あいうえ大きなお尻」でも「かきくけ困ったお尻」でも、やぶれかぶれで博多の半幅帯でいくか。でもまだそれで外を歩く勇気はない……。

## 十一月五日

たまたまテレビをつけたら、きものの古着ブームについて放送していた。大学や歌舞伎鑑賞にきものを着ている女性たちが映し出されていて、みんな自分なりの好みで着ていてかわいらしかった。大切に着てもらいたいものだ。

その番組では大手のきもののリサイクルチェーンを経営している、某メーカーの社長もインタビューに応えていて、これまでの呉服業界が潜在的なマーケットを無視してきたのだと話

していた。売り手のほうからすれば、どう売るかが問題なのだけれども、買う側からいうと、ひと括りにマーケットといわれると、ちょっとねという感じがする。売った後はどうしてくれるのという気分である。それでなくてもきものはポリエステルでない限り、誰かが手をかけてメンテナンスをしなくてはいけないのだから。古着が儲かる匂いがしてくると、雨後のたけのこみたいに古着を売る人が出てくる。隣町で今までそんなものを見たこともないのに、黒羽織ばかり二十枚ほどを、店頭にずらっと並べているのを見かけた。まだ開店していなかったが、閉まったシャッターに、きもの二千円均一と張り紙がしてある店もあった。きっと何年か後には、真似っこした店の大半はつぶれているだろう。このままだと刹那的に儲かればいい売りっぱなし商売、そして着捨てが横行する気がしてならない。

### 十一月六日

　長さがまちまちな半幅帯を出し、私に最適な長さはどのくらいかを調べようとしたが、書き下ろしの原稿四十枚分を明日までに渡さなくてはならないので、途中でやめる。どれもこれも中途半端で虚しい限りである。

### 十一月七日

　三味線の折れた糸巻きの修理ができているので、三味線屋さんまで取りにいく。本日は洋服である。十一月とは思えないほど気温が高く、途中、そこここできもの姿の人を見かける。祭り、イベントは別にして、これまでで見かけた人数がいちばん多いのではないだろうか。若い女性、年輩の女性合わせて、十三人目撃した。別にみなさんは徒党を組んでいたわけで

はない。ほとんどの人が帯付きだった。コートや羽織を着たら、汗だくだくになりそうな天気だった。
　無事、三味線も受け取り、洋服なのをいいことに、古着店をのぞいて見る。おととい、社長がテレビに出ていた、大手リサイクルショップだ。ところが店に入っても、そこにいるきもの姿の若い店員は、ただぼーっと突っ立っているだけで、
「いらっしゃいませ」
　のひとこともなし。だだっぴろい店舗ならまだしも、七、八人入ればいっぱいという狭さで、すぐ目の前を通っているのに、黙っているというのはどういう神経なのだろう。渋谷のマルキューの、あの若い店員さんたちは、全く雰囲気にそぐわない私が入っていっても、
「いらっしゃいませえ」
　とちゃんというぞ。
　ざっと中にある商品を見る。柄のかわいい羽織があったが、一五〇センチそこそこの私の身長でも丈がもうちょっと欲しい。短い羽織が流行った時期があるから、そのころの物なのだろうか。私のような昔の並寸だとサイズ的には問題ないだろうが、やはりバランスでいうと、古臭い感じは否めなかった。現代の背が高く、腕も長い女性はサイズを探すのが大変だろう。紬の道行コートは八千円。防臭加工済みと記してあった。何らかの処理をしないと匂うのだろうか。突っ立ったままの店員は、もちろん店を出るときも無言であった。リサイクルチェーンの社長は、マーケットがどうのこうのと力説していたが、商品を売る以前の問

題として、店員には最低限の接客マナーを教えたほうがいいのではないか。

十一月八日

何とか書き下ろし分も送ったので、本日は仕事は休みにする。これから怒濤の年末進行がはじまるので、のんびりできるのも、ここ二日くらいだ。明日のために小唄の会仕様の、ピンクのぼかしに風車と折鶴の地紋が織り出された襦袢に白襟をつける。

十一月九日

与志江先生の踊りの会で、浅草の雷中会館に行く。きものはずいぶん前に買った、黒地のろうけつの切りばめ*模様の小紋に、白地に花と松葉が飛んでいるような雰囲気の名古屋帯。夕方から雨が降るというので、防寒を兼ねて雨コートを着て出る。踊りの会は見たことがなかったけれども、楽しいものだった。お弟子さんがみな、それなりに楽しそうに踊っているのがまた楽しい。落語家さんも何人かいらっしゃるので、踊りの他に余興も盛りだくさんでとても面白かった。

十一月十日

とても寒くて雨が降っている。朝から仕事をする気が起きず、カレンダーを横目でにらみつつ、勝手に休みにする。下田直子さんの新刊、『きものｂａｇがほしい』（文化出版局）を眺める。帯、バッグ、鼻緒までかわいい刺繡がいっぱいで、見るだけで、

「いやーん、かわいい！」

である。私は下田さんのファンで編み物の本も刺繡の本も、ベビー物以外はみんな持って

いる。こういう本を見ていると、またまたやりたくなってくる。これからそんな時間がとれるのかとふと考える。来年の新連載のために、資料を読まなくてはならないのと、書き下ろしの推敲（すいこう）で正月休みはつぶれてしまうだろう。暇になったらやろうと楽しみにしていることが、どれだけあるだろう。今の世の中、お仕事が途切れなくあるのは本当にありがたいことだが、なるべく早く隠居したい身としては、隠居後の生活費も必要だし、実家のローンはまだあるしで、希望と現実はうまくかみ合わないのであった。

「着物の時間」の写真が掲載された、「クロワッサン」が届く。実物以上によく撮影していただいてありがたかったが、

「やっぱりプレーリードッグ体型だなあ」

と己の姿を見て、しみじみつぶやいた。

## 十一月十一日

お稽古日。郡上紬に板倉真理子さんの型絵染めの、星の柄の帯を締める。今日はお稽古が終わった後、今年の五月から三味線のお稽古をはじめた、元担当者のMさんと、彼女のきものを見に行くことになっている。彼女はとにかく呉服売り場というものに行ったことがないので、楽しみと緊張がいりまじっていたという。朝、情報番組で今日の占いを見ていたら、

「散財する日。百貨店には近寄らないこと」とあって、ぎょっとしたといっていた。

「とにかくどんなもんか、気軽に行けばいいわよ」

と伊勢丹に一緒に行く。新潟の紬やお正月用の小紋などがあったが、彼女は紬に興味を示

して、二反を選び出した。一反は太さの違う縞が反物の半分の幅で織り出されているもので、縞のわりには粋すぎず、品のいい感じがするもの。もう一反は甘い焦げ茶色の地色に、かすれた感じで葡萄唐草が織り出されているものだ。両方ともとてもよく似合っていた。葡萄唐草は縞の二倍以上の値段だったが、彼女はこちらに決めた。帯も六、七本を反物の上に置いて検討した結果、松竹梅を洒落た筆描きのようなタッチで織りだした、川島の洒落名古屋帯になった。とっても洒落た素敵な組み合わせである。

「仕立て上がってくるのが楽しみねえ」

と私もうれしくなって、手をぱちぱち叩いてしまった。きものは自分だけではなく、人が買っているのを見ているだけでも楽しくなる。自分が買っているみたいに、顔がほころんでくる。彼女がとても喜んでいて、私もそれ以上にうれしくなり、お茶を飲みながら興奮してきもののあれこれを話した。きものをたまにしか着ない彼女は、いざきものを着ようとすると、うまく着られないのだという。私も今年はこの仕事の事情で最低、週に一度は着て多少は慣れたが、たまーにしか着なかったときは、最長、一時間四十五分、かかったことがある。それも訪問着に袋帯ではなく、紬に名古屋帯でである。途中、茶を飲んで一服しなければ、体がもたないくらい、へとへとになった。出かける前にひと仕事といった具合だった。なので、

「慣れだから、大丈夫、大丈夫」

と慰めた。



11月11日
郡上紬に
板倉真理子さん作、
型絵染めの星柄の
名古屋帯



11月18日
後染めの
ろうけつ染めの
縞の紬に
ミンサーの半幅帯

右足が痛いので家に帰って足袋を脱いでみると、爪の横の皮が赤く剝けている。雨草履のドーム状のところにこすれたらしい。雨草履は二足持っていて、今日、履いたのは銀座の専門店で買った、お値段がいいほうなのだが、私にはちょっと足指部分の幅が狭く窮屈なのだ。一方、ウレタンの雨草履のほうは、幅がゆったりしているので、足指がドームに当たったりしない。ことごとくお上品なものは似合わないらしい。指先がおっぴろがった足ひれのような形の私の足には、ウレタンの雨草履のほうが履きやすい。幅のゆったりした小判形の雨草履はないものなのだろうか。それともこういうタイプもオーダーできるのだろうか。

　きものを着るときに、良家のお嬢様風、二号さん風、芸者さん風とイメージ付けをする人がいるようだ。私の場合は、昭和のおかあさんのイメージなのに、そのわりには針仕事もしないし、第一、３６５日、きものが続かなかったし、イメージ倒れもいいところである。しかし何とか昭和のおかあさんに近付こうと、糠味噌漬けをはじめた。ほとんどきもの生活とは関係ないが、いちおうこれで、気分を盛り上げようと私なりに頑張っているのである。昔懐かしい琺瑯の器、無農薬の糠も入手して、最初に大根を漬けてみた。

## 十一月十二日

　以前は、きものを着るとなると、ものすごく張り切って、帯や小物やいろいろと合わせてはうれしく悩んでいたが、最近は、全くそんなことがなくなった。前と同じきものを着ていても、平気になったし、小物合わせも悩まない。

「ま、こんなところでいいか」

と完璧を目指さなくなって、気持ちが楽になった。着る回数が多くなったので、そのたびに真剣に悩んでいたら、埒があかないのと、きものが私にとって特別なものではなくなってきたからかもしれない。コーディネートはどうしよう、どうしたらいいんだろうと、雑誌や本を見て勉強しようとしたが、今はものすごーくぬるい。今までは絶対にしなかった、縞のきものに大きな十字が並んでいる帯などを、締めてみようかなと思うようになった。誰が見ても問題がないコーディネートを目指していたが、今は、

「ちょっと、変かな？」

と思っても、自分なりの組み合わせで着てみたくなった。

それともきものを着ても、肩が凝らなくなってきた。きっと前は、

「きものを着ているのだから」

と無意識のうちに気負っていたのだろう。今年は本当のきもの生活のための準備段階なのだ。来年からはもっと気楽に着られそうでうれしい。

糠味噌に漬けた捨て漬けの大根を取り出して食べてみた。めっちゃくちゃおいしいので、びっくり。きもの、半幅帯、割烹着、糠漬けで昭和のおかあさんに一歩近付けたかもしれない。この調子で頑張ろう。

## 十一月十三日

昼食後、空になったお皿類を重ねて片づけようとしたら手が滑り、一番上に載せたサラダの皿がテーブルの上に落下。そこにあったのは、運悪くきものや帯を撮影したポラロイド写

真のファイルだった。

「ぎゃっ」

と仰天して被害が広がらないようにと、そっと写真を取り除いたりしてみたが、ファイルの底にドレッシングがまわってしまい、ほとんどが見事に胡麻ドレッシング和えになってしまった。拭いても油がついているので、きれいに取れない。泣く泣くすべてを捨てる。ファイルを作らなくても、すべてが見渡せるような状況にすればいいのだ。整理整頓しかない。

## 十一月十四日

『小美代姐さん〜』の続編取材で師匠のお宅に伺う。途中、新宿駅の地下通路で、仕事の途中のファンの女性に声をかけてもらって恐縮する。彼女は高校生のときから読んでくださっているのだそうだ。

「本を持っていれば、サインしていただけるのに」

と彼女は残念そうだった。取材があるのでそのまま別れてしまったが、あとでお名前も聞かなかったことを悔やんだ。声をかけていただいて、うれしかった。

本日はこのところずっと着続けている郡上紬のきものに、半幅帯。道中着を着ていく。上に羽織れる季節になると、すぐ手抜きをして半幅帯になる。担当の編集者二人に、

「今日のおきものは何ですか」

と聞かれたので、

「前のときと同じよ」


小美代姐さんこと師匠に取材。写真をいろいろ見せていただく

というと、
「えっ、帯でそんなに感じが変わるんですか」
と驚いていた。二人には別々にたずねられたのに、同じリアクションだったので面白い。きものはこういうところに楽しみがある。似合わないこともあるのだが、目立つ柄のきものを選ばないのには、帯次第でどうにでもなるからという理由もある。真っ先に柄に目がいくきものだと、どうしても帯で変化がつけにくい。だから枚数が少なくていいと思うのに、気が付くと無地や縞や格子の、ねえやのきものばかりになっている。でも今年、最低、一週間に一度でも着続けたおかげで、自分にとって着心地のいいきものがわかったので、少しずつ整理していくつもりだ。

**十一月十五日**

世の中、年金問題が話題である。私も他人事ではない。今の若い人よりはましだろうが、ほとんどもらえないと思っているので、これから先のことを考えなくてはならない。ちゃんとした人は、二十代から考えて

いるのだろうが、私は五十歳を目前にして、やっとこれからのことを考え始めている。スタートがめっちゃくちゃ遅い。きもの生活を考えると、単衣が縫えれば、相当に経費節約になる。洋服は家で着ているチノパンツの膝が出て、修復不可能になっているので、適当な大きさに切って掃除用の布に回して、損失補塡はしない。このまま行くと、おのずと洋服は減っていき、きものが残るという状態である。この先、体型も似合うものも変わってくるだろうし、洋服を買うのはしばらくお休みだ。

きものハンガーにかけておいた道中着を見たら、右脇の裾のところが汚れていた。一瞬、ぎょっとする。あれこれ考えた結果、位置からして電車の中でシートが汚れているのに気が付かずに座ってしまったらしい。すぐに手入れをしてもらおうかと思ったが、そのままにしてしまった。

## 十一月十六日

買っておいたウールの反物を出して、縫い始める。自分で縫うものだし、これから背も縮むばかりで伸びないし、人に譲ることはありえないので、繰り越し揚げ*はなしの簡単な縫い方にした。ただ仕事の合間の時間を使うから、丸一日、集中して縫えないのが辛い。今日は裁つところから背縫い、両袖まで仕上げた。家にある和裁の本をあれこれ見比べてみると、身丈の裁ち寸法の割り出し法から違っていたりする。身長プラス二センチでいいという本もあれば、縫い詰まり分を加えている本もある。繰り越し揚げをしないこともあり、少しでも身丈が長いほうがいいかもと思い、縫い詰まり分を加えた寸法で裁った。この反物はもともと

と練習用にと買っておいた、ウールに四パーセントのナイロンが入ったものだが、どうも手触りがよくない。手荒く扱っても皺になりにくいし、和裁初心者にはありがたいが、正直いって縫っていてもあまり満足感はない。これが仕立て上がったら、シルクウールにとりかかろう。

ふと江戸東京博物館で開催されている、「東京流行生活展」が今日までだったことに気が付く。会期はほぼ二ヶ月あったはずなのに、本も買い、まだ大丈夫、行こう、行こうと思いつつ忘れていた……。いつもこんな調子で、展覧会には行きそびれてしまう。

## 十一月十七日

十月分のこの書き下ろしの原稿を渡すために、隣町まで行く。四角柄の羽織に郡上紬、半幅帯。ほとんど無地に見える柄足袋に、辛子色の本天の太い鼻緒のついた桐草履。うっかり半袖Tシャツを下に着るのを忘れたら、帰ったら喉が赤くなっていた。うーむ、恐るべき喉赤センサーである。明日はちゃんと二の腕を覆うように忘れずに半袖Tシャツを着て行こう。

## 十一月十八日

お稽古日。ずっと前に買った、紬にろうけつで縦縞を描いたきものを着ていく。家に帰ったら、裾回しのワイン色がすれて足袋に色が移っていた。どうも赤系統の色と私は相性が悪い。こういう色合いの裾回しのきものを着るときには、足袋カバーを履いたほうがよかったのだなと反省する。夕方からは狂言を観にいく。茂山千作さんのファンクラブに入っていて、浅茅与志江先生のところで踊りを習いはじめた、元担当編集者のHさんが誘ってくれたのだ。

能は絶対に寝てしまうし、わけがわからんので、関心はないのだが、狂言は前々から観たかった。ずいぶん前、能楽師のご主人をもつ女性に、

「狂言だけ集めた催しってないんですか」

と聞いたら、

「そんなものはありません」

ときっぱりいわれたので、あきらめていたのだが、ちゃんと催されていた。こういう会が開かれるのは最近になってからなのかもしれない。とにかくはじめてなのでドレスコードが全くわからず、いちおう柔らか物だったら無難だろうと、今年のはじめにイタリアンレストランでの結婚披露宴に呼ばれたときに着たのと同じ、七宝（しっぽう）つなぎの小紋に、綴（つづれ）の名古屋帯にした。コートは松皮菱（まつかわびし）の柄。

お勤め帰りの若い女性も多く、そんなにあらたまらないカジュアルな雰囲気だった。もっときもの人口の密度が濃いかと思ったが、そうでもない。平日ではなくて週末だったら、また違うのかもしれない。ご一緒したイラストレーターの平野恵理子さんは、繭色（まゆいろ）のきれいな節のある紬に、洒落た紬の染帯。*切りビロードの唐草柄の黒いコートもとっても素敵だった。冬場に白っぽいざっくりした紬もお洒落でいいなあと思ったら、田島拓雄さんの作だと聞いて、触らせてもらおうと出した手を思わず引っ込めてしまった。やっぱり味わいのある紬はいい。それからHさんに麻布十番（あざぶじゅうばん）にあるイタリアンレストランに連れていっていただき、食事をしながらきものや小唄や狂言の話をした。踊りのときは下着のラインが出ないように、

晒(さらし)の裾除けを東スカートの下に穿くそうだ。
「湯文字(ゆもじ)のようなものですか」
　と聞いたら、それよりも丈が少し長く、上部の胴に巻きつける部分は半幅、丈は二幅をつなげたもので、総丈は二幅半になる。市販されてないので自分で縫ったといっていた。その晒の裾除けで、ぎゅっと下半身を締めて体のラインを整えるという。
「はあ、なるほど」
　いつも無防備な「あいうえ大きなお尻、かきくけ困ったお尻」の私としては、耳よりな情報だった。晒は安いときにまとめ買いしたものがあるので、それで縫ってみようかしらと考える。ああ、もう、考えるばかりで一向に手が進まない！　平野さんはふだん、うそつきを愛用しているので、
「襟の首の後ろのところが、V状態になって、襟首をつんつんするんですけど」
　と相談したら、
「はい、そうなりますよ」
　ときっぱり答えていただいた。
「私など、VどころじゃなくてWになっていることもあります」
　ふたつの角が首筋をつんつんするのだそうだが、家にいるから、ま、いいかとそのままにしているという。そういうものなのだとわかって納得した。
　平野さんが地下鉄で目撃した、きものを着た若い男の子の話を興味津々で聞く。細い縞の

きもので後ろに煙草入れまでさして、とっても格好がいいので、もう少しで声をかけそうになったそうだ。

「まあ、いいわねえ」

思わずいってしまう。そういう見目麗しいきもの姿の若い男の子が見られるなんてうらやましい。私もこれまで年輩の人は何人か見かけたことはあるが、やはり洋服よりも格好よくみえる。しかし女性と同じで気負いが見える人はちょっと辛い。「素敵」のすの字が喉まで出かかってぐーっと腹の中に下がってしまうのだ。やっぱり気負いもなく、さらりとふだん着として着慣れたおじいさんは素敵だ。女性も男性も生々しいうちは、どうしても気負いが出てしまうものなのかもしれない。平野さんから「東京流行生活展」のこともうかがい、話が尽きることがなく、とても楽しかった。

**十一月十九日**

明日は連載の締切り日なので、原稿を推敲して送ってから、ウールを縫う。今日は脇縫いの縫い代を一目落としで縫いつけるのと、縫い代のくけで終始する。やってもやっても終わらない。途中で投げ出しそうになるが、休み休み延々とくける。

**十一月二十日**

今年になってはじまった、連載の担当者の方々と、南青山で昼食。朝から雨の降りがきついのできものはやめにして、毎度おなじみのジュンヤワタナベのジャケットと、ジル・サンダーのスカートのお出かけセットにする。セーターはついこの間、新しくボトルネックの黒

い薄手の物を通販で買ったので、それを着ていった。

十一月二十一日

終日仕事。休憩のときに半幅帯を置いてある棚から、適当に出して長さを測ってみると、市販の博多帯はだいたい同じだが、余り布で作ってもらった半幅帯の長さが、まちまちなのに気が付く。短いものは羽織の下や家で締めればいいけれど、全部点検して、分類する必要が出てきた。

十一月二十二日

夕方まで仕事をして、夕食後、ウールのきもののくけの続き。私は集中してやりたいのに、ネコが、

「あーん、あーん」

と甘えて鳴き、縫いかけのきものの上にちんまりと座って、悲しげな顔でじーっと見つめているので、途中でやめて抱っこしてやる。夕食後、私に抱っこしてもらいながらうとうと寝るのが、日課になっているのだ。縫い物はネコを抱っこしながらできないのが悲しい。

十一月二十三日

ネコが昼寝している時間帯を見計らって、またまたくけ。仕事もしなくてはいけないし、結局、一日、一時間くらいしか縫い物ができない。

十一月二十四日

明日は朝から雨らしい。いちおう雨コート、伊兵衛織の格子のきものと半幅帯を出してお

いたが、やっぱりネックは足元だ。足袋カバーも準備したが、文字通りこれでカバーできるかどうか。

## 十一月二十五日

朝から雨が強烈に斜めに降り、だんだんひどくなるという予報だったので、お稽古は洋服で行く。やはりきもののときは足元がどうしても不安になる。みなさんに、

「今日は群さんは大変だなって思ったの」

「どうしたのかしらと気になって」

と心配していただき、恐縮してしまった。ひどい降りでもナイロン足袋の上に足袋カバーを履き、雨用のウレタン草履を履き、替足袋と足袋カバーを持って出れば大丈夫だろうか。それとも雨コートに足元だけ、昔の女学生風にブーツを履くとか。襟元とのバランスが悪ければショールやマフラーで隠す……。以前、きものにもんぺを履き、雨コートを着るという方法を教えていただいたが、雨草履や爪革(つまかわ)でカバーできない、足袋の甲とかかとのところがじわじわと濡(ぬ)れてくるのはどうしたらいいのか。そこを覆わない限り、足袋は必ず濡れることになる。車を運転する人は、そんな心配をしなくても、きもので出かけられてうらやましい。

レインコートを着ていても、スカートが雨で濡れたうえに正座をしたので、膝の部分がぽっこりと出てしまった。カシミアのバイアス裁ちのスカートなので、めっちゃくちゃやばいかもと怯える。

## 十一月二十六日

夜、友人の女性二人と男性一人であんこう鍋。事前に聞いた話によると、店の小上がりのスペースが狭いのと、同席する男性と女性一人の体格が立派なので、ぴらぴらした袖のものを着ないほうがいいと考えて、洋服で行く。いつものお出かけセットだが、昨日穿いたスカートの膝が、アイロンをかけて吊るしていたのに、まだ出ている。クリーニングに出せば復元できるかもしれないが、もしこのままだったら着用の限界か。このスカートがだめになったら、お出かけ用のスカートは皆無になる。どうしよう。あんこう鍋はもちろん、その他の料理もとってもおいしくて、スカートのことはころっと忘れて、幸せな気持ちになる。

## 十一月二十七日

更年期ということもあって、日常生活には支障はないが、いまひとつぱっとしないときがある。そういうときはきものを着るにはちょっとしんどい気分だ。きものが着たいと思うのは、健康な証拠だとあらためて感じた。昨日のあんこう鍋のせいか、肌だけはつるっつるになっていてうれしかった。

## 十一月二十八日

今月の締切りはなんとか今日で終わり。ネコが寝ている間にウールのきものの続きを縫う。だんだん襟縫いに近付いてくるので、縫いながらもそれを思うとどきどきしてくる。

## 十一月二十九日

十二月に入ると忙しくなるので、なんとか今月中に仕上げなければと、必死で縫って縫っ

て縫いまくる。でもやっぱり手触りがうれしくない。収まりが悪いというか、手になじまないというか。これは練習用だと割り切ってとにかく縫う。鬼門の襟つけは心配なので、本縫いに入る前にしつけをかけて止めておいた。緊張しつつ、夜、十時半に何とか縫い上がる。

「はあ〜」

やったーっという達成感より、脱力感のほうが勝っていた。頭にめいっぱい血が詰まっている感じがする。それでも羽織ってみると、

「おお、なんとか形になってるじゃないか」

とうれしくなる。明日、仕上げのアイロンをかけることにしよう。

## 十一月三十日

ウールのきものを羽織ってみる。和裁ができる人からみれば、

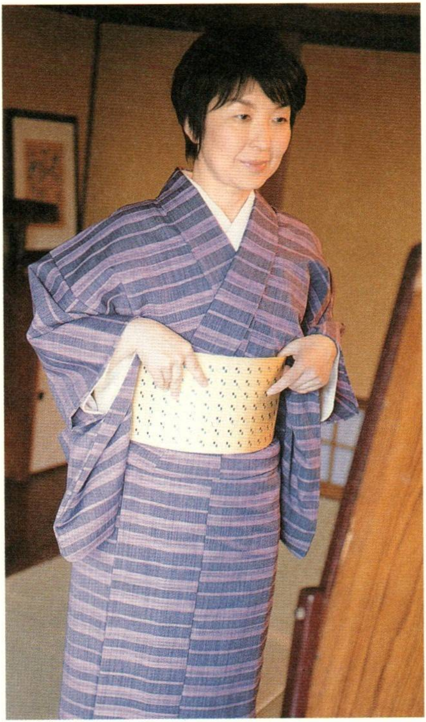
「どひゃあ」

とびっくりするようなところがそこここにあるだろうし、自分でも、

「ここが、ちょっと。ああっ、ここも」

と欠点ばかりが目立つ。やはり曲線部分、袖の丸みや襟ぐりをきれいに仕上げるのが難しかった。が、着てみると意外とわからないということも知った。昔の人は今の人よりは器用だったかもしれないが、家族全員のものを縫うのに、商売として仕立てをしている人のように、丁寧に縫っていたわけではないだろう。きものはサイズもフレキシブルだが、仕立てもそんなにきっちりしてなくても大丈夫ということがわかった。よっぽどひどいのなら別だが、

皺が寄るのは当たり前なので、単衣のふだん着は、あらが目立たないのでよかった。はじめて（正確には中学生のときに家庭科で浴衣を縫った経験はあるが）単衣のきものを縫ってみてわかったが、絶対に自分には袷のきものは縫えない。でも何とか単衣が縫えたので、これから何枚か縫っていれば、ワンマイルのふだん着なら何とかなりそうで、将来に明るい展望が見えてきた。



愛猫しいちゃんが
寝ている隙をねらって、
毎日懸命に縫った
ウールのきもの、ついに完成！


「十二月」

十二月三日のコーディネート

きもの　大きな格子の郡上紬
帯　エジプト柄の半幅帯
半襟　クリーム色
襦袢　明るい黄土色の地に、動物たちが麻雀をしている柄
足袋　白足袋
草履　酒袋の草履
バッグ　茶色のトートバッグ
コート　化繊のベルベットコート

撮影協力　カフェ・ド・パルファン



インターネットで購入した室内履き

# 十二月




## 十二月一日

単衣のきものが何とかなりそうだとなると、あとは懸案の半幅帯である。なんだか年の後半は半幅帯の悩みが勃発し、それのみで過ごしてきたような気がする。自分のなかで帯幅とか地の厚さとかはわかったが、それでもいまひとつの気分だった。家にある本をひっぱりだして見たら、*吉弥結びという結び方が載っていた。見た目はヤの字とほぼ同じだが、帯の裏側が出る部分が違っている。試しに結んでみたら、今まで締めていたヤの字よりもボリュームが出て、私の尻の大きさとバランスがいい。博多織の半幅帯はとっても軽くて締めやすいが、ボリュームには欠ける。しかしこの結び方だと、ふっくらするので、いい感じになるのだ。

れば、バランス等いろいろおありでしょうが、私としては大収穫だった。

十二月二日

ずいぶん前から女性誌は買わないから、どんなものが流行なのか、さっぱりわからないけれど、以前は、雑誌のページにそっくりな格好をした女性がたくさんいた。きっと今でもそうなのだろう。お金がある人は雑誌に紹介されている服をそのまま買うのだろうし、そうではない人は似たものを安く買って着ている。そうするとそれなりに、流行の格好をしていると見えてしまう。しかしきものはそうはいかない。雑誌で見て、同じものをといっても無理だから、コーディネートのマニュアルがあるようで実はない。だから着ている本人の中身がよくわかるのだ。

洋服でいるときはわからないが、その人が選んだきものや帯を見ると、

「へえ」

と意外に思うことも多い。ぱきぱきしているように見える人が、意外にお嬢ちゃん趣味だったり、お嬢ちゃん風な人が、意外にそうではないきものを選んだり。

十二月三日

お稽古日。本来ならば昨日なのだが、師匠が「春日会」の慈善会に出演なさるので、本日に振り替えられた。郡上紬に、エジプト柄の半幅帯。手入れを頼むのをやめた道中着を着て

いく。ちょうど右脇だとバッグを右手に提げれば隠れるので、シーズン中に左側も汚れたら手入れをしてもらうが、そうでなかったら、このままごまかして着てしまおうとケチくさく考える。姉弟子のSさんがお母様のものだという、素敵な縞のきものを着ていらした。襦袢は白地に赤の柄が飛んだもの。お歳をいっては失礼かもしれないが、八十歳近い方なのである。二十歳はお若く見えるし、きもののコーディネートもとても参考になる。私が地味だといわれるわけがよくわかった。京都風のはんなりではなく、東京風の女らしさを出す方法もあるのだ。まだまだ修行が足りない。

帰りに喉赤対策のため、きものの下に着る、保温、放湿効果があるというババシャツを買いに、デパートに行く。半袖だと本当に二の腕までの長さしかないので、防寒としてはできれば手を動かしたときに見えないぎりぎりの、肘（ひじ）あたりまで袖があるほうがいいので、それを探しにいったのである。「ワコール」製で目指すものが見つかり品物を受け取るとき、若い店員さんが、

「きもの、かっこいいですねえ。着付けもご自分でなさるんですか」

といわれた。私は子供のときから誉められ慣れていないので、そういわれるとあせってしまい、ついつい腰がエビのように曲がってしまって、

「え、あの、その、はい、自分で着ます。あ、ありがとうございます。今日はあの、お稽古だったんで……」

としどろもどろになって退散する。帯付きじゃない季節は、半幅帯を締めていても、でか

いお尻が羽織やコートで隠れて、あらが見えずにありがたい。

**十二月四日**

本来ならば、和裁というものは下着から順番にはじめて、きものにたどりつくのだろうが、私の場合、ウールのきものの後は、うそつき襦袢を縫おうかしらと考えはじめた。順番がめちゃくちゃである。襦袢もきものも前の打ち合わせ分がゆったりととってあるのが好きなのだが、私の手持ちのうそつきの既製品は、いまひとつ物足りないのである。和裁の本を取りだして、また眺める。晒もあるし、袖は端ぎれで作ればいいし、別に裾除けと柄が揃ってなくても、礼装じゃなかったら関係ないし。しかし年末までにできるのだろうか。

ＮＨＫの「おしゃれ工房」で、アンティーク着物の着付けをしていた。古着を買い揃えている人にとっては、袖丈がまちまちなために、襦袢の袖丈が問題になるようだが、番組では、単衣や夏物ではそういう着方があるが、袷のきものでも、いわゆる一般的な袖のある襦袢ではなく、筒袖の半襦袢で済ませていた。

「こういう手もあったか」

と思いもかけぬ攻撃に感心する。確かに気兼ねなく、どんな袖丈のきものでも着られるだろう。面倒だから着なくなるよりも、簡便な着方できものを着る人が増えたほうがいいのかもしれないが、それによって本来のきものを着る楽しみが、ひとつずつ減ってしまうのも事実だ。きものベルトを使えば、伊達締めの柄を選ぶ楽しみがなくなるし、袷のきものの下着も、半襦袢だけで済ませてしまうと、襦袢の柄は楽しめない。私はそれぞれの用途に応じて、

自分ができる範囲で、いちばん良質のきものや帯を持ちたいと考えている。きものが地味な分、帯には凝りたいし、それ以上に表立って見えない部分、襦袢、羽裏、コート裏などに気を遣いたい。それが私の楽しみ方だ。

**十二月五日**

四十九歳の誕生日である。

「しじゅうくさいか」

などと下らないことをいいながら、家で過ごす。今年の自分へのプレゼントは、家できものを着るときの室内履きだ。スリッパだと格好悪いので、何かないかと探していたら、インターネットの履物店でフェルト底の上履きを見つけたのだ。最初は楽屋履きがいいのではと注文したら、わざわざお店の方が電話をかけてきて親切に用途を聞いてくださり、こちらのほうを勧めてくださった。鼻緒もおまかせしたら、素敵なのをすげてくれて、このまま外に出たいくらいだ。

**十二月六日**

バザーに出すきものを選ぶ。十数年前に買った刺繍が上前に入った、ワイン色の紬の付下げと、緑色の地の扇面の袋帯、仕立て直しの紬、派手になった絞りの半襟などを送る。着てもらえるにしろ、何かにリフォームされるにしろ、うちでこのまましまっておかれるよりはずっとましだろう。三十代に買った物には、いろいろと失敗がある。どういうわけだかきものや帯を前にすると、頭にかーっと血がのぼってきて、くらくらしたりしていた。よーく考

えずに、あったほうがいいかも程度の考えで買ってしまった。その失敗があるからこそ、今のきもの選びに役に立っている。やはり授業料を払わないと身に付かないようになっているのだろう。

## 十二月七日

ずいぶん前に生洗いに出した、男物の千鳥絞りの襦袢を、ふだん着用におろそうかなと思って着てみたら、どうも丈が短い。丈を測ってみたら五センチ短くなっている。袖丈は一センチとちょっと短い。裄（ゆき）は変化なし。丈のみが寸詰まったらしい。丈が直せるのかと見てみたが、身頃は内揚げがしてあるので丈は出るが、褄下（つました）のたて襟の部分がぎりぎりの丈しかないので、出すことができない。何かいい方法があるのだろうか。切って二部式にするという手はあるけれど。

## 十二月八日

仕事をしながら、このきものの書き下ろしもあと三週間くらいかとしみじみする。何と一年の経つのが早いことか。今年の一月を思い出すと、我ながらとても緊張していたようだ。肩が凝ったのも肩に力が入っていたのだろうし、ウールのきものがきもの用の生地ではなく、洋服の布地を仕立てたきものだったことにもよるだろう。暖かい分、洋服生地のきものは重い。数年前にきもの姿で撮った写真を見たら、きっちきちに着ている。今は適当にしているが、それだけきものを着るのに緊張していたのだ。自分がきものを着ていることを意識せずに着られ、また楽に着られるようになるのは、いつのことだろうか。それともやっぱり、洋

服の簡便さを知っている体としては、そこまでには至らないのだろうか。まだまだ実験、経験が必要だ。

## 十二月九日

お稽古日。先週と同じ郡上紬に、厚手木綿の半幅帯を締める。どうも冬場はとっかえひっかえ着るというよりも、着慣れたものに手を通してしまう。毎度おなじみの道中着を着て、足元は蓑虫（みのむし）の鼻緒の草履。あと二回でいちおう任務としての、きものでのお稽古は終わり。肘丈のババシャツの威力はすごかった。暖かく喉が全く赤くならず。やはり私の二の腕はセンサーだった。真綿の草履は本当に履きやすい。履きづらい草履だと、腰痛持ちでない私でも、腰がつっぱったような感じになるのだが、これだとどんなに歩いても足が疲れないし、もちろん腰も何ともない。歩いたときのクッション性の問題なのだろう。若い人は体力があるから体の回復力もあるし、多少の無理もきくけれども、やっぱりおばちゃんには、草履が重いとか、履きづらいなど、そういうことがひとつひとつ、体にこたえるのだ。靴も同じだけれど、履きやすいものをつい履いてしまいがちだ。他の真綿でない草履の出番がだんだん少なくなってきている。その草履たちも履いてあげないとかわいそうなのだが。心情的には革ではなくて、畳表や下駄を履きたいのだが、この真綿草履の履き心地は捨てがたい。

## 十二月十日

買っておいたシルクウールの反物、晒、端ぎれなどを出して、じっと見つめる。こんなことをしているうちに、また原稿を書かなくてはならない日々が迫ってきた。

## 十二月十一日

来年出版される、二次文庫の打ち合わせで、隣町の喫茶店まで行く。雨が本降りなので洋服にする。

## 十二月十二日

古着のきもの、手頃な値段のウールや木綿のきものがブームになり、銘仙(めいせん)が注目されるようになったのは、若い人たちのおかげである。若い頃に大島を買っていた私は、最近になって木綿のきものやウールの反物を買っている。多くの人が針を持つのが苦手なようだが、そんななかでも縫い物をしたり、少しでも頭と自分の手を使って、何とかしようとしている若い人を見ると、

「何ていい子なんでしょう」

と抱きしめて、頭を撫(な)でてあげたくなるくらいだ。まだまだ世の中、捨てたものではない。これからは生活を大切にしようとする人と、ただ簡便なほうへ流れる人と、二派に分かれていくのだろう。

私が二十代のころに、ふだんに着るきものを買おうと思っても、楽しめる手頃な値段のものなどほとんどなかった。あったとしても今とは比べ物にならないくらいの、安っぽいポリエステルだったし、ウールも多少はあったが、おばあちゃんが着るような柄か、かわいい花柄ばかりで、ちょうどいいものもない。だから他の物を買うのを全部我慢して、気に入った大島や黄八丈(きはちじょう)に全財産を投入するしかなかった。私が若い頃に今のような状況だったら、も

っと日常的に楽しめたのにと残念だ。

## 十二月十三日

きものが好きといっても、いろいろなタイプの人がいる。気に入ったものを少しでも長く着るために、質のいいものを買って、染め直し、繰りまわして着るつもりの人。自分の財力を誇示するためと考えている人。先のことは考えず、着捨てるつもりの人。安ければいいという人もいる。いろいろな考えの人が、それなりに買えるようなシステムになればいいとは思う。でも何でもそうかもしれないけれど、少しは自分に課するものがないと、人としても女性としても進歩しないのでは。あまりに楽ちんに流れるのも考え物だ。例をあげれば、これまで半襟を自分の手で縫い続けてきた年輩の人が、のちに面倒くさいというのと、何もしない若い女性が、のっけから面倒くさいというのとは根本的に違う。そういうことである。

## 十二月十四日

仕事の合間に、三味線袋を縫うつもりで買っておいた会津木綿の端ぎれで前掛けを縫う。繻子(しゅす)の端ぎれも三味線袋に縫われるのを待っているのだが、見ないようにして前掛け制作にとりかかる。編物をしていたときは、かぎ針、編棒を持たない日はなかったけれど、今は針を持たないと何か忘れているような気がするようになった。針を指にさして何度も流血していたのに、慣れたのか最近ではそんなこともとても少なくなってきた。そういえばモヘアで編んだかぎ針編のショールもあった。ワンマイル用にあのショールもこれから活躍することだろう。

## 十二月十五日

前から気になっていたのだが、保温、放湿効果のある防寒シャツを肌襦袢がわりに下に着て、その上に長襦袢を着ると、どうも襟の収まりが悪い。どんどん襟のV字が下に下がってきて、極道の妻風になってしまう。着替えるときに調べると、襦袢の襟を胸を覆うように打ち合わせていても、着ているうちに打ち合わせがずれて、体の中心に寄ってくる。つまり山の頂点にあったものが、裾野（すその）にずり落ちてくるのである。別に私のは自慢するようなチョモランマ級の山ではなく、そのへんのハイキングコース程度の高さしかないが、それでもずり落ちる。自然素材ではないのが影響しているようだ。ためしに防寒シャツの上に、薄手の綿のシャツを着てみたら、極道の妻になった。次に夏場に愛用していた木綿でできた汗取りを着て、襦袢、きものと着てみたら、襟元がちゃんと安定し続けていた。

いちばん下に肘丈のブレスサーモシャツ、その上に汗取り、襦袢という段取りが、私の体型には都合がいい。ただしウエストまわりはどすこいである。晒の肌襦袢は持っていないけれども、それでもいいかもしれない。うそつき襦袢を縫う時間ができたら、それも試してみたい。

## 十二月十六日

お稽古日。北風が強いものの、偽物（にせもの）ベルベットコートを着て外に出ると、体がほかほかと暖かかったので、そのまま出かける。下着はきのう発見した、V字が下に下がってこないセット。きものは秋冬に着倒した感のある、縞の郡上紬にエジプト柄の半幅帯を吉弥結びにし

て帯締めをした。姉弟子のSさんもきものでいらしていた。コートを脱いだら、Sさんの帯締めの片方がはずれてしまった。私もコートを脱いだときに、はさみこんでいた帯締めが、はずれてしまうことがある。それを見た師匠が、

「それ、いただきね」

という。

「えっ、何がですか？」

Sさんと私が何事かと目を丸くしていると、花柳界（浅草だけかもしれない）では、帯締めが何かの拍子でそういうふうになったときには、好きな人か旦那さんができるというのだそうである。そして他の人がそうなっているのを目撃したときに、すかさず「いただきね」というと、その幸運が自分のものになるという。

「へえ」

へえ〜ボタンを百回くらい押した気分であった。帯締めの片方がだらりとなるのは、だらしなく見えてしまうものだが、それをそのようにかわいらしくいい伝えていたのだろう。マイナスのことをプラスに転じて、恥をかかせないようにする知恵なのだ。

家に帰り昼食を食べたとたん、ものすごい悪寒に襲われる。背中がぞくぞくするし頭痛もしてきた。やはり甘くみないで首筋をガードするショールかマフラーが必要だったと後悔する。首にスカーフを巻き、セーターを一枚上に着込んで、とにかく水分を補給し続ける。ソファに座っているときも、ずっと湯たんぽの上に足をのせて、夕食は抜き。梅干しを二個と、

まだそれでも物足りなかったので、梅エキスを大豆粒ふたつ分くらい舐(な)める。十一時前にスカーフを首に巻いたまま寝る。冬場はきもののときの開いた首筋を侮(あなど)ってはいけないことが、よーくわかった。五分袖のババシャツのおかげか、喉は全く赤くなっていなかった。

## 十二月十七日

見事に風邪は退散していた。絶食と梅干し攻撃が効いたらしく、いつになくすっきりとした寝起きであった。それでも念のため、朝は味噌汁のみ、昼、夜はお粥(かゆ)に梅干しで済ます。年々、太り気味の身としては、これで少しは痩(や)せたかと思ったが、たいして変わらなかった。

## 十二月十八日

隣町のフレンチレストランで、昼食を食べながら打ち合わせがあるので、きもので行く。風が多少強かったが、帯付きではない季節だと、裾の翻(ひるがえ)りがひどくなくていい。縞の郡上紬にエジプト柄の半幅帯を貝の口に結び、四角い柄の羽織。薄茶の柄足袋に濃い臙脂色と黒の玉虫の鼻緒の桐草履。襟元は今年のはじめに愛用していた、友人からもらったルイ・ヴィトンの大判スカーフ。カシミヤのショールもあるのだが、あまりにたっぷりしていて、私のように背が低いと、ショールが歩いているように見える。ぼってりしていなくて、薄手の大判の四角いスカーフを四分の一に折りたたんで使い、襟元をブローチで止めると、背の低い私にはとても使いやすい。たっぷりしている厚手の暖かいショールは、きものの上にコートがわりにまとったほうが、私の体型にはすっきり見えるようだ。

## 十二月十九日

きもの雑誌、女性誌などは特にそうだが、いまだにどうして、きもの＝京都なのか。確かに京都のああいう街並みには、華やかな柄のきものはぴったりくるが、柔らか物ではなく紬のきものが好きな私は、きもの＝京都という感覚がほとんどない。以前、きものの本を出したときに、東京友禅と書いたら、校正者から「これは何ですか」とチェックが入ってびっくりしたことがあった。たまたまその人が知らなかっただけかもしれないが、きものの雑誌を出している出版社でさえ、そういう有様なのである。うちの母親が若い頃、東京友禅の黒留袖を持っていたが、他の黒留袖のようにごてごてしていなくて、あっさりした柄の色合いが子供心にとても好きだった。

それに、きもの＝京都は、雰囲気としてはわかるけれども、具体的に京都できもので過ごしている一般の女の人の像が浮かんでこない。取り上げられるのも、舞妓、芸妓さんや料亭の女将さんなど、玄人がほとんどで、きもので生活をしている一般の京都の女の人が、どういうきものを着ているのかいまだに像が結べない。京都ときものって、女の人を雰囲気で丸め込んでしまう、摩訶不思議な図式なのである。

私が子供のときには、まだきもの姿の女の人がたくさんいたので、東京の市井の女の人のきもの姿のイメージはだいたいわかる。ふだん着はウールか銘仙、桐生お召で、入学式や卒業式のときは色無地の上に絵羽の羽織を着ていた。もうちょっと上の世代だと黒紋付きの羽織だったようだ。京都の昔の市井のきもの姿の女性のことを書いた本って、私が知らないだけかもしれないが、読んだことがない。まさかふだんから友禅は着ていないと思うけど、ふ

だん着は東京と同じだったのか、そうではないのか、そういった相違も知りたい。生産地としては日本で名だたるところだけれども、着ている人たちはどうだったのか知りたい。勝手に京都＝はんなりというイメージを作られた、地元の女の人も気の毒といえば気の毒だけど。それに反発する女の人たちもいただろうから、東京の女の人よりも、より個性的な方向に走ったような気がする。そういうところも知りたいものだ。

## 十二月二十日

東京風の究極のきもの姿は、沢村貞子(さわむらさだこ)さんや幸田文(こうだあや)先生だ。下町生まれの師匠や与志江先生、姉弟子のみなさんのきもの姿もとても素敵だ。シューズデザイナーの高田喜佐(たかだきさ)さんも素敵だし、大学教授の田中優子(たなかゆうこ)さんや、杉浦日向子(すぎうらひなこ)さんのきもの姿も、拝見するとほっとする。沢村貞子さんのきもの展で拝見したものは、どれも生地の質がよく柄付けがとても控えめで、粋(いき)で品がいいものばかりだった。青木奈緒さんがお稽古にきものでいらしたときなど、

「これは祖母が反物をしまっておいた箱から出てきたものを仕立てました」

などと話されると、失礼とは思いながら、目を皿のようにして興味津々になる。今は見られないかわいい型染めだったり、お母様の玉さんから譲られた、絞りが飛んだかわいい羽織だったり、祖母、母、娘へと、手を入れながら大切に受け継がれたものを拝見するのは、とても心が休まる。

うちの場合は、父親の仕事の失敗のため、母親のめぼしいきものは質屋さんに行き、彼女の一度手にしたものは絶対に離さないという性格上、母から娘に譲られたというものはない。

その逆なら山のようにあるが……。虚（むな）しい限りである。

### 十二月二十一日

きもののダイレクトメールが、次々に届く。

「うう……む」

ハガキを持つ手は震えるばかりである。

「仕事、やらなくちゃならないだろう。行く暇なんかないじゃないか」

と自分で自分に説教をして、何とか心を鎮める。

### 十二月二十二日

もう一度、届いたダイレクトメールを眺める。袋帯、礼装用のきものはともかく、洒落江戸小紋（しゃれえどこもん）にはめちゃくちゃ惹（ひ）かれる。

「ああ、そこここにスズメちゃんが飛んでいる……」

よろめきそうになったが、

「一生、不自由しないくらいあるだろう！」

と自分自身を叱咤（しった）して、欲望を振り捨てた。偉い、と自分で自分を誉めた。

### 十二月二十三日

今年最後のお稽古日。出来合いのベルベットのコートに先日の大判スカーフ。毎度おなじみの縞の郡上紬に、緑色のミンサー風柄の半幅帯。最近はコーディネートにも力をいれず、前と同じになっているのがとても多い。どんどんずさんになっていく。

師匠に、

「仕事としてお稽古にきもので伺うのも、今日で最後になりました」

というと、

「よく一年間、頑張ったわねえ。なかなかできないことですよ」

といっていただいた。夏が大変といわれていたし、私も「来るぞ、来るぞ」と緊張していたが、幸い、例年ほどの暑さではなかったのも、続けられた理由だろう。

「前から着ていらしたんでしょうけど、今年のはじめと今とでは、着方が全然、違うわよ。本当に自然になじんで見えるわ」

ともいっていただく。自分では着慣れたというよりも、「こんなもんでいいか状態」だったのに。ただ以前は、きものの着丈を整えるのさえ一苦労だったのが、羽織ると一度で決められるようになったのは、週に一回でも着た収穫だった。でも師匠や与志江先生みたいに、後ろに手をまわして、そのまますするっと貝の口を締めてしまうようにはできない。前で結んでぐるっと後ろに回している。結び慣れているはずなのに、ぴしっといかないときもある。きものだけではなく、和物は手測りというか、体で覚える部分がとても多いので、まだそれが完全に身についていないのだろう。

冬場には防寒対策が必要だが、あまりきものの中に着込むと、温度調節ができないので、不都合だとわかった。とにかく電車の中の暖房が暑くてしょうがない。いくらウールのスカーフを取っても、首から下がほっかほかなので、額に汗がにじんできた。そうはいっても薄



ミンサー、
リバーシブル、花織、
パッチワーク風など
ユニークな
半幅帯各種



12月25日
縞の会津木綿に
博多の半幅帯

着で外に出るわけにもいかず、いくら保温、放湿の肌着を着てきても限界がある。これもこれからの実験が必要だ。

**十二月二十四日**

毎年恒例で特別の約束もなく、ネコと一緒に、

「じんぐるべー」

と歌いながら過ごす。

**十二月二十五日**

昨日と同じく、肥満防止のためにケーキも食べず、

「じんぐるべー」

と歌いながら過ごし、ネコに嫌がられる。夜、縞の会津木綿のきものを着て、博多の半幅帯を締めてみる。やはり襟元が寒い。あまりぼてぼてしすぎない、室内用の文字通り「襟巻き」があるといい。また作らなくてはならないものが増えてしまった。きものに着替えた私を見て、ネコがびっくりした顔をしている。

「どこにも行かないよ」

といったのに、

「本当か？」

とずっと疑いのまなざしを向けられる。もう慣れたと喜んだのに、実はそうではなかったらしい。

十二月二十六日

朝方、ネコが外に出してくれと鳴くので、起きて戸を開けてやる。帰ってくるのを待って、ぼんやりとテレビを見ていたら、早朝の番組の女性キャスターのうちの一人が、生放送でフレンチスリーブのTシャツ姿で出ている。スタジオがどのくらい暑いかしらないが、いくら何でもこの季節に襟無しのフレンチスリーブはないのではないか。多少崩れつつあるにしても、きものには季節感がある。いくらスタジオ内が暑くても、この季節に浴衣では出られない。夏場を例にとれば自分は我慢しても相手に涼しい思いをさせる。寒いときはそれなりにきものは周囲の人に思いやりのある衣類なのだ。でもこれからは、そういう暴挙に出る人もいるかもしれない。

夜はこの書き下ろしの十一月分を渡すために、文庫本の体裁の打ち合わせを兼ねて編集者のKさんと食事。夜から天候が崩れるというので、きものはやめにする。食事をする店もたしかカウンター形式だったので、洋服のほうがいいような気がしたからだ。カウンターの高い椅子は、ちっこい私だと、ただでさえ、よっこいしょとよじ上る感じになるので、正解だった。結局、家に帰るまで雨は降らなかった。

十二月二十七日

正月休みにやりたいと思っていた端ぎれ一掃お針仕事の計画を練る。染め替えたり仕立て直した、羽裏（はうら）やコート裏、絹の端ぎれなどを眺めていると、あれもこれもと頭に浮かんでくる。針仕事や編み物をしていると、だんだん手が温かくなってくるが、デスクトップのパソ

コンで、インターネットをしていると、マウスを持った手がどんどん冷たくなってくるのがわかる。仕事はノートパソコンでしているので、手は冷たくならない。きもの関係の物もほとんど整ったので、これからはインターネットで買う必要もなくなった。いろいろな情報を得て、自分なりに試してみたけれども、結局、腰ひもは絹の楊柳（*ようりゅう）で、きものベルトではなく伊達締めといった、もとからしている方法に落ち着いた。やはり慣れというものが大きいのだろう。

## 十二月二十八日

和室のきもの類を整理しなければと、重い腰をあげて箱をあっちこっちに動かしていると、続々と浴衣や正絹の端ぎれが顔を出してきた。本当に整理整頓が苦手な性格である。

「おお、そういえばこんなものもあった」

とうれしくなったものの、うそつき袖用、つけ帯用と、それなりに目的を持って購入したのに、どれひとつとして形になっていないことに頭を抱える。どう考えても正月休み中には何も仕上げられない。それなのに夕方から買い出しに行って、書店に寄ったのが運の尽き。きものに合いそうなショールや、小さな残りぎれも使えそうな小物の本など、数冊を買ってしまう。やりたいことや予定ばかりが増えて行動が伴わない。そのうち願望と妄想で頭の中が充満して、爆発するんじゃないだろうか。

## 十二月二十九日

漫画家の西原理恵子（さいばらりえこ）さんと、二年半ぶりくらいに麻雀（マージャン）。麻雀をしながら、『鳥頭対談』

(朝日新聞社)のときに、二人で振袖を着たなあと思い出した。西原さんはまだ独身だったし、私も美少女だった(ものすんごい嘘)。成人式のときにきものを着なかったので、この対談の撮影がグッドチャンスと、振袖を着せてもらったのだが、歩くときに袖を踏んづけるわ、ばっさばっさと空気抵抗は受けるわで、持て余してしまい、手にぐるぐると巻きつけて歩く始末だった。

家で用事をしようとすると、ふつうの一尺三寸の袖でも持て余すから、筒袖だと便利だなあと思うのだが、地味な縞や格子好みの私としては、それこそ筒袖にすると、ねえやというよりも下働きになってしまうので、自粛している。筒袖の上っ張りを着れば問題はなさそうだが。

西原さんが大勝して、最終の新幹線で大阪に向かって旅立って行った。

**十二月三十日**

正月休みにしたい針仕事の夢は膨らむばかりだが、よーく考えてみたら正月明けに書き下ろし二冊分を完全原稿にして渡さなければならず、そんな暇はぜんぜんないのに気が付いた。正月休みって二十日くらいあるような気がするが、実は十日くらいしかない。おまけに一月末に一挙掲載分の締切りがあり、資料を読み返して、連載分とも百五十枚を書かなくてはならず、実はお尻に火がついている。考えてみれば、毎年、こんな調子でやり残した仕事を正月休みにやっていた。仕事を全部終えて、針仕事に没入したい。

夜、ビデオで予約録画をしようとセットしたら、本体からものすごい音がして壊れてしまった。さすがに十六年も使っていたので、限界がきたらしい。ビデオデッキをはずして、D

VDレコーダーに配線をし直して、こちらで録画再生できるようにした。和裁よりも配線のほうが私には向いているようだ。

正月にきものを着たくなるかもと思い、結城紬に絞りを施した羽織を、きものハンガーにかけておく。それを見ただけでも、ネコがぎくっとしている。

「だから、どこにも出かけないんだってば」

いつきもの姿の私に慣れてくれることやら。

## 十二月三十一日

とうとう最終日がやってまいりました。あっという間の出来事だった。これまでは自分の都合のいいときにだけ、きものを着ていたが、今年は雨の日でも風の強い日でも着た。それがとても勉強になった。夏場のきものの素材はたくさんあるが、そのなかで自分に合ったものもみつかったし、それは着てみないとわからなかった。行く場所によっては、他人からどう見えるかも考えなくてはならないだろう。きものには自分勝手では済まない部分がある。きものを着る若い人が増えるのはうれしいが、そこのところもわかってほしい。

実家のローンを払い終わった暁には、袷や出かけるときの単衣は、人様に縫っていただいた手持ちのものを着て、ネコにも慣れてもらって、家で着るときは自分が縫った単衣のきものや繻袢で過ごしたい。できればそれまでに足袋作りもマスターしたい。そしてなるべく仕事はせずに、日々本を読み、三味線を弾いて、ネコとのんびり暮らしたいというのが私の夢である。いつになったらそんな生活ができることやら。

# あとがき



縞の泥大島に桜の柄の染帯。
「私にしては画期的に
女らしい組み合わせ」
（3月10日のコーディネート）

一年間、よほどのことがない限り、きものを着る生活をしてみて、あらためてきものに対する考え方や、自分はどうしたいのかがわかって、とても勉強になった。若い頃は少しでも他の人と違って見せようと、奇をてらいがちになっていたような気がする。たとえば裾回しに別染めの小紋をつけるのに凝ったりしていたが、今になるとどこかがんばりすぎていた自分を思い出す。それよりも無地ですっきりと着るほうが、五十代を迎える私の気持ちにぴったりするので、手入れをするついでに、順番に無地の裾回しに仕立て直してもらっている。

とにかくあっさりと、そしてどこかきりっとしたところがあるように着られればいい。それは回数を着なくてはわからなかった。たまーに自分の気分で着るだけでは、ただうれしい

だけで深くは考えられなかったからである。正直いって、雨のときなどは面倒くさいなと感じた日もあった。でもこの半強制的な部分をクリアしたことで、日常に着るとなると、人からは見えない、気持ちの部分が大切だなと思うようになった。これからのきもの生活への方向が見えてきたのだ。

周囲の方々も、きものに関する情報を、たくさん教えてくださった。与志江先生によると、お腹の贅肉を補正に使う方法があるという。若い人には関係ないかもしれないが、中高年にとっては大きな問題である。余っている腹の肉を上にたくし上げてから、腰ひもを締める。そうなると腰ひもが肉で止められて、絶対に上にずり上がってこないし、贅肉が帯を巻くときの補正がわりになるというのである。帯位置は下目になるが、これも年輩者の着方である。若い人は贅肉もないだろうから、高めに帯を締めても問題はない。年齢によって変化する体型によって、着方が変わっていくのだ。

私の場合、ひもはウエストに締めていたが、そうなると下腹の贅肉は野放しで、妙におはしょりがふくらんで見えた。気がつくとそのつど腹をひっこめてごまかしていたが、気がゆるむと、腹はせり出る。洋服のシルエットを気にする若い人は、余った肉を寄せて集めて乳にするけれども、きものを着る中高年は余った肉を補正に利用する。持てあます贅肉にも、使い道はあったのである。人それぞれに快、不快は違うから、自分の着やすいようにすればいいけれど、これから歳を重ねるにつれ、少しでもましに見えるように気をつけたい。

一年間、師匠、与志江先生、姉弟子をはじめ、小唄の「せい吉会」の方々に励ましていた

だいた。それがなかったら、途中で挫折していたのは間違いない。本に載っていないたくさんのコツも教えていただいて、本当にありがたいと感謝の気持ちでいっぱいである。これからも年上の方々に教えていただいたことを参考にして、ずっと楽しくきものを着ていきたいと考えている。



お稽古に伺うたびに
「きものの師匠」としても
すっかりお世話になった
春日とよせい吉先生と

# きもの用語集

## 【あ行】

**汗取り**　汗じみなどを洗わず取る簡単なきものの手入れ方法。または吸湿性を高めた「汗取り襦袢」のこと。

**アップルコート**　商品名。ポリエステル製の晴雨兼用の軽いコート。

**袷**（あわせ）**裏**（胴裏と裾回し）を付けて仕立てたきもの。十月から翌五月まで着る。

**あんどん**　きものが裾広がりになった状態。

**イカット**（Ikat）　東南アジア周辺で織られている絣（かすり）の織物。柄に合わせて糸をくくって染めるところに特徴がある。

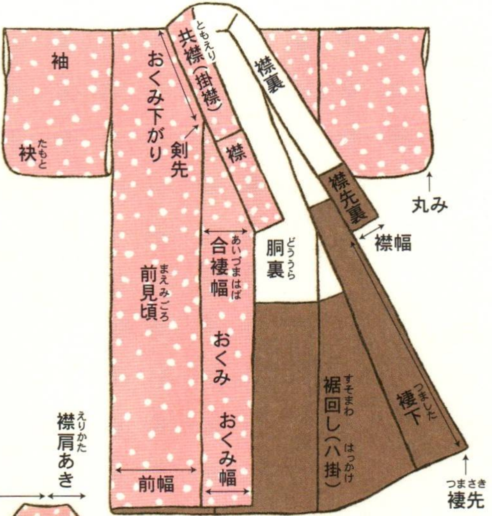
**生洗い**（いきあらい）　きものをほどかずにそのまま洗うこと。丸洗いともいう。いったんきものをほどいて洗い、仕立て直すのは洗い張り。

**居敷当て**　透けやたるみ防止、補強のために、単衣や薄物の後ろ身頃の裏にあてる布。以前は臀部（でんぶ）だけだったが、現在は繰り越し揚げのあたりから下へ、下半身をおおうようにつける。

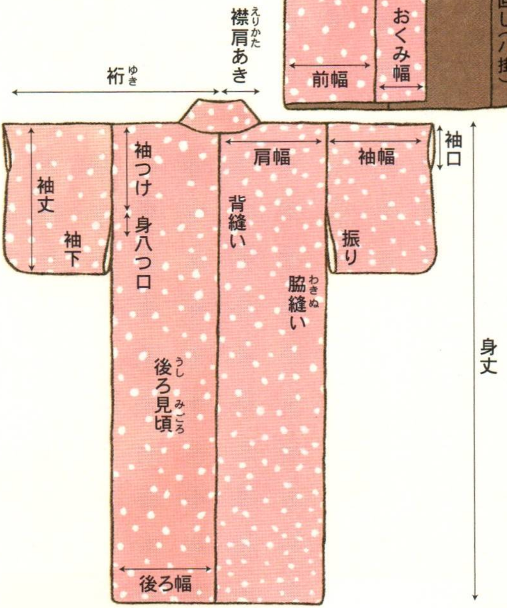
**伊兵衛織**　静岡産の太糸で織り上げた絹織物。紬織物を代々受け継いできた浜松の旧家、高林家当主の名前に由来する。

**印伝**　印伝革の略。羊または鹿のなめし革で、柔らかく、染料や漆で模様をつける。

# きものの各部分の名称



共襟(ともえり)(掛襟)
襟裏
袖
おくみ下がり
剣先
襟
袂(たもと)
襟先裏
丸み
襟幅
合褄幅(あいづまはば)
胴裏(どううら)
前見頃(まえみごろ)
おくみ
裾回し(すそまわし)(八掛(はっかけ))
褄下(つました)
おくみ幅
前幅
褄先(つまさき)

襟肩(えりかた)あき
裄(ゆき)
袖口
肩幅
袖幅
袖つけ
袖丈
身八つ口
背縫い
袖下
振り
脇縫(わきぬ)い
身丈
後(うし)ろ見頃(みごろ)
後ろ幅

右近下駄　台の高さが低く、緩やかなカーブがついている。歩きやすくふだん履きによい。
薄物　絽や紗、麻や上布など、盛夏（七、八月）に着るきもの。
うそつき　袖や裾除けは襦袢の生地を使い、身頃は綿など他の布を使った襦袢。
上前　きものの前を合わせたとき、上になる部分。左側の前身頃。
絵羽　絵羽模様、絵羽羽織の略。縫い目で模様がとぎれず、身頃、おくみなどにまたがって一つの絵になっている。きもの全体に模様付けしたものは「総模様」という。
おくみ　きものの前の左右に縫い足した半幅の布で、上は襟に続き、下は褄に至る。
御高祖頭巾　防寒用や顔を隠すために用いた女性用頭巾。高祖日蓮上人の被り物に似ていることからこの名が付く。
おはしょり　きものを着るとき、着丈より余った部分を腰の上にたくし上げ折り返しておくこと。またはその部分。
帯付き　羽織やコートなどを着ない、きものと帯の装い。
帯枕　帯をお太鼓などに結ぶとき、立体感を出すために使う道具で、帯揚げをかけて用いる。
お召　御召縮緬の略。かつて徳川家斉が好んだ。特別な方法で表面にしぼを出した絹織物でシャリ感が特徴。主産地は京都西陣、群馬桐生、新潟十日町。

## 【か行】

貝の口　角帯や女性の半幅帯の結び方。（317頁参照）

**鏡文字**　鏡に写した時のように、左右が逆になった文字。

**角通し**　江戸小紋の文様の一つ。鮫（さめ）小紋、行儀（ぎょうぎ）小紋とともに江戸小紋三役と呼ばれる。型紙に錐（きり）であける細かな正方形を、整然と並べた文様で、遠目には無地に見える。

**片貝木綿**　新潟県小千谷市片貝で生まれた木綿地。手紡ぎ糸を使用した素朴な風合いの草木染めの綿織物。

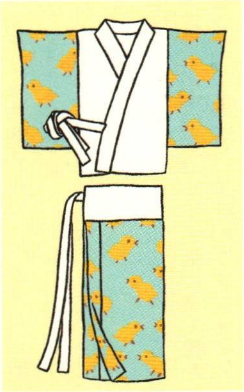
**片身替わり**　身頃の模様が半身ずつ違うきもの。

**からす表**　草履や雪駄で、黒っぽくいぶした素材（畳、竹など）を使用したもの。

**苧麻（からむし）**　越後上布や宮古上布の原料となる麻。木綿以前の代表的な繊維。

**観世流水**　文様の一種。渦を巻いた水の文様で、もともと能楽の観世家の紋所だった。

**菊菱**　江戸小紋の文様の一つ。菱形の菊を整然と並べたもの。



うそつき

着尺　大人のきもの一枚を仕上げるのに必要とする生地の分量。一般的に幅鯨尺九寸五分（約三十六センチ）、長さ三丈（十一・三六メートル）程度。

吉弥結び（きちや）　もともとは江戸時代の女形・上村吉弥が用いた帯の結び方。現在では、その呼び名で何種類かの結び方がある。

切りばめ模様　模様の異なる布地の小片をつなぎ合わせて作った、（または染めた）模様。

切りビロード　模様部分の糸を刈り込み、高低で出す模様。コート地に多く使われる。（317頁はその一例）

組み出し　帯締めの組ひもの組み方。糸を帯留めに通して、帯留めの中心から左右に組み出していく。

繰り越し　和裁の用語。きものや長襦袢などの襟あきを肩線よりも後ろにあけること。

繰り越し揚げ　繰り越しをつけるため、後ろ身頃の帯の下になる位置にとった揚げ。

繰りまわし　きものや襦袢などが傷んだときなどに、その部分が表から見えない場所に来るよう、仕立て直したり、他のものに作り直したりして活用すること。

献上柄　福岡藩黒田氏が江戸幕府に献上していた帯柄で、独鈷（とっこ）と華皿（はなざら）という連続模様に縦縞を配したもの。

小石丸　日本古来の蚕。糸は細く、艶・張力に優れる。量産に向かず幻の絹といわれる。

紅梅（こうばい）　高級浴衣地の一種で、格子状に太い糸を織り込んだ生地。織り込む糸が絹だと絹紅梅、綿だと綿紅梅という。

コーマ地　綿糸の中でも細いコーマ糸で織った生地。細い糸で織るので肌触りがよい。

# きもののアイテム一覧



## 【さ行】

**酒袋**　日本酒を絞るときに使う袋。素材として袋などにも珍重され、草履に使うときは表面に漆加工がされている。

**三分紐**　帯締めの一種。幅が三分（約九ミリ）で、通常より狭い。帯留めなどに通して使用。

**塩瀬**　塩瀬羽二重の略。新潟県五泉市が主産地。厚地の平織の羽二重で、密な経糸(たていと)に太い緯(よこ)糸(いと)を織り込むので、布面に横畝が表れるのが特徴。

**下前**　きものの前を合わせたとき、下になる部分。右側の前身頃。

**七宝**　代表的な吉祥文様の一つ。同じ大きさの円を、円の一部を重ねながら上下左右につないだ文様で、めでたさを象徴する。

**しぼ**　織物の糸の撚(よ)り具合でできる織物の表面の凹凸。

**じゃじゃ織**　奄美大島の方言で、残糸織のこと。大島紬の残り糸を使用した織物だが、安価なわりに個性的なものが多く珍重される。

**洒落袋帯**　金糸銀糸を使わず、色糸だけで柄を織り出した袋帯（礼装には使用しない）。

**上布**　細い麻糸を用いて平織にした上等の麻布。越後上布、八重山上布、宮古上布など。

**ぜんまい織**　山菜のぜんまいの若葉についている綿毛の部分を糸に混ぜて紡ぎ、織ったもの。防水性に富み独特の風合いがある。

## 【た行】

対丈（ついたけ）　あらかじめ着丈に合わせて仕立てたきもの。男性の長着など。
綴（つづれ）　綴織のこと。緯糸に色糸を使い一本一本織り込み、模様をあらわす織物。
爪革　雨の日や防寒用として下駄のつま先につけるもの。取り外しできる。
て　帯の部分の呼び方で、最初に胴に巻いていく方を差す。お太鼓に作るほうは「たれ」。
天　草履や下駄の足裏の接する平らな部分。表ともいう。
燈芯　襦袢などに汗取りのため入れる芯。木綿でよく汗を吸う。
道中着　防寒とちりよけを兼ねた外出用のコートで、襟のうち合わせはきものと同様。
胴抜き　裏地を、裾回しだけつけて仕立てること。胴裏のない分、軽い着心地で楽であり、季節の変わり目にも重宝する。または、袖口や裾などを、胴の部分と違う別の裏地で仕立てること。
飛び絞り　絞りを全体にほどこす総絞りとは違い、飛び飛びに絞りをほどこしたもの。
泥大島　大島紬の一種。植物染料の車輪梅で絹を染め、鉄分の多い泥につけて何回も繰り返し染め上げた糸で織った紬のこと。つややかな黒、濃い茶色になる。
トンボ　つけ帯などの太鼓結びがずれないよう、胴帯に差し込んで帯を固定する器具。
トンボ玉　中心に穴の開いたガラス製の丸玉。帯留めにも使われる。

## 【な行】

並幅　最も一般的な反物の幅。鯨尺九寸五分（約三十六センチ）内外。

## 【は行】

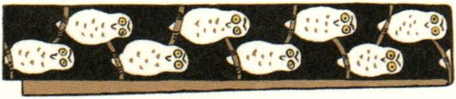
単衣（ひとえ）　袷に対し、裏を付けないで仕立てたきものや帯。とくに、盛夏に着る薄物に対し、六月と九月に着用するきものを指す場合が多い。
一越縮緬（ひとこし）　縮緬の一種。織物では経糸は一本、二本、緯糸は一越、二越と数え、普通の縮緬は緯糸を左右交互に二越打ち込むが、それを一越にしたもの。しぼが細かく仕上がる。
袋（になる）　表地と裏地がぴったり添わなくなり、間に空気が入ってふくらんだような状態。
振り違い　片身替わりのように、袖の左右で色や柄を違えたもの。
文庫　女帯の結び方。半幅帯を結ぶときや花嫁衣裳でも結ぶ。（317頁参照）
ヘンプ（Hemp）　外国産の比較的安価な麻。
本天　正絹のビロードのこと。鼻緒などに用いられる。

## 【ま行】

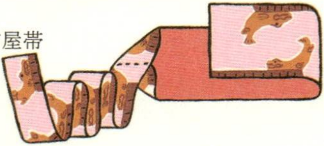
前壺　鼻緒の前側の親指と人指し指ではさむところ。
三河芯　半襟の下につける襟芯の一種。幅約十一センチ、長さ約百二十センチで、丈夫なの

# 帯と帯結び

袋帯



名古屋帯



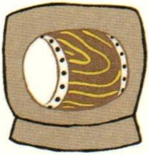
半幅帯



貝の口



お太鼓



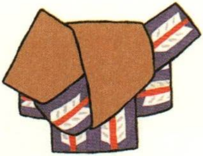
文庫



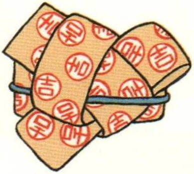
角出し



ヤの字



吉弥結び



が特徴。

道行　道中着の中でも、襟開きを四角にし、小襟を額縁状につけた「道行襟」に仕立てた女物コート。道中着よりもあらたまった雰囲気で、礼装にも用いられる。

蓑虫　ミノムシの蓑袋を加工して素材としたもの。草履、バッグや財布などの材料にも用いられる。

ミンサー　沖縄の八重山諸島一帯で織られている帯用の綿織物。

無双　無双仕立ての略。袷の仕立て方の一つで、表も裏も同じ生地で仕立てること。

銘仙　関東地方で織られていた平織の絹織物。くず糸や節のある生糸を使用したため安価で、丈夫なので、ふだん着に多く用いられた。

綿唐桟　室町から江戸時代に南蛮船でもたらされた木綿の縞織物の総称。

紋織　紋織物の略。平・斜文・繻子織など各種の組織を組み合わせたり色糸を使ったりして、種々の地紋を織り出した織物の総称。

## 【や・ら・わ行】

柳絞り　絞りの一種。柳のような線模様が特徴。

ヤの字　女帯の結び方。片仮名の「ヤ」の字に形が似ていることから。（317頁参照）

湯文字　腰に巻きつけて使う和装用の下着。つけ方によってガードルのような効果がある。

冠組（ゆるぎぐみ）　表面の中央に一本溝がある帯締めの組み方で、礼装からふだん着まで幅広く使える。

平安時代、烏帽子(えぼし)を結ぶひもの組み方だったのが名の由来。

**楊柳**　織り上げた布を凹凸のある二個のロールの間を通してしぼを出した織物。半襟、下着、襦袢などに用いられる。

**吉野間道**　著名な茶人が珍重した名物裂(ぎれ)の織物。高級品とされ、縦縞に独特の横縞が特徴。京都の豪商・灰屋紹益が吉野太夫に贈ったのが名の由来。間道は縞の織物の呼称。

**両面染め**　白い糸のまま織った白生地を染める後染めのなかでも、表裏両面を染めたもの。同じ布の裏面に別の染色や型染めをほどこすことができる。

編集協力　オフィス　イング
小針朋子

集英社文庫

きもの365日(にち)

2004年5月25日　第1刷　　定価はカバーに表示してあります。
2018年11月7日　第4刷

著者　群(むれ)　ようこ

発行者　徳永　真

発行所　株式会社　集英社
東京都千代田区一ツ橋2-5-10　〒101-8050
電話　【編集部】03-3230-6095
【読者係】03-3230-6080
【販売部】03-3230-6393（書店専用）

印刷　図書印刷株式会社

製本　図書印刷株式会社

フォーマットデザイン　アリヤマデザインストア　　マークデザイン　居山浩二


ISBN978-4-08-747700-9 C0195